鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書　(21)

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

―― XII ――

木 場 A 遺 跡（姶良郡栗野町）
木場A－2遺跡（姶良郡栗野町）
木 場 B 遺 跡（姶良郡栗野町）
堀 ノ 内 遺 跡（姶良郡吉松町）

1982. 3

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会

序　　文

九州縦貫自動車道（えびの～鹿児島）建設に伴う姶良郡栗野町木場A，木場A－2，木場B遺跡及び姶良郡吉松町堀ノ内遺跡の発掘調査は，昭和53年12月11日から昭和55年2月21日までの間実施し貴重な発見をしました。

その後，昭和56年度に整理を行い，ここに「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ」として発刊することになりました。

県教育委員会では，この報告書が文化財保護及び文化財愛護思想普及のため広く活用されることを願っています。

発刊に当たり，日本道路公団はじめ栗野町・吉松町教育委員会及び調査に協力していただいた地元の方々に対し，心から感謝の意を表します。

昭和57年3月

鹿児島県教育委員会
教育長　井之口　恒　雄

調 査 の 状 況

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の経緯は，これまで刊行した「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－」で辻べたとおりで昭和46年，姶良郡姶良町小瀬戸遺跡の調査に始まり昭和55年２月21日、木場Ａ遺跡を最後にすべてを終了した。

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

（昭和46年～昭和56年３月）

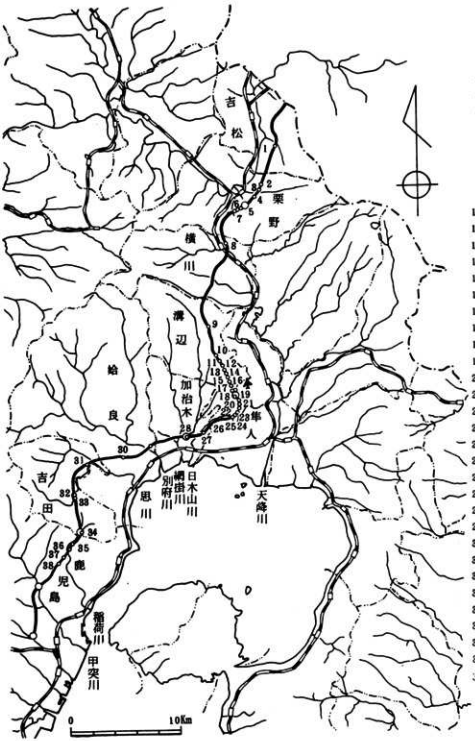
番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	調査員	概要
1	堀之内B	吉松町川添	54. 9. 10 ～ 54. 9. 27	500	立神 青崎	○土師式土器の散布
2	木場A	栗野町木場	一次 53. 12. 11 ～ 54. 3. 31 二次 54. 8. 28 ～ 55. 2. 22	14,000	牛ノ浜 新東 宮田 池畑 長野 中島	①旧石器時代（ナイフ形石器，細石器，剥片）集石遺構 ②縄文時代（早期～後期）土器，石器，集石遺構 ③土師式土器散布
3	木場B	〃	54. 8. 28 ～ 54. 11. 24	4,500	新東 出口 弥栄 中島	○土師式土器の散布 ○中世溝状遺構
4	木場C	〃	53. 11. 27 ～ 54. 1. 13	2,700	長野 出口 中村	①縄文時代（集石遺構・土器・石器） ②古墳時代（土器） ③中世（土器・土錘・砥石）
5	山崎A	栗野町木場	52. 12. 13 ～ 53. 3. 26	6,000	吉永 牛ノ浜	①縄文時代土器片 ②古墳時代土器片・集石遺構 ③奈良～平安時代，土師器，須恵器，建物跡
6	山崎B	栗野町米永	53. 4. 10 ～ 54. 10. 12	21,800	牛ノ浜 西田 中島 出口	①旧石器時代（細石刃核・細石刃） ②縄文時代（早～後期）土器，石器，集石遺構，土壙 ③中世（掘，建物跡・土器，土錘，砥石）

7	山崎C	栗野町米永	52. 12. 13 ～ 53. 3. 26	3,000	中村 西田	●土師器，須恵器，青磁片の散布
8	中尾田	横川町中野	53. 5. 15 ～ 54. 10. 6	9,800	新東 中島 井ノ上	●①縄文時代，早・前・中期土器，石器，集石遺構 ②中世山城，建物遺構，陶磁器
9	木佐貫原	溝辺町木佐貫	51. 2. 6 ～ 52. 11. 31	17,000	吉永 牛ノ浜	●①縄文時代（前期・後期）土器片 ②土師器片
10	石峰	溝辺町麓	一次 50. 10. 2 ～ 50. 12. 19 二次 51. 11. 24 ～ 53. 5. 15	20,000	河口 出口 西田 戸崎 青崎 池畑	●①縄文式土器 （草創期～晩期）石器，住居址I，集石遺構 ②弥生式土器 ③土師器，溝状遺構 ④陶磁器
11	柳ケ迫	〃	51. 3. 22 ～ 51. 5. 17	700	長野 西田	●①旧石器時代（細石器） ②縄文時代（後期）土器片
12	長ケ原	〃	50. 10. 1 ～ 50. 11. 28	1,140	新東 中村	●①旧石器時代（細石器） ②縄文時代（前期）土器片 ③弥生時代（後期）土器片
13	松木原	〃	50. 9. 18 ～ 50. 9. 26	420	新東 池田 中村	●弥生時代（後期）土器片，黒曜石
14	葛根原	〃	50. 9. 8 ～ 50. 9. 26	790	新東 池畑 中村	①弥生時代（後期）土器片，石鏃（黒曜石）
15	七ツ次	〃	50. 8. 5 ～ 50. 9. 18	2,700	弥栄 池畑 中村	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片
16	松ケ迫	〃	50. 7. 14 ～ 50. 8. 11	600	弥栄 立神	●①弥生時代（後期）土器片
17	木屋原	〃	50. 4. 7 ～ 51. 3. 31	4,520	弥栄 立神	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片
18	山神	〃	49. 6. 13 ～ 50. 4. 28	6,950	平田 牛ノ浜 吉永 立神	●①縄文時代(前・後期)土器片 ②弥生時代（後期）土器片 ③平安時代・建物遺構，溝状遺構，須恵器，土師器，墨書土器 （奬，廣～坏2，破片15）

19	曲　迫	溝辺町麓	50. 1. 27 ～ 50. 3. 31	4,000	諏　訪 弥　栄	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片 ③土師器片
20	朽　場	〃	49. 6. 5 ～ 50. 3. 27	2,500	平　田 牛ノ浜 吉　永	●①縄文時代（前・後期） 土器片
21	西　免	隼人町西光寺	49. 5. 25 ～ 50. 2. 8	1,500	平　田 吉　永	●①弥生時代（後期）土器片 ②玉髄，黒曜石 ③土師器片
22	中　尾	〃	49. 9. 25 ～ 50. 2. 10	2,500	出　口 吉　永	●①縄文時代（後期）土器片 ②弥生時代（終末期）土器片， 磨製石鏃 ③土師器片
23	入　道	〃	49. 8. 5 ～ 50. 3. 31	1,720	出　口 吉　永	●古墳時代（終末期）土器片， 石鏃，土師器，溝状遺構，古 道跡？
24	南十三塚	溝辺町崎森	49. 7. 16 ～ 49. 9. 20	600	出　口 中　村	●弥生時代（終末期）土器片
25	東　原	〃	49. 9. 17 ～ 50. 1. 24	8,700	諏　訪 弥　栄 中　村	●①縄文時代（早期）土器片 ②弥生時代（後期）土器片， 住居跡1基 ③土師器片
26	桑ノ丸	〃	49. 8. 1 ～ 50. 4. 25	8,750	新　東 牛ノ浜 中　村	●①縄文時代（早・前・後期） 土器片，石斧，石鏃
27	三代寺	加治木町 日　木　山	49. 3. 15 ～ 49. 7. 31	2,300	河　口 新　東 弥　栄 牛ノ浜	●①縄文時代（早・前期）土器 片，石斧，石鏃，集石遺構 ②弥生時代（終末期）土器片 ③土師器，土坑，ピット群
28	建馬場	加治木町反土	46. 12. 8 ～ 46. 12. 12	180	盛　園 立　神	①弥生時代（後期）土器片
29	松木田	姶良町鍋倉	46. 12. 12 ～ 46. 12. 15	42	盛　園 立　神	①柱穴 —— 22個
30	小瀬戸	姶　良　町 西　餅　田	46. 8. 20 ～ 46. 11. 2	3,050	河　口 戸　崎 立　神 尾ノ上 中　間 有　元	①縄文時代（前期）土器片 （塞ノ神） ②弥生時代（中期）土器片 ③墨書土師器（伴，大伴，原 仲家），青磁，白磁，緑釉陶 器，須恵器，防錘車，土錘， 井戸枠，木製品， 柱穴群，溝状遺構，井戸

31	小　山	吉田町 東佐多浦	46. 11. 6 ～ 47. 2. 10	1,050	河　口 戸　崎 立　神 尾ノ上 中　間 有　元	①縄文時代（早・前期）土器片，(吉田，塞ノ神）集石 ②弥生時代，土器片 ③土師器，須恵器，青磁，白磁，緑釉陶器，滑石製石鍋
32	谷　口	吉田町本城	46. 11. 10 ～ 46. 11. 18	124	盛　園 立　神	①縄文時代（後期）土器片，黒曜石石剥片 ②弥生時代，土器片 ③土師器，白磁，滑石製石鍋
33	上城城址	〃	47. 1. 14 ～ 47. 1. 18	20,000 現地踏査	盛　園 田野辺	①中世～山城，青磁，白磁，瓦器
34	宮　後	吉田町 宮ノ浦	46. 11. 10 ～ 46. 11. 18	44	盛　園 田野辺	①縄文時代（晩期）土器片，石鏃（黒曜石） ②土師器
35	木の迫	鹿児島市 川上町	50. 12. 9 ～ 50. 12. 11	300	立　神 牛ノ浜 吉　永	●①弥生時代（後期）土器片
36	加治屋園	〃	50. 11. 26 ～ 51. 7. 31	1,200	弥　栄 新　東 長　野 中　村	●①細石器～（細石刃，細石刃核）同時期土器片（有文） ②縄文時代前期土器片（塞ノ神式）集石遺構 ③縄文時代，中期～後期
37	加栗山	〃	50. 12. 15 ～ 51. 10. 16	30,600	戸　崎 青　崎 立　神 吉　永 牛ノ浜 中　村	●①細石器～（細石刃，細石刃核）石鏃13，局部磨製石斧，大型加工台形様石1 ②縄文時代（早・前期）土器片，住居跡17，土坑72，集石遺構14，石鏃，除陽石（軽石製） ③中世～山城，柵列跡，空堀柱穴，青磁，瓦器
38	神の木山	〃	50. 5. 12 ～ 50. 5. 15	20	戸　崎 青　崎	●①耕作土の下部はシラス層で遺物なし

（●は，調査報告書発行終了）



遺跡名

1. 堀之内B
2. 木場A
3. 木場B
4. 木場C
5. 山崎A
6. 山崎B
7. 山崎C
8. 中尾田
9. 木佐貫原
10. 石峰
11. 柳ケ迫
12. 長ケ原
13. 松木原
14. 島根塚
15. 七ツ次
16. 松ケ迫
17. 木屋原
18. 山神
19. 曲迫
20. 屏場
21. 西免
22. 中尾
23. 入道
24. 南十三塚
25. 東原
26. 桑ノ丸
27. 三代寺
28. 建馬場
29. 松木田
30. 小瀬戸
31. 小山
32. 谷ノ口
33. 上城址
34. 宮後
35. 木の迫
36. 加治屋園
37. 加栗山
38. 神の木山

縦貫道全遺跡地図

木場A遺跡

例　　言

1．この報告書は，九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設に伴って昭和53年～昭和54年度に発掘した木場A遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団からの受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆は，つぎのとおりである。

第1章，第2章，第3章，第4章第1節，第5章 …… 牛ノ浜

第4章第2節，第3節，第5章 …… 出　口

第4章第4節，第5章 …… 池　畑

なお，現場写真，実測図等は調査担当者が主として行ったが，縄文時代石器実測図・トレースは，文化課職員，中村耕治，繁昌正幸，峯崎幸清の協力を得た。

4．出土品は，文化課収蔵庫に保管している。整理，復元作業は，収蔵庫の整理作業員が行なった。

5．本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。

6．発掘調査，報告書作成にあたり，鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏に指導，助言を得た。旧石器時代の遺物は岡山大学稲田孝司氏に指導を得た。

目　　次

序　　文…… 1
調査の現況…… 2
例　　言…… 7

第１章…… 12
第１節　調査に至るまでの経過…… 12
第２節　調査の組織…… 12
第３節　調査の経過（日誌抄）…… 13

第２章　遺跡の位置及び環境…… 17

第３章　調査の概要…… 20
第１節　区割の設定…… 20
第２節　層　　序…… 23

第４章　遺構・遺物…… 30
第１節　旧石器時代…… 30
(1)　遺　　構…… 30
(2)　遺　　物…… 30
(3)　小　　括…… 31
第２節　縄文時代…… 39
(1)　遺　　構…… 39
(2)　遺　　物…… 45
(3)　小　　括…… 86
第３節　弥生時代…… 89
第４節　古墳時代…… 90
第５節　中　　世…… 92
(1)　遺　　構…… 92
(2)　遺　　物…… 97
(3)　小　　括…… 102
第６節　近　　世…… 103

第５章　まとめにかえて…… 104

挿 図 目 次

第１図　木場Ａ遺跡の位置及び周辺遺跡…16
第２図　木場Ａ遺跡地形図及びグリッド…21
第３図　地層図（１）…… 24
第４図　地層図（２）…… 25
第５図　地層図（３）…… 26
第６図　地層図（４）…… 27
第７図　地層図（５）…… 28
第８図　第Ⅵ層下部遺物分布図 …… 29
第９図　集石９ …… 32
第10図　集石11 …… 33
第11図　旧石器時代遺物（１）…… 34
第12図　旧石器時代遺物（２）…… 35
第13図　集石分布図 …… 38
第14図　縄文時代集石１ …… 39
第15図　縄文時代集石２ …… 39
第16図　縄文時代集石３ …… 40
第17図　縄文時代集石５ …… 40
第18図　縄文時代集石６ …… 41
第19図　縄文時代集石７ …… 41
第20図　縄文時代集石８ …… 42
第21図　縄文式土器類別分布図 …… 43
第22図　１，２類土器 …… 46
第23図　３，４類土器 …… 47
第24図　４類土器 …… 48
第25図　５類土器 …… 49
第26図　５類土器 …… 50
第27図　６類土器 …… 51
第28図　７類土器 …… 52
第29図　８類土器 …… 53
第30図　９～13類土器 …… 54
第31図　石鏃層位別分布図 …… 57
第32図　石鏃（１）…… 61
第33図　石鏃（２）…… 62
第34図　石鏃（３）…… 63
第35図　石鏃（４）…… 64
第36図　石鏃（５）…… 65
第37図　磨製石斧 …… 72
第38図　縄文時代石器分布図 …… 73
第39図　石匙 …… 75
第40図　石錐・石槍・石核 …… 76
第41図　加工痕のある剥片 …… 77
第42図　使用痕のある剥片 …… 78
第43図　使用痕のある剥片・つまみ形石器・
　　抉り入り石器 …… 79
第44図　蜂ノ巣石 …… 80
第45図　磨石・凹石 …… 81
第46図　弥生式土器（１）…… 89
第47図　弥生式土器（２）…… 90
第48図　古墳時代の土器 …… 91
第49図　道路跡 …… 92
第50図　土坑１とその出土遺物 …… 93
第51図　土坑２ …… 94
第52図　土坑３ …… 94
第53図　１号溝とその出土遺物 …… 95
第54図　２号溝 …… 96
第55図　土師器・須恵器 …… 98
第56図　磁器・陶器 …… 100
第57図　瓦質土器 …… 101
第58図　土製品・石製品 …… 102
第59図　古銭 …… 103
第60図　近世の陶磁器 …… 103

図 版 目 次

図版1　層　　序 …… 105
図版2　1．旧石器時代集石　2．集石と炭化物 …… 106
図版3　1．集石と断面　2．ナイフ形石器出土状態（頁岩）…… 107
図版4　1．ナイフ形石器出土状態（黒曜石）　2．剝片石器出土状態 …… 108
図版5　1．細石刃・調整剝片・ナイフ形石器・スクレイパー　2．剝片（1）…… 109
図版6　1．剝片（2）　2．剝片（3）…… 110
図版7　1．剝片（4）　2．剝片（5）…… 111
図版8　1．発掘状況　2．縄文時代集石1．2．3 …… 112
図版9　1．集石1．2．6類土器出土状態 …… 113
図版10　1．有柄石鏃出土状態　2．蜂ノ巣石出土状態 …… 114
図版11　1．1類土器　2．1類土器 …… 115
図版12　1．1類土器　2．2類土器 …… 116
図版13　3類土器・4類土器 …… 117
図版14　4類土器 …… 118
図版15　1．5類土器　2．5類土器 …… 119
図版16　1．5類土器　2．5類土器 …… 120
図版17　6類土器 …… 121
図版18　1．7類土器　2．7類土器 …… 122
図版19　1．7類土器　2．8類土器 …… 123
図版20　1．8類土器　2．8類土器 …… 124
図版21　1．10～13類土器　2．9類土器 …… 125
図版22　石鏃（1）…… 126
図版23　石鏃（2）…… 127
図版24　石鏃（3）…… 128
図版25　石鏃（4）…… 129
図版26　石鏃（5）…… 130
図版27　1．磨製石斧　2．石匙 …… 131
図版28　1．石錐・石槍・石核　2．加工痕のある剝片 …… 132
図版29　1．使用痕のある剝片　2．剝片・つまみ形石器・抉り入れ石器 …… 133
図版30　1．蜂ノ巣石　2．磨石・凹石 …… 134
図版31　1．弥生式土器口縁部　2．弥生式土器底部 …… 135
図版32　1．道路跡　2．土坑 …… 136
図版33　1．溝状遺構　2．土師器皿出土状態 …… 137

図版34　1．古墳時代の土器　2．古墳時代の土器 …… 138
図版35　1．土師器皿　2．土師器皿　3．青磁　4．陶器 …… 139
図版36　1．青磁　2．青磁 …… 140
図版37　1．陶器　2．瓦質土器　3．近世の陶磁器 …… 141

表　目　次

表1　旧石器時代石器一覧表 …… 36
表2　石鏃一覧表 …… 66
表3　縄文時代石器分類表 …… 83
表4　古墳時代の土器一覧表 …… 90
表5　土師器一覧表 …… 97
表6　磁器一覧表 …… 99
表7　陶器一覧表 …… 101

第1章 序　　説

第1節 調査に至るまでの経過

日本道路公団は，昭和47年2月23日「日本道路公団の建設事業等，工事施行に伴う埋蔵文化財包含地の取り扱いに関する覚書」に基づき，鹿児島線（吉松～加治木線）の埋蔵文化財についての協議を求めた。これに対し，鹿児島県教育委員会は，昭和47年8月2日～10日，同月18日～26日までの2回にわたり，延長38km，幅2kmにわたって分布調査を行った。この結果に基づいて，文化室は路線の決定については，埋蔵文化財の保護の上から十分配慮されることを要望した。

さらに昭和49年1月～2月，河口貞徳氏の指導を得て，再確認のための分布調査を実施し，これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決め，日本道路公団と協議した。そして保存する遺跡1カ所（吉松町堂迫地下式横穴），記録保存する遺跡10ケ所（当遺跡等）が決定した。

発掘調査は，第1次調査を昭和53年12月11日から昭和54年4月10日まで，第2次調査を昭和54年8月28日から昭和55年2月21日まで行った。

第2節 調査の組織

調査責任者	文化課長	谷崎哲夫	（昭和53年度）
	文化課長	山下典夫	（昭和54～55年度）
	文化課長	猿渡俊昭	（昭和56年度）
	課長補佐	荒田孝助	（昭和53年度）
	課長補佐	新　時弘	（昭和54年～56年度）
	課長補佐	本田武郎	（昭和56年度）
調査企画	専門員	本蔵久三	（昭和53～55年度）
	主任文化財研究員	諏訪昭千代	（昭和56年度）
調査担当者	文化財研究員	出口　浩	（昭和54年度）
	主事	新東晃一	（昭和54年度）
	主事	池畑耕一	（昭和53年度）
	主事	弥栄久志	（昭和54年度）
	主事	牛ノ浜　修	（昭和54年度）
	主事	長野真一	（昭和53年度）
	文化財調査員	中島哲郎	（昭和54年度）
	文化財調査員	宮田栄二	（昭和54年度）
事務担当	係長	中条　享	（昭和53～54年度）
	主幹兼係長	川畑栄造	（昭和55～56年度）

事務担当	主事	伊地知 千晴	(昭和53年度)
	主査	安藤 幸次	(昭和54～56年度)
	主事	天辰 京子	(昭和53～55年度)
	主事	山下 玲子	(昭和56年度)

第3節　調査の経過（日誌抄）

発掘調査は1次調査を昭和53年12月から昭和54年4月12日まで行い，第2次調査は昭和54年8月28日から昭和55年2月21日まで行った。第2次調査の経過を日誌抄によりまとめて以下略述する。

昭和54年8月28日(火)～9月1日(土)

木場A遺跡発掘調査再開する。第1次調査の結果にもとづき，グリッドを設定する。器材の運搬・テントの設置・草払いを行う。

9月3日(月)～9月8日(土)

グリッドに沿って10m間隔で杭打ち。C・E－26・27の表層掘り下げ。遺跡内の地形測量(1/100)C－28区確認トレンチ設定後掘り下げ。

9月10日(月)～9月14日(金)

C・D－26～28区Ⅲa層掘り下げ。E－28区Ⅱ層掘り下げ。D－27区Ⅲa層で砂岩製磨製石斧出土。

9月17日(月)～9月22日(土)

C・D・E－26～28区Ⅲa層掘り下げ。E・F－25・26区表層の下部Ⅳb層掘り下げ。E・F－27・28区Ⅲa層掘り下げ。遺物実測。河口貞徳先生指導。

9月25日(火)～9月29日(土)

C・D－26～28区Ⅲa～Ⅲb層掘り下げ。E・F－25・26区Ⅳb層掘り下げ。E・F－27・28区Ⅲa層上面地形測量図作成。E・F－27・28区溝状遺構確認掘り下げ。

10月1日(月)～10月6日(土)

C・D－26～28区Ⅲb層掘り下げ。溝状遺構掘り下げ終了。E・F－29区Ⅱ層掘り下げ。E－27・28区Ⅲb層掘り下げ。Ⅳ層上面にて平栫式土器出土。溝状遺構実測。

10月8日(月)～10月13日(土)

C・D－29～32区，G－28区表層剥除。E－27・28区Ⅲa層掘り下げ。E・F－27～29区地層断面実測。山崎B遺跡終了，作業員合流し調査員は牛ノ浜主事と宮田調査員に交代する。

10月15日(月)～10月19日(金)

C・D－29～32区表層剥除。E－31～33区確認トレンチ設定後掘り下げ。D－32区確認トレンチ設定後掘り下げ。Ⅲb～Ⅳ層上面にかけて塞ノ神式土器出土。山崎B遺跡よりプレハブ移転する。

10月22日(月)～10月26日(金)

E－31～33区トンレチ掘り下げ。他のグリッドはⅢa～Ⅳ層掘り下げ。平栫式土器等出土するD－31区古道面検出。E－32区土坑検出

10月29日(月)～11月2日(金)

C・D－29区Ⅳ～Ⅵ層掘り下げ。他のグリッドはⅢa～Ⅳ層掘り下げ。D－30・31区古道検出

11月5日(月)～11月10日(土)

E区Ⅲb～Ⅳ層掘り下げ。D－31・区Ⅲa～Ⅳ層掘り下げ，平栫式土器出土。E－29区古道検出。D－30区土坑（Ⅱ層落ち込み）検出。断面実測図。

11月12日(月)～11月17日(土)

E－29・30区古道検出。Ⅳ層～Ⅵ層掘り下げ。

11月19日(月)～11月23日(金)

Ⅲa～Ⅳ層掘り下げ。Ⅳ層に遺物集中する。D－32区Ⅳ層面に集石3基検出する。22日木場B遺跡終了し，調査員，作業員共に合流する。

11月26日(月)～12月1日(土)

Ⅲb～Ⅳ層掘り下げ。E－20区溝状遺構検出，掘り下げる。遺物の集中は24区より西側にみられる。東側はトンレチにて確認調査にはいる。断面図作成。木場B遺跡よりプレハブ移転する。

12月3日(月)～12月8日(土)

Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ。E－19・20区確認トレンチによりⅥ層下部に黒曜石・石英の剥片検出，シラスの直上につき旧石器時代の可能性あり，遺物の範囲確認を急ぐ。D－30区集石4検出。31～33区調査終了。

12月10日(月)～12月14日(金)

Ⅳ～Ⅴ層上面掘り下げ。D・E－30区集石5検出。29・30区終了。

12月17日(月)～12月22日(土)

Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ。石鏃多し，またつまみ形石器，抉り入り石器など石器に特殊なものがみられる。

12月24日(土)～12月26日(水)

Ⅳ～Ⅴ層上面掘り下げ。今年の調査終了。

昭和55年1月7日(月)～1月12日(土)

旧石器時代の遺物の範囲確認のため，トレンチを設定し，Ⅳ層以下の地層・遺物の確認をいそぐ。E・F－22区Ⅲ層掘り下げ。E－22区Ⅱ層落ち込みピット内に土師器埦3ケ出土する。

1月14日(月)～1月19日(土)

トレンチ調査。E－22区より玉髄製剥片出土。E－22区Ⅱ層落ち込み溝状遺構検出。C～F－21～25区Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。出口文化財研究員に代り池畑主事調査に参加。

1月21日(月)～1月26日(土)

Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。D－22区溝状遺構検出。集石6・7検出，実測図作成（1/10）。集石6は大

きな礫を利用し，他の集石と若干違う。

1月28日(月)～2月2日(土)

C～F－21～24区Ⅳ層掘り下げ。C・D－19・20区表層掘り下げ。2月にはいり雪が降り寒さも一段と厳しくなる。

2月4日(月)～2月9日(土)

C－29区集石8検出実測（1/10）。E・F区縄文時代包含層（Ⅲ～Ⅴ層上面）調査終了し，機械力にてⅤ層とⅥ層上面まで剝除する。E－23・24区玉髓剝片出土。E・F－19・20区Ⅵ層下部遺物出土。F－23・24区Ⅵ層下部石英砕片，剝片出土。D－19・20区溝状遺構検出（中世）

2月12日(火)～2月16日(土)

C・D区Ⅳ層掘り下げ。E・F区Ⅵ層下部掘り下げ。E・F－20区Ⅵ層下部に集石を検出する（集石9）。周辺に炭化物もみられる。集石10・11・12検出。集石検出面（Ⅵ層下部）にて地形測量図。

2月18日(月)～2月21日(木)

Ⅵ層下部～Ⅶ層上面掘り下げ，終了。集石9～12実測図作成（1/10）。プレハブ移転。遺具収蔵庫へ。木場A遺跡終了。

第１図　木場Ａ遺跡の位置Ｂ及び周辺遺跡

第２章　遺跡の位置及び環境

木場Ａ遺跡は，鹿児島県姶良郡栗野町木場外堀に所在し，川内川南東部，栗野岳の裾野にあたる台地上にある。標高約260m の台地で川内川よりの比高は約80m である。

遺跡の所在する栗野町は，鹿児島市街地より北東約44kmの鹿児島県の北部に位置する。東では，霧島火山群の一分峯栗野岳が宮崎県えびの市と境を接している。北は熊峯を隔てて吉松町，西は伊佐郡菱刈町，西南隅に国見岳がある。南は牧園，横川両町と境を接しているが，火山灰土で地形が複雑である。

熊本県白髪岳に源を発した川内川は，吉松町境の峡谷をうがって栗野町の中央部に沖積地の盆地をつくり，米作地帯を形成している。以前は川内川の氾濫のたびに中央低地は泥海化するのが例年であったが，護岸工事の進歩によって近年ようやく被害を僅少に止めるようになった。

栗野岳の裾野は栗野町に拡がり，一帯は火山灰土に覆われ，火山岩・火山灰・砂土が多くみられ，雨水の浸食がひどく地形は複雑であるが，町の畑耕作地の過半を占めている。又，幸田・恒次・米永方面は，栗野岳の裾野と国見岳等の裾野で，小高原の形となってはいるが，雨水の浸食を受けて複雑な地形をなしている。

遺跡のある外堀という地名は，島津義弘が朝鮮の役に出陣したという松尾城[①]に関連する地名である。

木場Ａ遺跡は，松尾城より約500m 南東部に位置し，栗野岳の裾野にあたる台地上にある。台地面積は約50*ha*で道路は台地を割って東一西方向に計画されている。表面で採集された遺物には，古代～中世の土師器や縄文式土器があった。

木場Ａ－２遺跡は，栗野町木場本城に所在し，木場Ａ遺跡の東約700m にある。やはり地名は松尾城に関連し，松尾城より約１km南東部に位置する。

遺跡は川内川南側の舌状台地縁辺部にあり，川内川からの比高は約80m である。南側に遠目ケ丘と呼ばれる楠原の岡が綾織の谷におりる標高258m の傾斜地を削平した桑畑にある。遺跡面積は約350*m²*である。須恵器・土師器が散布している。

木場Ｂ遺跡は，木場Ａ遺跡の面方約200mのところにある。標高250m 余りのほぼ平坦な台地で，畑地は桑畑として利用されている。南方は平面弧状を呈し端部は急崖となって，長谷(ながたに)部落の集落につながる。弧状東側の末端部は，深い谷となり中世の「空堀」の跡という伝承もある。また西方は絶壁状の急崖となり，深部を栗野－えびの間の県道が南北に走っている。道路との比高差は約44m である。また谷を狭んで約３00m のところに対峙する台地末端部は木場Ｃ遺跡[②]で縄文式土器や土師器を出土している。北方は次第に低く傾斜し，樹枝状に谷が入り込んでいる。台地面積約３*ha*で，道路は台地を割って東－西方向に計画されている。地表面には古墳時代の成川式土器片や，古代～中世にかけての土師器が散布している。

遺跡の周辺には，多くの遺跡が研究者等により確認されている。旧石器時代では，細石刃，細石刃核等が採集されている麦生田遺跡[4]。縄文時代では，栗野工業高校建設に伴う花ノ木遺跡[5]。九州縦貫自動車道建設に伴って発掘調査された山崎Ｂ遺跡がある。古墳時代では北方遺跡の地下式横穴が歴史時代では山崎Ａ[7]・Ｂ[8]遺跡が調査されている。また，山城として松尾城があり，本丸[6]・二ノ丸が現存し，田尾原・稲葉崎[9]には県指定史跡の供養塔群がある。

（１）『栗野町郷土史』栗野町

（２）鹿児島県教育委員会「木場ｃ遺跡」　1981

（３）林昭男・米満重満「栗野町の遺跡について」鹿児島考古８号　1973

（４）鹿児島県教育委員会「花ノ木遺跡」　1975

（５）鹿児島県教育委員会「山崎Ｂ遺跡」　1982

（６）河口貞徳「北方地下式横穴」鹿児島考古５号　1971

（７）鹿児島県教育委員会「山崎Ａ遺跡」　1981

（８）（５）と同じ

（９）五味克夫「栗野町稲葉崎・田尾原供養塔群」鹿児島県文化財調査報告書第13集

No.	遺跡名	所在地	備考	
1	山ノ口B	姶良郡栗野町北方山ノ口	弥生式土器	
2	山ノ口A	〃 〃 〃	縄文・弥生式土器，土師器	
3	麦生田	〃 〃 麦生田	旧石器時代（細石刃，細石刃核）	(1)
4	九日田	〃 〃 九日田	縄文式土器（出水），土師等	(2)
5	宇都	〃 〃 宇都	縄文式土器，土師器	
6	堂ノ上	〃 〃 堂ノ上	地下式横穴，地下式板石積石室	
7	新中馬場	〃 〃 新中馬場	積石塚，地下式横穴	
8	柿ノ木	〃 〃 中郡	縄文式土器，弥生式土器	
9	宮下	〃 〃 宮下	縄文式土器，弥生式土器	
10	池ノ川	〃 〃 池ノ川	地下式横穴	(3)
11	迫山	〃 米永迫山	弥生式土器	
12	下坂元	〃 〃 下坂元	弥生式土器	
13	山崎B	〃 木場牛瀬戸	縄文式土器(前平・塞ノ神)，建物跡，堀，土師器	(6)
14	山崎A	〃 〃 〃	建物跡，古道，土師器	(4)
15	山崎C	〃 〃 〃	青磁，土師器	(4)
16	坂元城	〃 米永坂元	城跡	
17	王ノ山	〃 〃 王ノ山	弥生式土器	
18	石の本	〃 〃 石の本	縄文式土器	
19	後ケ迫	〃 〃 水窪	弥生式土器	
20	西原	〃 木場西原	縄文式土器（押型文・曽畑・轟）	(1)
21	上佐牟田	〃 〃 上佐牟田	縄文式土器（押型文・曽畑・吉田）	(1)
22	花ノ木	〃 〃 花ノ木	縄文式土器(押型文・塞ノ神・深浦)，集石，土坑	(5)
23	諏訪岡	〃 〃 諏訪岡	縄文式土器（阿高，出水，市来）	(1)
24	木場C	〃 〃 〃	縄文式土器（岩崎），土師器	(4)
25	木場B	〃 〃 内堀〃	土師器	本報告書
26	木場A	〃 〃 外堀	旧石器時代(ナイフ形石器・剥片)，縄文式土器(前平，塞ノ神)	本報告書
27	木場A-2	〃 〃 本城	旧石器時代（三稜尖頭器・細石刃核）	本報告書

表1　山崎B遺跡周辺の遺跡一覧表

(1) 林昭男・米満重満「栗野町の遺跡について」鹿児島考古8号　1973

(2) 鹿児島県教育委員会発掘　現在整理中

(3) 河口貞徳「北方地下式横穴」鹿児島考古5号　1971

(4) 鹿児島県教育委員会　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ　1981

(5) 鹿児島県教育委員会「花ノ木遺跡」　1975

(6) 鹿児島県教育委員会　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅹ　1982

第3章 調 査 の 概 要

第1節 区割の設定

木場A遺跡は，南北約300m，東西約500mの川内川南側の舌状台地にあり，川内川からの比高は約80mである。北東部に中世～近世の山城である松尾城，東部に遠目ケ丘と呼ばれる楠原の岡にはさまれた標高260mの平坦な台地に位置している。

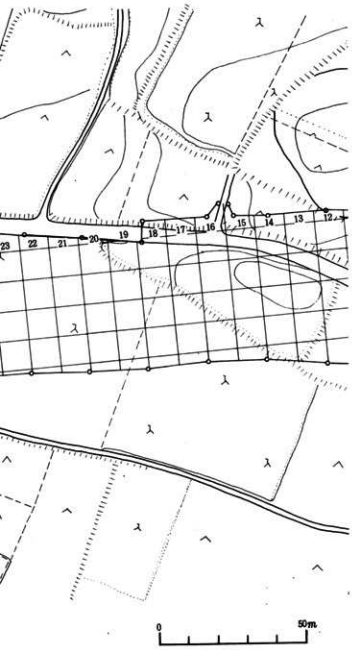
当地は畑であったが桑畑が多いため，その根の剝除作業から始めた。調査実施にあたって，10m四方を単位に区画を設けることとし，縦貫道路のセンターライン，ＳＴＡとＳＴＡ杭を結び横線を基準とした。この線と平行に10m間隔の横線を各方設け，東西に１～33，それと直角に10m間隔の縦線を設け，Ａ－１，Ａ－２……Ｃ－15と区を設定して区域名を表わすことにした。段取りとして10m毎の10m×２mのトレンチ調査を実施し，遺跡の範囲や遺物包含層の把握に努めた。当初，分布調査に基づき中世の遺跡としての調査のはこびとなったが，トレンチ調査の結果，中世の遺物・縄文時代の遺構（集石）・遺物・旧石器時代の遺物が確認され，旧石器時代のⅦ層上面まで調査を考えるに至った。

中世の遺構として古道・溝状遺構・土坑の検出をみた。古道は幅1.6m前後で表面は，茶褐色の土で非常に固くなっている。調査した範囲では表層の下に埋没していたが，東側は現在でも幅１m程の農道として利用されている。溝状遺構は２本検出され，１号溝からは土師器の皿が出土している。土坑は３基検出され，全て埋土はⅡ層の黒色火山灰土である。土坑１からは，３枚の土師器皿が重なるようにして出土した。遺物としては，土師器・須恵器・陶磁器・古銭石製品・土製品の出土があった。

縄文時代の遺構として，Ⅳ層に集中しているものや，散乱しているもの等形態はまちまちであるが集石が８基検出された。土器は，早期から後期までみられ，石坂式・吉田式・前平式・平栫式・塞ノ神式等が出土した。石器は，石鏃・石斧・石匙・スクレイパー・剝片・磨石・凹石・蜂ノ巣石等が出土している。

旧石器時代の遺構として，Ⅵ層下部に集石が４基検出された。そのなかには炭化物が周辺に確認されるものや，炭化物の集中がみられるものがある。遺物としては，Ⅳ層下部で細石刃・調整剝片が出土し，Ⅵ層下部からは，ナイフ形石器・スクレイパー・剝片・石核等が出土し，石材の豊富さが特徴である。

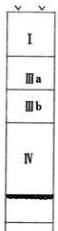
24
25
26
27
28
29
30
31
32
C
D
E
F
G



第２図　木場Ａ遺跡地形図及びグリ

10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
11
F

第2節　層　序



第Ⅰ層　表土であり，現在の耕作土である。

第Ⅱ層　黒色火山灰土層

通称黒ニガと呼ばれているもので，E・F区には若干の堆積がみられるが，C・D区は，削平によってほとんどみられない。土師器の小片の散布がみられる。（木佐貫原遺跡，山崎A・C遺跡ではこの層から土師器が出土している。）

第Ⅲa層　黄褐色土層

通称赤ホヤ層と呼ばれているもので，前期から後期の遺物がみられるが，量的には少ない。

第Ⅲb層　黄褐色パミス層

幸屋火砕硫に対比できるものであり無遺物層である。

第Ⅳ層　黒褐色硬質土層

上部に，平栫式・塞ノ神式土器・石鏃・石匙等が包含されている。21区から33区にかけて分布がみられる。上部から中部は，吉田式，前平式土器がみられ，26区から33区に分布していた。

第Ⅴ層　黄褐色粘質土層

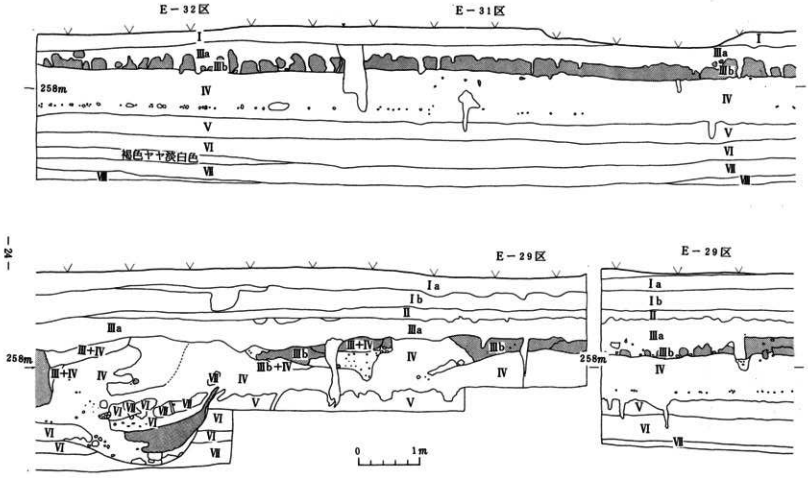
C－26・27・28区のⅣ層最下部からⅤ層最上部にかけて細石刃があった。細石刃核の出土はなく，また，その他の剥片等も確認していない。

第Ⅵ層　暗茶褐色粘質土層

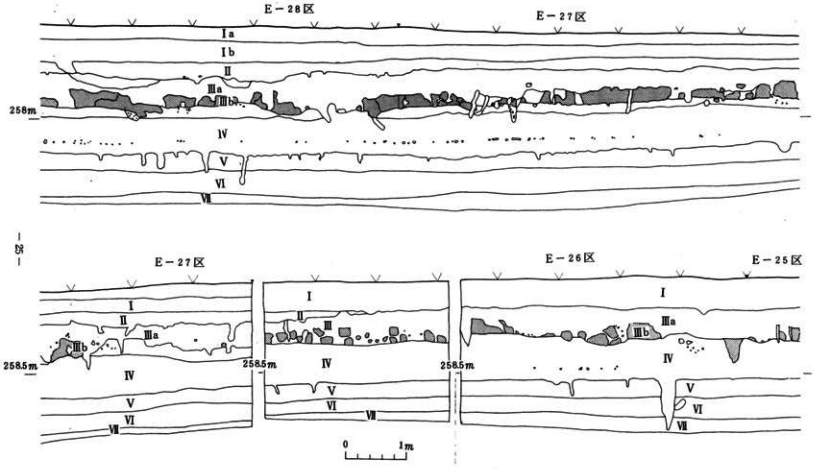
Ⅵ層下部からⅦ層最上部にかけて，ナイフ形石器，剥片・石核等の旧石器時代の遺物が包含されている。石材は多種にわたり，黒曜石・玉髄・頁岩・チャート等である。

第Ⅶ層　黄シラス

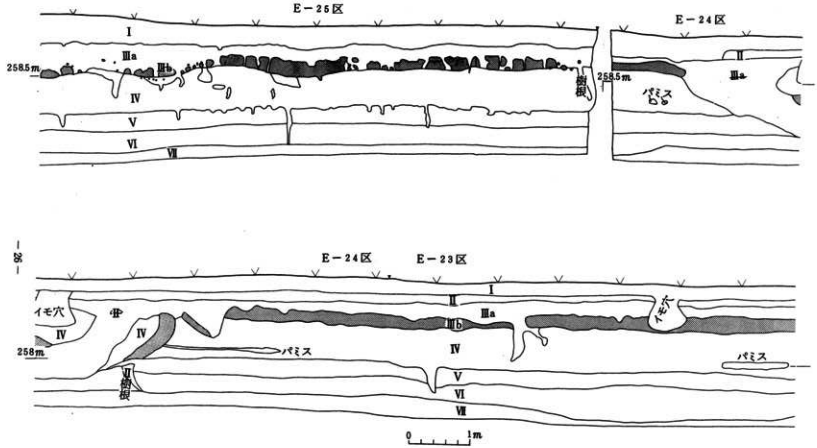
Ⅶ層最上部に石器がみられたが，Ⅵ層の遺物と異ならず同時期のものと思われる。それ以下は無遺物層である。



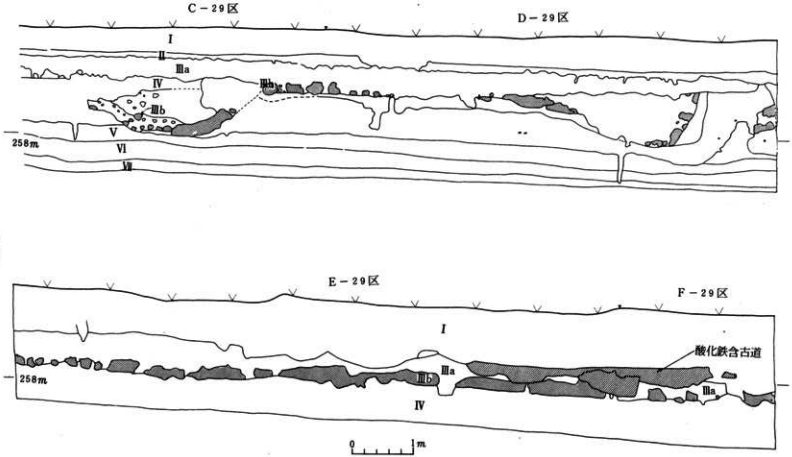
第3図 地 層 図（1）


E－28区
E－27区
Ia
Ib
II
IIIa
IIIb
258m
IV
V
VI
VII
E－27区
E－26区
E－25区
I
II
III
IIIa
IIIb
258.5m
IV
V
VI
VII
0
1m

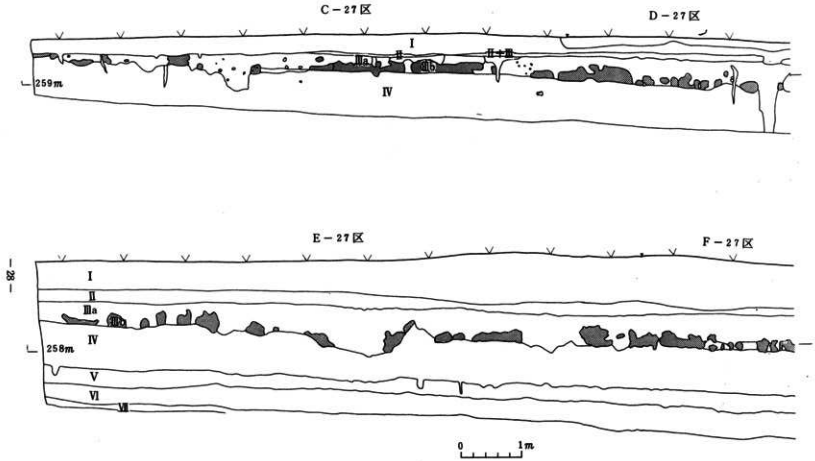
第4図 地 層 図 (2)


E－25区
E－24区
I
IIa
IIb
IV
V
VI
VII
II
IIIa
258.5m
258.5m
現表
パミス
E－24区
E－23区
イモ穴
中
IV
258m
パミス
VI
現表
IIIb
イモ穴
パミス
0
1m

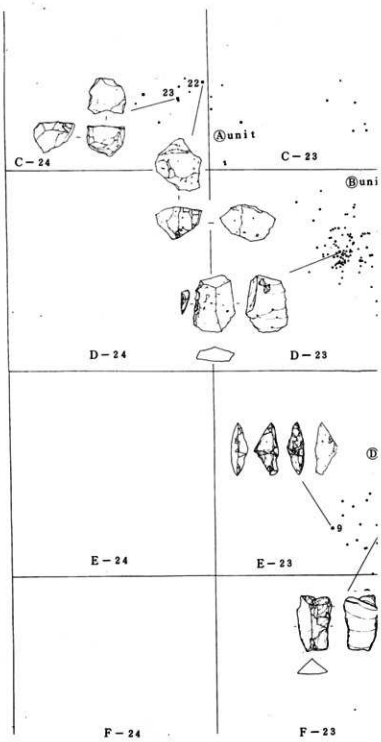
第5図 地 層 図（3）

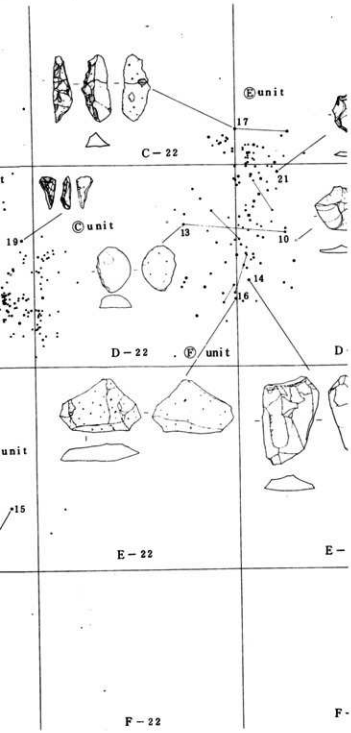

C－29区
D－29区
I
II
IIIa
IV
IIIb
IIIb
V
VI
VII
258m
E－29区
F－29区
I
IIIa
IIIb
IV
IIIa
酸化鉄含古道
258m
0
m

第6図 地 層 図（4）

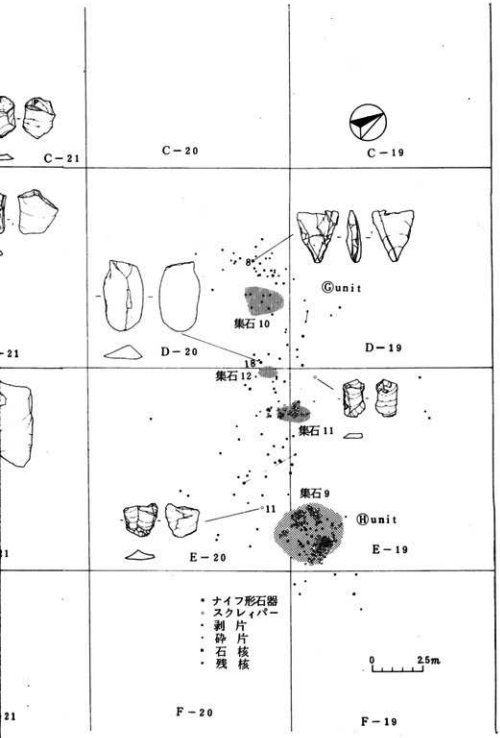

C－27区
D－27区
I
IIa
II
IIb
II＋III
IV
259m
E－27区
F－27区
I
II
IIIa
IIIb
IV
258m
V
VI
VII
0
1m

第7図 地 層 図 (5)


23
22
Ⓐunit
C－24
C－23
Ⓑuni
D－24
D－23
Ⓒ
9
E－24
E－23
F－24
F－23



第８図　第Ⅵ層下部遺物分布図


C－21
C－20
C－19
Ⓖunit
集石 10
D－20
D－19
集石 12
集石 11
集石 9
Ⓗunit
E－20
E－19
ナイフ形石器
スクレィパー
剥 片
砕 片
石 核
残 核
0
2.5m
F－20
F－19

第4章　遺構・遺物

第1節　旧石器時代

旧石器時代の遺物は，Ⅳ層下部に細石刃・調整剥片が，Ⅵ層下部にナイフ形石器・スクレイパー・剥片・石核・砕片があり，Ⅵ層下部の遺物の出土状況はまとまり（ユニット）をもって構成されている。ユニットはA～Hの8か所が認められた。また，集石が4基検出された。

（1）遺　構

E－19・20区に集石9・11，D－20区に集石10，D・E－20区に集石12を検出した。検出状況は，Ⅵ層最下にみられ，拳大の安山岩の円礫が集中しているものである。集石の断面はほぼ一面となり，掘り込みなど土層の変化はみられない。集石⑨は，E－19・20区　Ⅵ層下部に検出され，径6mの楕円形状に160個の大小の円礫・角礫が散在し，北西部（3m×2m）と南東部（3m×2m）の大まかに二つに分けられる。南東部の集石の周辺には1.5m×1.5mの円形状に特に多くの炭化物がみられる。集石⑩は，D－20区　Ⅵ層下部に検出され，3.5m×3mのだ円形状に安山岩の大小の円礫・角礫を集めたものである。集石⑪は，E－19・20区　Ⅵ層下部に検出され73個の安山岩の円・角礫が径5m×1.5mの範囲に散在し，特に中心部では1.5m×1mに約50個の円礫・角礫が集まっている。炭化物等はみられない。集石⑫は，D・E－20区　Ⅵ層下部に検出され20数個の安山岩礫が1.5m×1mの範囲にみられた。炭化物等はみられなかった。

（2）遺　物

Ⅳ層下部よりⅤ層上部にかけて細石刃と細石刃剥出の際みられる調整剥片が出土した。その他の遺物はみられなかった。Ⅵ層下部からⅦ層上部にかけて約2000点の遺物が出土し，石材には黒曜石・頁岩・石英・玉髄・チャートがあり，器種もナイフ形石器・スクレイパー・剥片・石核などが出土している。

細石刃（1～5）第11図　図版5

細石刃は5点出土した。層位はⅣb層からⅤ層に包含されている。この層位は他の遺跡（溝辺台地～栗野）の桜島パミス下の層位にあたり細石器文化層にあたる。全て分割されており，細石刃核は出土しなかったが，周辺に包含層のある可能性がある。

調整剥片（6・7）第11図　図版5

6，7は調整剥片と思われるものである，気泡の少ない茶褐色の良質の黒曜石であり，細石刃核の調整剥離における剥片と思われ，層位はⅣ層下部の細石器文化層である。6，7ともまったく同タイプのものである。

ナイフ形石器（8・9）第11図　図版5

ナイフ形石器は2点出土した。8は頁岩を用い背部と基部に調整剥離痕がみられるが刃部の先端部には調整途中と思われる痕が残っている。9は黒曜石で両面からの調整剥離によって背部を形成し，刃部には使用痕が認められる。

スクレイパー（10～13）

スクレイパーは5点出土した。全てⅥ層の出土である。10は，石英質で自然面を残した剥片を利用し，側縁部に調整剥離を加えている。11も石英質で折断剥片を利用しⅥ層下部に出土した。縁辺部に調整剥離が加えられている。12，13は黒曜石製であり，13は円礫状の原石を第一加撃により剥離された剥片を利用し，側縁部に調整剥離を加えてスクレイパーとしたものである。

剥片（14～21）

剥片はⅥ層下部からⅦ層最上部にかけて全部で38点出土した。そのうち12点を図示した。14は頁岩製の調整された石核から剥離されたと思われる縦長剥片である。15はよく整形された玉髄製の縦長剥片であり，縁辺部には使用痕がみられる。16は，黒曜石製の厚みのある大形の剥片である。17は縁辺部に加工痕をもつ縦長剥片であり，自然面を残した黒曜石を石材として用いている。18は玉髄製の縦長剥片である。縁辺部に使用痕がみられる。19，20は縁辺部の一部に加工痕をもつ黒曜石製の剥片である。

石核（22，23）

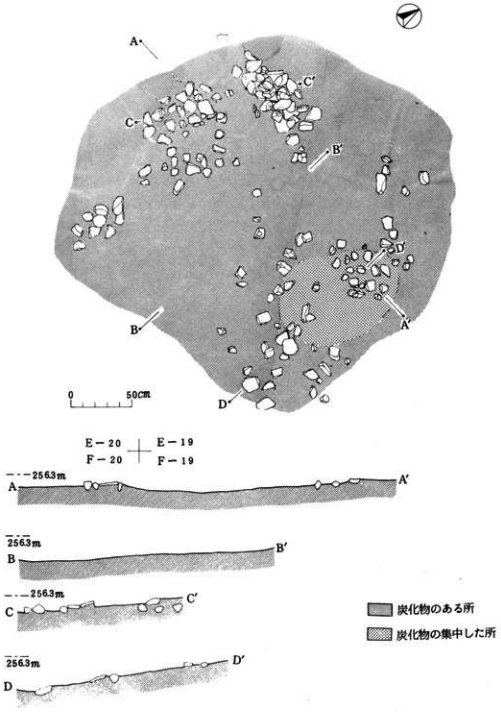
石核はⅥ層下部より4点出土している。石材は黒曜石と玉髄を使用している。22は，C－24区Ⅵ層下部に出土した自然面を残した略円錐形の石核である。剥離方向に方行性がなく，また，剥離された剥片も小片であったと思われる。23も，C－24区，Ⅵ層最下部より出土した略円錐形の石核である。これも剥離方向に一定した方向性がない。石材は玉髄を利用し，自然面を残している。

（3）小括

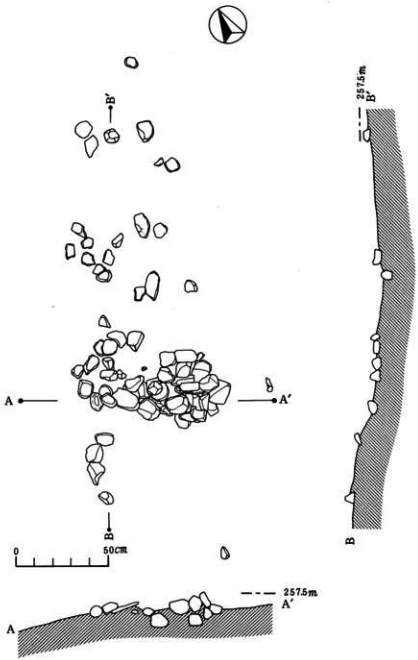
最近では，県内各地で旧石器時代の遺跡が発見され，また調査がすすめられてきているが，その多くが細石器文化に伴なうものであり，また遺物の集中等はみられるものの遺構の検出は少なかった。木場A遺跡において，シラス直上より集石，炭化物集中等を検出したことは，大きな意義があるものと思われる。

遺物の集中部は8ケ所みられ，3～5mの楕円形状の範囲に30～200点の遺物がみられた。第8図で示めされるように，遺物の出土状況は，かたよりがなく，全体的に砕片と剥片の組み合わせが多い。ただ，Aユニットには石核が4点のうち3点出土し，他のユニットと若干の違いが感じられる。

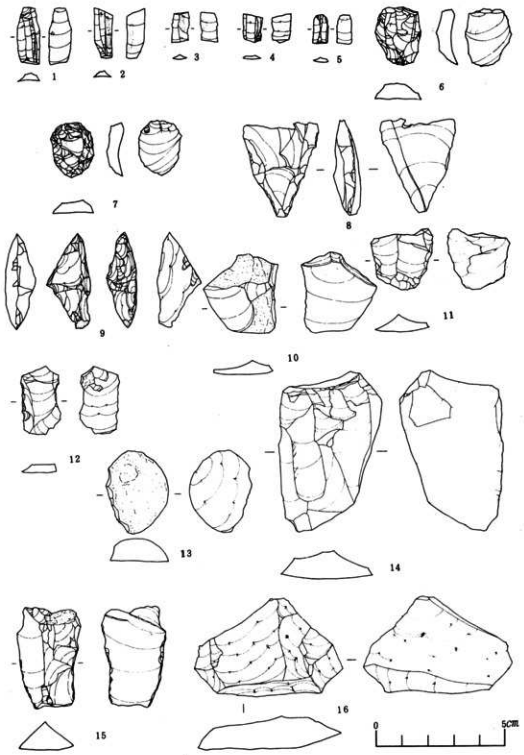
集石は4基検出された。いずれも拳大の安山岩の円礫・角礫が集まったもので，礫には火をうけた形跡はみとめられなかった。しかし，集石9は，炭化物も多く，礫も他の集石の礫と比較すると若干差があるように思われる。



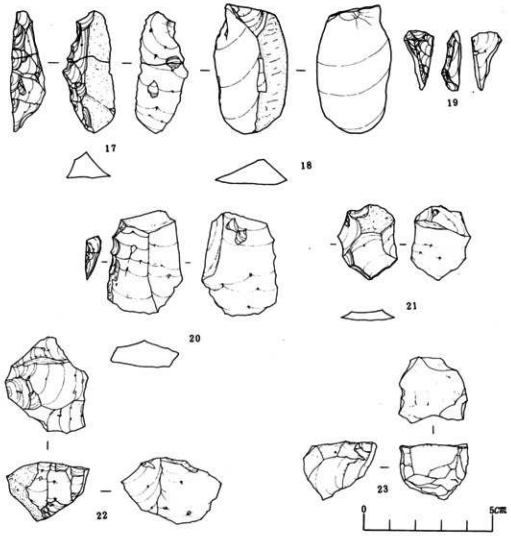
第9図 集 石 9



第10図　集　石　11



第11図　旧石器時代石器（1）

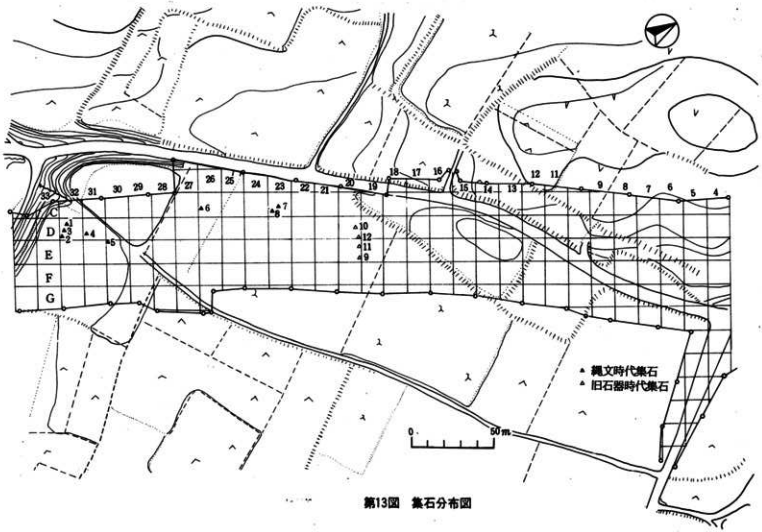


第12図　旧石器時代石器（2）

第1表 旧石器時代石器一覧表

番号	器種	区	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考	挿図番号
1	細石刃	C−28	4b直上	2.14	0.84	0.28	0.5	黒曜石		1
2	〃	C−28	4b直上	1.70	0.60	0.25	0.25	黒曜石		2
3	〃	D−31	4b	1.06	0.64	0.17	0.2	黒曜石		3
4	〃	C−27	5	1.01	0.69	0.14	0.2	黒曜石		4
5	〃	C−27	4 下	1.10	0.50	0.12	0.1	黒曜石		5
6	剥片	C−27	4 下	2.05	1.62	0.48	1.70	黒曜石	調整剥片	6
7	〃	C−27	4 下	2.34	1.38	0.25	0.95	黒曜石	調整剥片	7
8	ナイフ形石器	D−20	6	3.47	2.85	0.75	7.20	頁岩		8
9	〃	E−23	7 上	3.63	1.63	1.03	2.20	黒曜石		9
10	スクレイパー	D−21	6	3.10	2.60	0.76	6.70	石英		10
11	〃	C−23	6	3.42	2.00	1.12	8.50	黒曜石		
12	〃	E−20	6 下	2.15	2.28	0.73	3.55	石英		11
13	〃	E−19	6最下	2.62	1.25	0.27	1.55	黒曜石		12
14	〃	D−22	6最下	3.14	2.29	0.79	6.20	黒曜石		13
15	剥片	E−23	6最下	3.78	2.28	1.12	8.75	玉髄		15
16	〃	D−21	5最下	5.64	3.84	1.16	30.50	頁岩		14
17	〃	D−22	6 下	5.63	3.70	1.00	24.00	黒曜石		16
18	〃	C−21	6 下	3.11	1.70	1.20	5.70	黒曜石		17
19	〃	D−20	6 下	5.00	2.80	1.22	13.50	玉髄		18
20	〃	D−23	6最下	2.25	1.06	0.48	1.05	黒曜石		19
21	〃	D−23	7最上	3.90	2.74	1.00	11.00	黒曜石		20
22	〃	D−21	6最下	2.67	2.18	0.67	3.20	黒曜石		21
23	〃	E−19	6最下	1.45	1.45	0.46	0.70	チャート		
24	〃	D−22	6中下	4.72	2.20	0.63	6.20	黒曜石		
25	〃	F−19	6 下	3.13	2.19	0.52	3.20	チャート		
26	〃	C−22	6 下	3.52	3.20	1.36	17.70	石英		
27	〃	D−21	6	3.00	2.23	1.20	5.20	黒曜石		
28	〃	E−19	6 下	2.74	1.68	0.42	2.40	チャート		
29	〃	E−20	6 下	2.58	1.63	0.72	3.00	黒曜石		
30	〃	E−19	6最下	2.84	3.14	1.78	15.72	頁岩		
31	〃	D−21	6	4.09	2.01	0.64	5.50	黒曜石		
32	〃	D−21	6 下	3.20	2.28	0.70	6.00	黒曜石		
33	〃	D−22	6 下	3.44	1.98	1.00	5.55	黒曜石		
34	〃	D−22	6最下	4.42	4.34	1.24	32.02	黒曜石		
35	〃	E−19	6 下	2.73	2.15	0.75	4.70	石英		

番号	器種	区	層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考	挿図番号
36	剥片	E−20	6 下	3.20	1.38	0.83	3.40	黒曜石		
37	〃	D−20	6 下	4.56	3.27	1.07	14.00	黒曜石		
38	〃	C−21	6 中	1.38	0.57	0.14	0.20	黒曜石		
39	〃	D−21	7 盤上	5.70	5.76	0.61	23.70	頁岩		
40	〃	D−21	7 盤上	2.00	1.96	0.67	20.00	黒曜石		
41	〃	D−21	7 盤上	5.24	4.00	1.26	29.50	石英		
42	〃	D−21	6 盤下	2.20	1.52	1.00	2.55	黒曜石		
43	〃	D−19	6 下	3.00	2.83	0.85	8.05	黒曜石		
44	〃	E−20	6 下	5.23	4.05	1.90	40.05	玉髄		
45	〃	D−22	6	5.24	3.74	1.00	19.05	凝灰岩		
46	〃	D−22	7 盤上	5.62	3.15	1.20	17.55	黒曜石		
47	〃	D−23	7 盤上	1.43	1.24	0.22	0.50	黒曜石		
48	〃	D−23	7 盤上	3.38	3.30	0.63	7.20	黒曜石		
49	〃	D−23	7 盤上	3.59	3.10	0.90	8.55	黒曜石		
50	〃	D−22	6	3.00	2.48	0.65	5.00	黒曜石		
51	〃	E−19	6	3.70	1.34	0.70	2.70	頁岩		
52	〃	C−21	6 盤下	4.00	1.50	0.55	2.40	黒曜石		
53	石棒	C−24	6 盤下	3.68	2.68	2.10	20.90	黒曜石		22
54	〃	C−24	6 盤下	5.67	4.00	1.62	24.75	玉髄		23
55	〃	D−19	6 下	2.57	2.35	1.30	9.40	黒曜石		
56	〃	D−21	6 盤下	5.00	3.63	1.73	35.70	黒曜石		

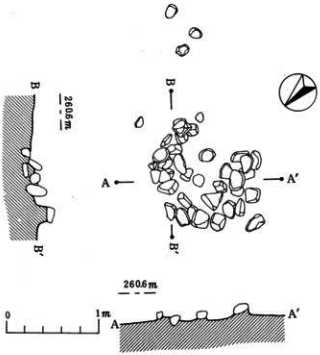


第13図　集石分布図

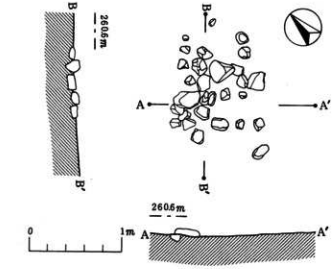
第2節　縄文時代

(1) 遺　構

今回の発掘調査の結果，縄文時代の遺構としては，集石が8基検出された。



第14図　集　石　1



第15図　集　石　2

集　石（第14～20図）

縄文時代の集石遺構は，土器分布の状況と同じように23区，26区，31・32区に分布し8基を確認した。検出状況は，Ⅳ層にみられ，一か所に集中しているものから，散乱しているものと形態はまちまちであるが，集石として記録した。大半が拳大の安山岩の角礫や円礫の自然石からなる。集石の断面はほぼ一面となり，落ち込みなど土層の変化がみられない。集石番号は検出順につけた。

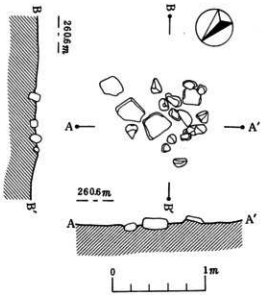
集石①は，D－32区　Ⅳ層に検出され，径60cmの円形状に38個の拳大の円礫・角礫を集めている。南側に礫がみられず馬蹄形を呈している。

集石②

D－32区Ⅳ層に検出され，径約50cmの範囲に32個の大小の円礫・角礫を集めたものである。

集石③

D－32区Ⅳ層に検出され，径約50cmの範囲に19個の大小の円礫・角礫を集めたものである。



第16図　集　石　3

集石④

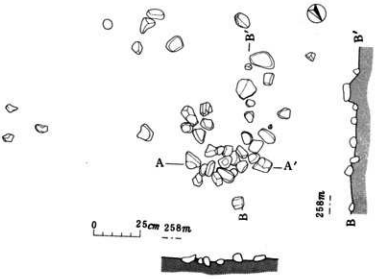
D－31区　Ⅳ層に検出され，33個の拳大の円礫・角礫を集めたものである。

集石⑤

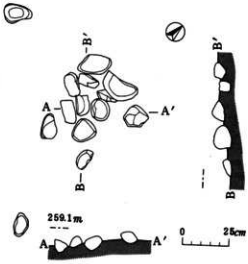
E－30区　Ⅳ層に検出され，1m×50cmの範囲に45個が集中しその周辺に20個が散らばっている。

集石⑥

C－26区　Ⅳ層に検出され，12個のやや大きな礫が集まっている。他の集石と性格を異にするが灰や焼石などの変化はみられなかった。



第17図　集　石　5



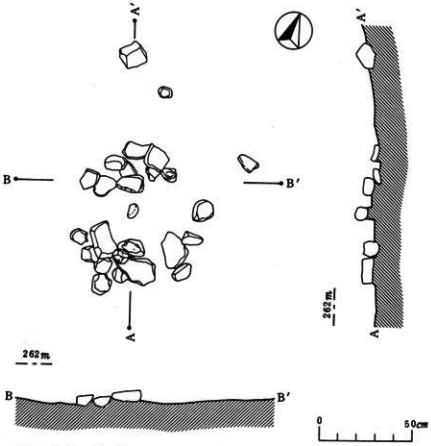
第18図　集　石　6

集石⑦

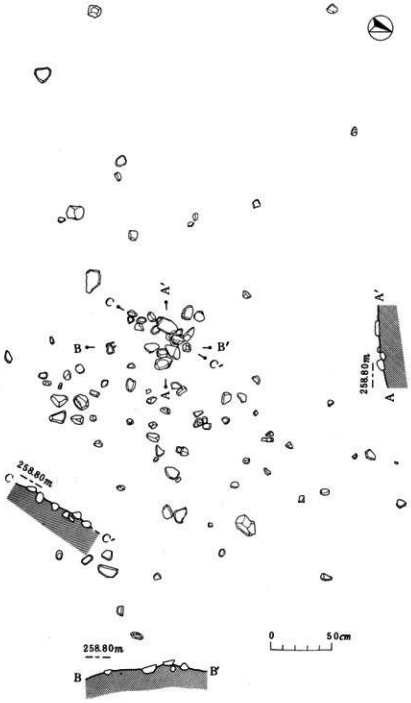
C－23区　Ⅳ層に検出され，約60cmの円形に21個の大小の円礫・角礫を中心をあけめぐらしてある。これにも炭・焼石など確認できなかった。

集石⑧

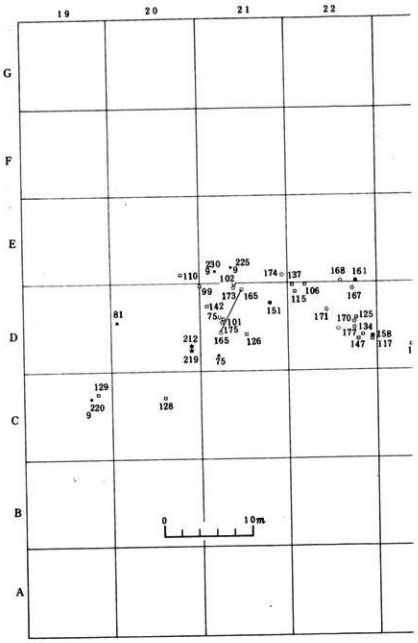
C－23区　Ⅳ層に検出され，3ｍ四方の広い範囲に110個の大小の円礫・角礫が点在している。他の集石と比較して一部に集中がみられるが広範囲にちらばっている状態である。

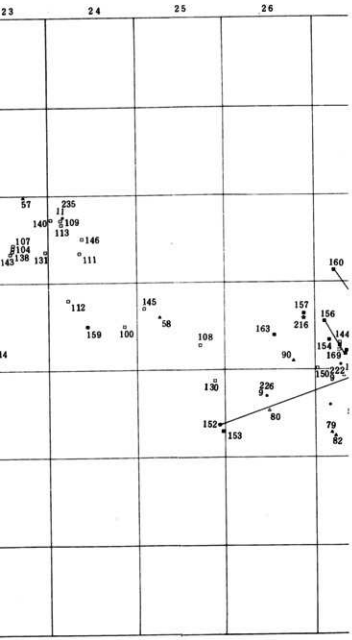


第19図　集　石　7

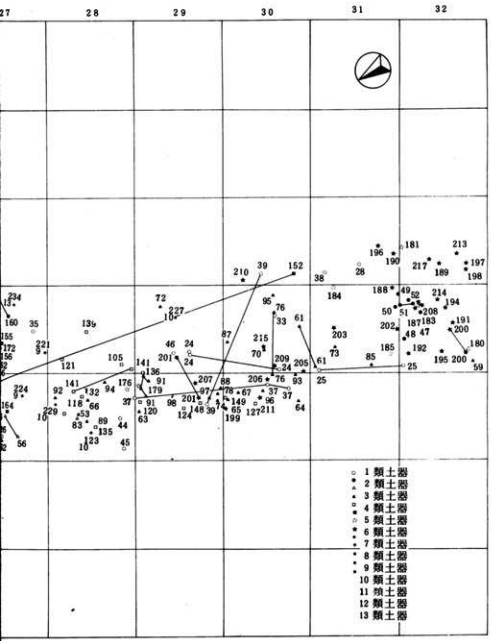


第20図 集 石 8


19
20
21
22
G
F
E
D
C
B
A
0
10m
230
225
110
102
174
137
168
161
99
173
165
106
167
115
151
81
142
75
101
171
170
125
134
175
177
158
212
165
126
147
117
219
75
129
220
9
128



第21図　縄文時代土器分布図


27
28
29
30
31
32
1 類土器
2 類土器
3 類土器
4 類土器
5 類土器
6 類土器
7 類土器
8 類土器
9 類土器
10 類土器
11 類土器
12 類土器
13 類土器

(2) 遺　物

A. 縄文式土器

縄文式土器は，全面にわたり散乱した状態で出土した。小破片が多く，完形に復元できたものはなかった。出土量はⅣ層がほとんどである。類別して説明したい。

1類土器（第22図　**24～46**）図版　11

厚い器壁を有する円筒形の土器で，内面調整が平滑になされたものが多い。文様によってさらに細分できる。aは**24～35**である。**24・25**は口縁部外帯に４～５条の刺突連点文を巡らし，口唇部に刻線を施す。**26～35**は，口唇部に平担面を有し，**32**を除き刻目はみられない。文様は口縁端部から間隔をおいて下位に１・２条刺突連点文を施し，間を縦列の連点文で埋めたもの（**31・34**）斜めの連点文で埋めたもの，（**33・35**）横位の連点文で埋めたもの（**26**），その他の連点文を施したもの（**27～30**）がある。「施文」以下は綾形状の貝殻条痕で調整したもの（**27・30・34**）がみられた。bは**36～40**である。口縁部外帯に貝殻腹縁部の先端を横位に刺突するもので４条（**36・37・39**），８条（**38・40**），巡らしている。**37・39**は口唇部に刻目を有している。胴部は**37**は縦に，**38**は綾杉状に貝殻腹縁による調整を行っている。cは貝殻腹縁による刺突文が横位の綾杉状に施されるものである。（**42**）口は口縁部外帯に横位の沈線を10数条巡らしたものである。施文具は貝殻かどうかは，器壁の磨滅が著しく不明である。口唇部の刻目はない。

43～46は胴部破片である。いずれも貝殻条痕による調整を施し，**44～46**は綾杉状を呈する。

分布はC・D－29区を中心に全体にまばらに散布している。層はⅣ層に大部分が出土している。

2類土器（第22図　**47～52**）図版　12

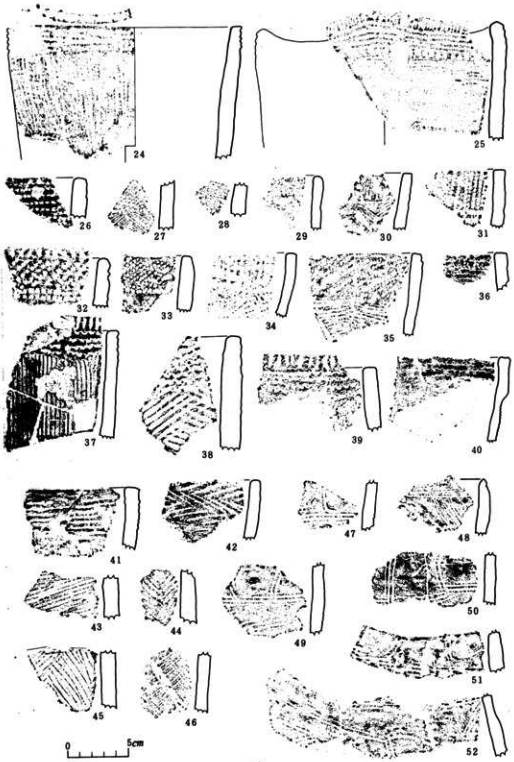
D－32区を中心に10数点Ⅳ層に出土している。同一個体と思われる破片が多い。篦状の施文具で２条～３条の平行沈線を横位または縦位に不規則に施す。器面はナデによる調整がなされているが，粗製である。外面は明褐色だが，内面は灰褐色である。

D・E－32区からほとんど出土した。Ⅳ層出土である。

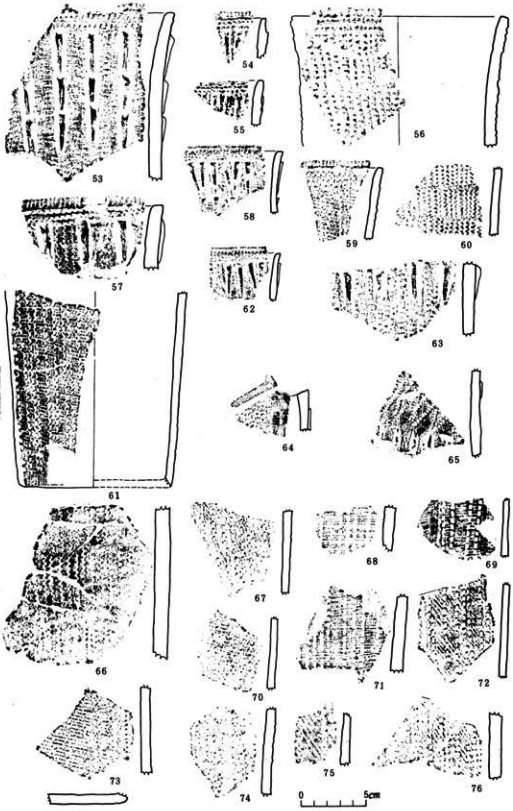
3類土器（第23図　**56・60**　第24図　**80・83**）図版　13

56はやや外反する円筒形を有し，口唇部に刻目をもち，口縁部には横位に貝殻刺突線文を３条巡らし，胴部は貝殻腹縁による押圧文を全面に施している。**60**は胴部破片である。器壁は薄く内面調整は丁寧である。**80・83**は胴部に斜めの貝殻腹縁による押圧文がみられる。平底で側面は篦先による縦位の刻線を密接に施している。

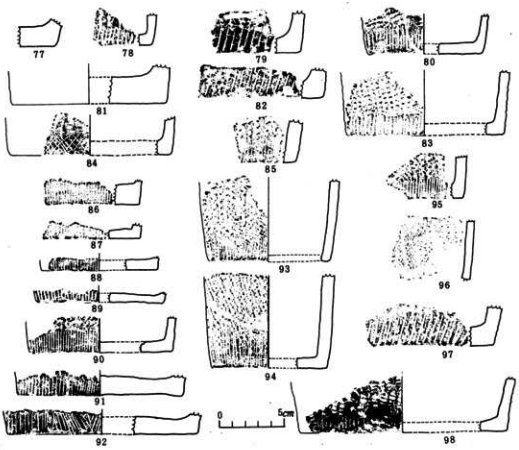
4類土器（第２図　**53・57～59・61～76**　第３図　**77～79・81・82・84～98**）図版　14


24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
47
48
43
44
49
50
51
45
46
52
0
5cm

第22図　1類・2類土器


53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
0
5cm

第23図　3類・4類土器



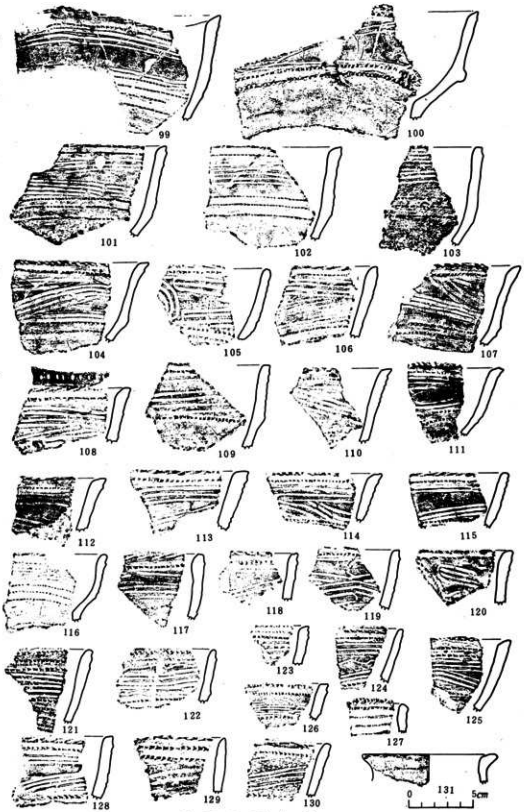
第24図　4　類　土　器

口縁部のやや外反する円筒形で，口唇部に刻目，口縁部に貝殻刺突線文を横位に３条巡らしその下に楔形の凸帯を３列（53）あるいは鋸歯状に（58・62）張り付けたものである。59は楔形凸帯を有しない。胴部は横，または斜めに貝殻条痕を施し，さらに縦に貝殻刺突線を重ねるものが多い。66は縦の貝殻刺突線文を密に施す。器壁は比較的薄い。64は角筒の口縁部で楔形の凸帯をもち，73は角筒の胴部破片である。

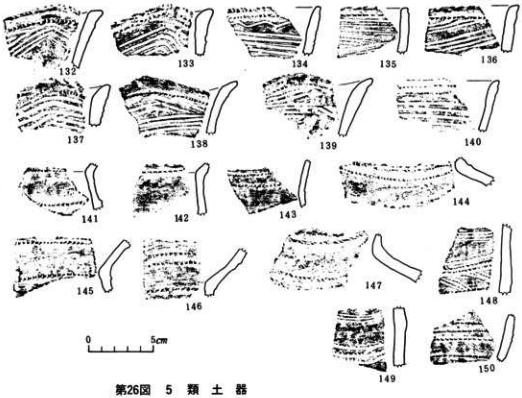
54・55は楔形凸帯をもつ口縁部であるが胴部は不明であり，３類，４類いずれとも判別できなかった。

底面は良く調整された平底で側面に縦位の刻線を密に施している。（87～92・94）刻線が斜めでやや荒いもの（79・82・97）斜格子目状を呈するもの（84）などがある。77・81は胎土も粗製で器壁も厚い。底部側面は横位の条痕がみられ，本類の底部とやや異なっている。86は角筒の底部で底面は平滑な調整がなされている。

これらの土器はＣ－28区，Ｄ－30区を中心に多く出土し，層はⅣ層に出土している。


99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
0
5cm

第25図　5　類　土　器



第26図　5　類　土　器

5類土器（第25・26図）図版　15

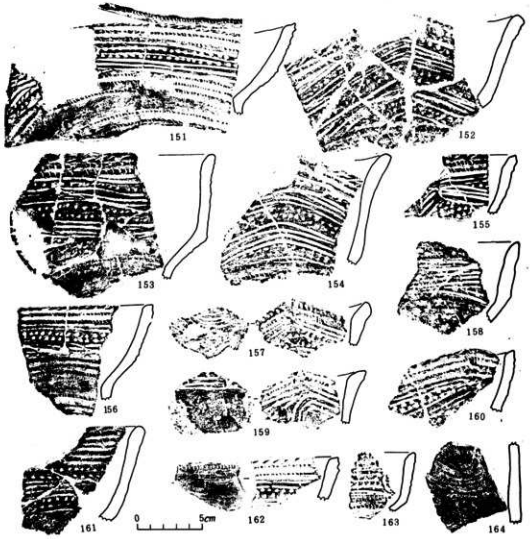
破片のみで器形は不明である。円筒形と思われる胴部に，ラッパ状に開く口縁部が付く。口縁部は途中でやわらかく「く」字形に屈折する。口縁端部は外側へ小さく開き，先端部外端に刻目を附す。波状口縁が主で，平縁はみられない。文様は口縁下に１条～２条の刻目のある細隆線凸帯を巡らし，「く」字状のふくらみの部分に２条～３条を巡らす。この間に浅い沈線文を横位に，また斜めに施している。**105・119・132・133**のごとく波状曲線を描くものもある。刻目のある細隆線凸帯は頸部のくびれ部にも１条施す。**123・124・130**は沈線文間に刺突連点文を施す。**131**は口縁部が小さく外反する小形土器であるが，口縁端部に刻目を頸部に刻目のある細隆線凸帯を付す。色調は灰褐色を呈したものが多く，器面の調整は内外とも丁寧な撫で仕上げを行っている。器壁は比較的薄い。

分布はＣ－28・29区，Ｄ－21・22区を中心にし，層はⅣ層でも比較的上位に多い。

6類土器（第６図）図版　17

５類と器形は同一であるが多少の差異が認められたので，別に分けた。文様は細隆線刻目凸帯文と沈線文，Ｄ唇部の刻目の組み合わせに刺突連点文が新しく加わっている。５類土器の中

にも連点文が少量みられたが，ここでは連点文を文様構成の要素として組み入れている。**151**は沈線間に２条の並列する連点を，**154**は文様帯の上部に一列，中・下位にそれぞれ２条の並列する連点を施す。**155**・**157**は沈線と沈線の間の空間部に連点を密に施している。**151**・**157**・**160**は細隆線刻目凸帯の一部を結び目を表現するかのように瘤状に小さく突起させている。また口縁端部の内側にも刻目を施すものもある。（**151**・**156**・**160**・**162**）刻目は口縁端部の外先端が斜めに入るのに対し，内面の刻目はまっすぐで，鋭く刻まれている。**157**・**159**・**160**の山形口縁部の裏面には山頂部から弧状に数条の沈線を施している。５類の文様帯には，空間部が多くみられたが，６類は文様帯全面に密に沈線，連点を施している。**152**・**153**・**154**は口縁部の細隆線刻目凸帯を除い



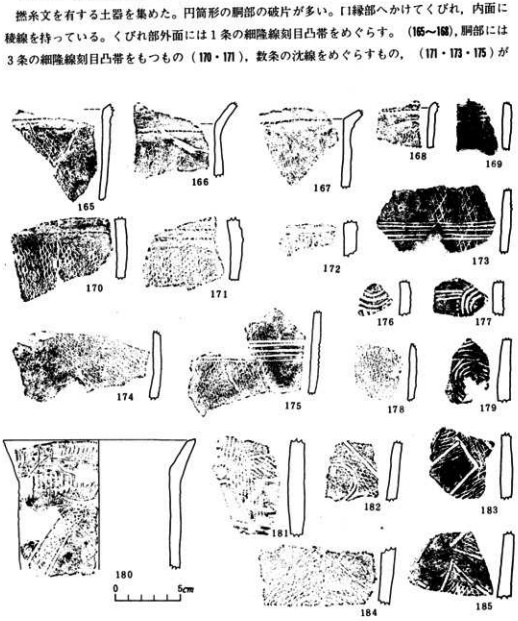
第27図　6　類　土　器

て，下方の凸帯は明確でない。5類に比べて，褐色を呈したものが多く，胎土も粗で作りも荒い。施文も端正さがみられない。

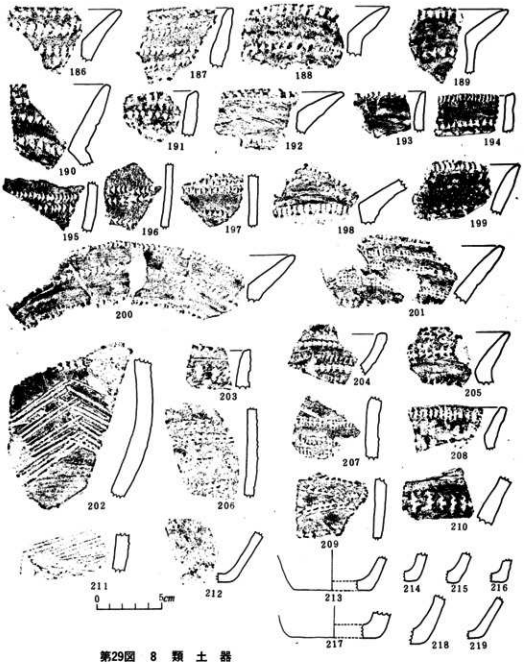
D－27区を中心に分布がみられ，層はⅣ層に多く出土している。

7類土器（第28図）図版　18・19

撚糸文を有する土器を集めた。円筒形の胴部の破片が多い。口縁部へかけてくびれ，内面に稜線を持っている。くびれ部外面には1条の細隆線刻目凸帯をめぐらす。（165～168），胴部には3条の細隆線刻目凸帯をもつもの（170・171），数条の沈線をめぐらすもの，（171・173・175）が



第28図　7　類　土　器



第29図　8　類　土　器

ある。撚糸文は間隔をおいて密に施されたもの（170），斜格子目状のものなどがある。（173～175）これらを7a類とする。撚糸文を篦先の直沈線文で区切り，他の部分を磨り消してしまうもの（180～185）もある。7b類とする。180は小さく直線的に外反した口縁部に貝殻腹縁による刺突

文を２列に並べて施している。aは薄手で灰褐色をした土器が多く，器壁も内外面ともに丁寧な調整がなされている。bは灰褐色を施し厚手で器面調整も荒い。

176・177・179は重弧状の沈線文を有するもので，**177**は刺突連点文も施している。

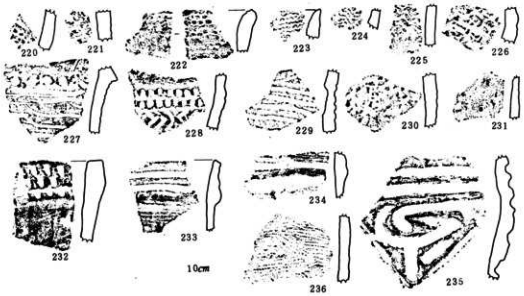
分布はD－21・22区にみられ，層はⅣ層上位に多く出土した。

8類土器（第29図）図版　19・20

口縁部がラッパ状に小さく開き，口唇部はやや尖り気味となる。頸部は内面に稜線を有する。器壁は厚く茶褐色を呈するやや粗製の土器である。器面の調整は撫で及び細い条痕によってなされている。文様は施文具によって２つに分類できる。**186～200**は口唇部の先端部及び外面と頸部のくびれ部およびその中間に，横位や斜位に篦状の施文具による連続刺突文を施すものである。篦状施文具の先端部の差異によって刺突文が，やや丸味を帯びたもの（**186**）三角状に尖るもの（**188・194・197**）爪形状に細く鋭いもの（**195・196**）幅のあるもの（**200**）など多岐にわたっている。一方**201～211**は施文具に貝殻の腹縁部を利用したものである。前者をa，後者をbと呼ぶことにする。**202～211**のごとく，幾何学的な篦描きの区画内に，貝殻による条線を充当したものもみられる。（c）**213～219**はこれらの底部の破片とみられる。粗製である。くすんだ褐色を呈し，無文である。

分布はD－32区を中心として分布し，Ⅳ層の比較的上位に多い。

9類土器（第30図　**220～226・230・231**）図版　21



第30図　9 ～ 13 類 土 器

押型文土器である。出土した土の全部をあげた。**220～222**は楕円押型文で，**222**は外反する口縁部内面にもみられる。**223**は穀粒押型文とも呼ばれる粒の小さいものである。**224～226・230**は山形の押型文である。**225・226・230**は器面荒く，押型文を施文したあと，さらに撫で消した部分がみられる。**231**は同じ円状の押型文で5重のものである。1点出土した。

分布はD・C－27区にほとんど出土した。Ⅳ層である。**231**はF－29区でⅣ層出土である。

10類土器（第30図　**227～229**）図版　21

刻目凸帯と蒐描きの沈線を有する土器である。内外とも淡い褐色を呈し，撫でおよび細い条痕による調整を行っている。**227**は刻目の凸帯部分が「く」字状に屈折し，これを境に一面に蒐描きの沈線文を施す。他は不明である。**228**は胴部屈折部に2条の低い刻目凸帯を密接して施し，一面に凹線文を連続して刻する。他面は条痕がみられる。**229**は深い蒐描沈線の間に荒い刻目を施している。

227はD－29区Ⅳ層直上，**228**はD－20区Ⅲ下層・**229**はC－28区Ⅳ層上面出土である。

11類土器（第30図　**235**）図版　21

茶褐色で焼成良好の器面に太い凹線で曲線文や横線文を描く。凹線の起端部は強く押捺されている。内面は手捏仕上げのあと細い条痕で丁寧な調整がなされている。

D－28区－Ⅲa上層の出土である。

12類土器（第30図　**232**）図版　21

直口する厚手の口縁を有し，口縁端は平担面を有する。口縁部がやや肥厚し，その部分に3列にわたり竹管状の施文具で斜めに押捺している。その下位に小さい刺突文が施されている。口縁部平担面にも指頭による押捺が施されている。内外とも細い条痕で調整され，外面は黒褐色を呈している。

C－30区Ⅲa層出土

13類土器（第30図　**233・234**）図版　21

口縁部に断面三角形の肥厚帯を有し，その部分に横位の凹線を施す。凹線の両端部は強く刺突されている。茶褐色を呈し，胎土は密である。横位の細い条痕によって，丁寧な調整がなされている。2つともD－17区－Ⅲa層出土である。

その他の土器

236は内外とも貝殻条痕による調整痕がみられる。内面灰褐色，外面黄褐色を呈する。

B．石　器

1．石　鏃

石鏃は185点出土した。小破片のため実測不能のものを除き163点を図示した。基部の形態によって大きく平基式と凹基式に分け，さらに細かい分布によって平基式をA～Cと3つに，凹基式をA～Nと14に細分類した。また，長さが1.5cm未満の小さい鏃については特に小石鏃として別にあげ，さらに特殊な有茎鏃や雁股鏃も別にした。

基部や側辺，先端部の差異はａｂｃ…として表に加えた。内容は下記の如くである。

平基式の形態分類

○側辺部分，ａ．鋸歯状を呈する。ｂ．側辺が内弯する。ｃ．側辺がまっすぐで三角形を呈する。ｄ．正三角形を呈する。ｅ．側辺が外弯する（外曲する）最大幅下端（ア），最大幅下方（イ），最大幅上方（ウ），極端に外曲する（エ），

○先端部分，ａ．非常に鋭い，ｂ．普通，ｃ．鈍い，ｄ．丸い，ｅ．平ら，ｆ．不明，

凹基式の形態分類

○基部分，ａ．脚端が鋭く抉りが非常に深い　ｂ．脚端が鈍く抉りが非常に深い　ｃ．脚端が円く抉りが非常に深い　ｄ．脚端が鋭く抉りが深い　ｅ．脚端が鈍く抉りが深い　ｆ．脚端が丸く抉りが深い　ｇ．脚端が鋭く抉りが浅い　ｈ．脚端が鈍く抉りが浅い　ｉ．脚端が丸く抉りが浅い　Ｊ．脚端が鈍く非常に抉りが浅い　ｋ．脚端が鋭く非常に抉りが浅い　Ｉ．脚部欠損で不明。

○側辺部分　ａ．鋸歯状を呈する　ｂ．側辺が内弯する　ｃ．側辺がまっすぐで二等辺三角形を呈する。ｄ．正三角形を呈する　ｅ．側辺が外弯する（外曲する）最大幅下端ア）最大幅下方(イ)　最大幅上方(ウ)　極端に外曲する(エ)　ｆ．五角形を呈する

○先端部分　ａ．非常に鋭い　ｂ．普通　ｃ．鈍い　ｄ．丸い　ｅ．平ら　ｆ．先端部欠損で不明

次に類別ごとに説明していきたい。

平基式

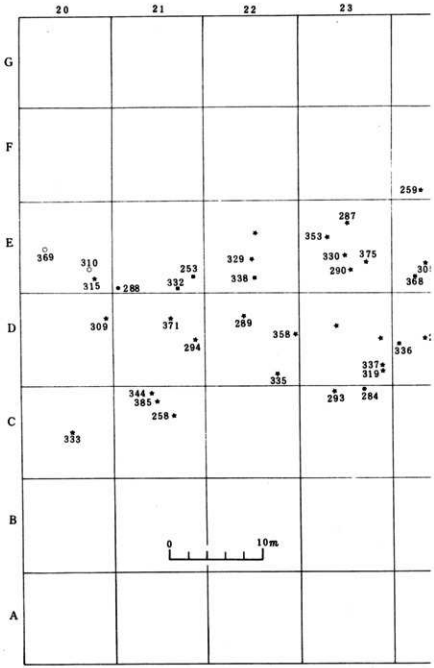
基部に抉りのない平根のもので，18点発見された。凹基式が大半を占めているので，全体の約1割に満たない。A類～C類まで3つに分類した。

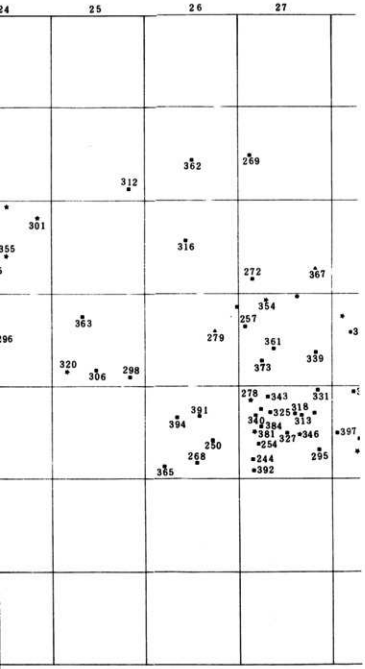
A類（第32図　**237・238**）図版　22

薄手の磨製石鏃である。両面共に丁寧な研磨によって，表面が平滑となっている。**237**はほぼ正三角形，**238**はやや長身である。共に粘板岩製。厚さが0.1～0.2cmときわめて薄い。

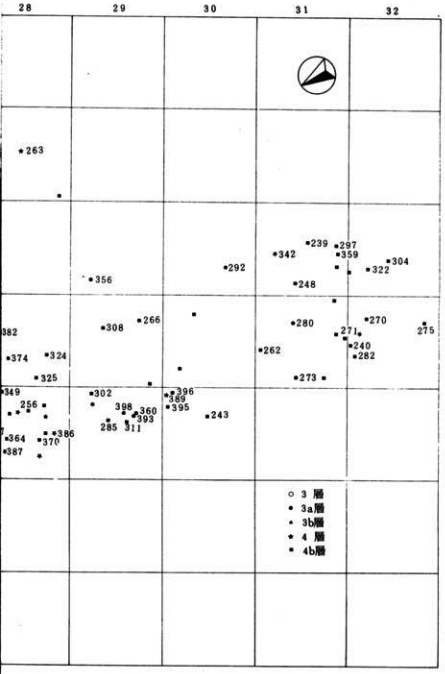
B類（第32図　**239～243**）図版　22

側辺がまっすぐで，二等辺三角形を呈し，C類に比べてやや大形のものである。**239**は両面に自然面を残す。**240**は全体に薄手に仕上げられ両側縁はやや外弯し，両面とも丁寧な押圧剥離がなされている。**242**は不安定な剥片を利用し，周辺に簡単な調整を加えている。長さ2.5cm前後のものが多い。


20
21
22
23
G
F
E
D
C
B
A
259
287
353
369
310
315
288
253
332
329
338
330
375
290
368
309
371
294
269
358
335
336
337
319
344
385
258
293
284
333
0
10m



第31図　石鎚層位別分布図


28
29
30
31
32
263
356
292
239
297
342
359
304
322
248
266
308
280
270
275
271
240
282
262
382
374
324
325
273
349
256
302
396
389
398
360
395
243
393
285
311
386
364
370
387
○ 3 層
• 3a層
▪ 3b層
• 4 層
▪ 4b層

C類（第32図　**243～252**）図版　22

長さが1.5cmから2cm未満のもので，やや厚みがあり，全体に小形でコロコロした不安定な鏃を集めた。**244**は全体に丹念な剥離が施され，両側縁は中央部へわずかにくびれる。**245**は全体に丸味をおび，細かい剥離が施されている。他は主要剥離面を多く残し，周辺部に簡単な調整を加えたものである。石材は黒曜石がほとんどである。

凹基式

基部に，抉りのあるもので，本遺跡出土の石鏃の90%以上を占めている。形態分類によってA類～N類まで**250**に分けた。

A類（第32図　**253～259**）図版　22

全形に比較して，抉りが浅く小さいものをあげた。**257・258**は長身の二等辺鏃で，側縁の剥離も細かく仕上げられている。**259**は剥片の片面に簡単な調整を加えたもの。**254**は平基式C類に類似のもので，厚い鏃身を有し，側縁に粗い剥離を加えている。**256**は自然面を残す剥片を利用し，周縁部に粗い剥離を加えたもので，丸味を帯びて先端部分が鈍い。

B類（第32図　**260～268**）図版　22

均正のとれた三角形，および二等辺三角形を呈し，抉りは脚端部から広く，浅く形成されている。全体に薄手で，側縁の剥離も細かく調整されている。**260**は尖端部分をさらに一段と細かく鋭く尖らしている。特殊な例である。**262**は側縁の剥離痕が深く刻まれて，鋸歯状を呈している。**263**は側縁がやや内寄する。**268**は身中央部に凸起部分を残す。

C類（第33図　**269・277**）図版　23

等辺の三角形を呈し，抉りが小さくまた浅いものである。幅が1.4cm内外で全体に小形で形がよく整っている。D類に比較して器厚がやや薄い。**269・270・276・277**は側縁部に密な交互剥離をなし薄手で逆刺も鋭い。**273・275**は，小剥片を利用し，周辺部に調整を加えている。**276**は石英，他はすべて黒曜石である。

D類（第33図　**278～283**）図版　23

正三角形をなし，中央部が脹らんで厚みをもち，不安定でコロコロした感じのものである。基部は逆刺が鋭く，抉りが非常に浅い。**283**は二等辺三角形をなくし側縁に交互剥離を行っている。すべて黒曜石製である。長さ1.5cm内外のものが多い。

E類（第33図　**284～299**）図版　23

基部は，両端に面を残し中央部に深い抉りを有するもので，C・D類に比較して大形のものである。二等辺三角形で側縁にやや丸味を帯びたものが多い。長さも2.5～3cm前後のものが多く，**284・285**は4cmにも達している。**286・293・297**の逆刺が鋭く尖るものと，**285・290・298**の丸くなるものに分けられる。全体に剥離調整痕は大きいが綿密である。**288・293**のように主要剥離面を一面に残すものもある。石材として黒曜石は**284・285・287・288・292・296**で，チャートや玄武岩製のものが多い。**284・285**は重さが4g を越えている。

F類（第34図　**300～316**）図版　24

二等辺三角形を呈し，抉りが大きく深いもので，E類に比べへ脚端部が，丸くあるいは細くなる。長さに比較して，幅がせまくなり，細身の長身鏃が多い。**301～306**は側縁部から先端部へ鋭く尖る。**301・302・306**は抉りも深く大きい。**300**は剥離面の一部をそのまま側縁部に残している。長さ2.5cm前後，幅1.5cm，前後のものが多い。

G類（第34図　**317～323**）図版　24

三角形を呈し，抉りのやや深いもので，側縁部が丸味をなし，最大幅が下端，および下方にくる。F類に比較して長さの短いものである。**323**は一面に剥離面を残し，周辺部だけを調整している。長さ2cm余り幅1.6cm，厚さ0.5cm前後のものが多い。

H類（第34図　**324～332**　第35図　**333～337**）図版　24・25

U字及び半円状のえぐりをもち，脚端部のすぼまったハート形をなすもので，円脚鏃ともよばれる。鏃身の大きさに比べてえぐりは小さい。**329・331・332・334**のごとく先端部の鋭く尖ったものと，**325・335・336**のごとく鈍いものがある。断面は片面で凹曲ないし平担で，他面は中央部が凸状に厚くなるものが多い。(**328・330・332・334・335・336**) **332**は両面とも主要な剥離面を残し，側縁および，抉りに簡単な調整を加えたものである。長さ2.5cm余りのものが大部分である。石材は黒曜石が少なく玄武岩およびチャートがほとんどを占めている。

I類（第35図　**338～351**）図版　25

抉りの大きく，深いもので鍬形鏃ともよばれるものをあげた。**338～340・344**の側縁部が直線で正三角形を呈し，丁寧な押圧剥離を加えているもの，**343・345～349**の側縁部がやや丸味を帯びているのなどがある。**339・340・349～351**は小形のものであるが，両面とも剥離調整が丁寧である。**341**は，片脚が小さく仕上げられている。**342**は側縁下方に小さくくびれ部を有する特殊なものである。石材はチャートが大半を占めている。

J類（第35図　**352～355**）図版　25

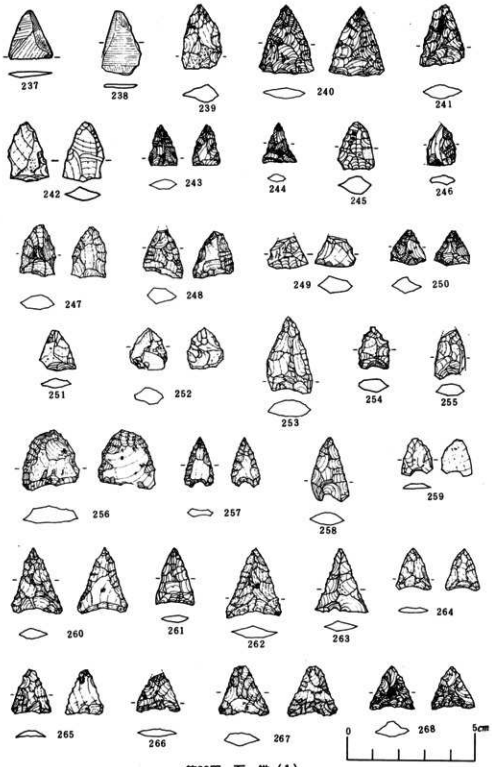
長さ3cm，幅2.5cm余りの比較的大きな粗製の石鏃である。玄武岩製の剥片を利用し，側縁部や抉りを荒く，簡単に調整している。**352**は両面とも主要剥離面を残し，側縁は片面より荒い調整を行っている。

K類（第35図　**356～364**）図版　25

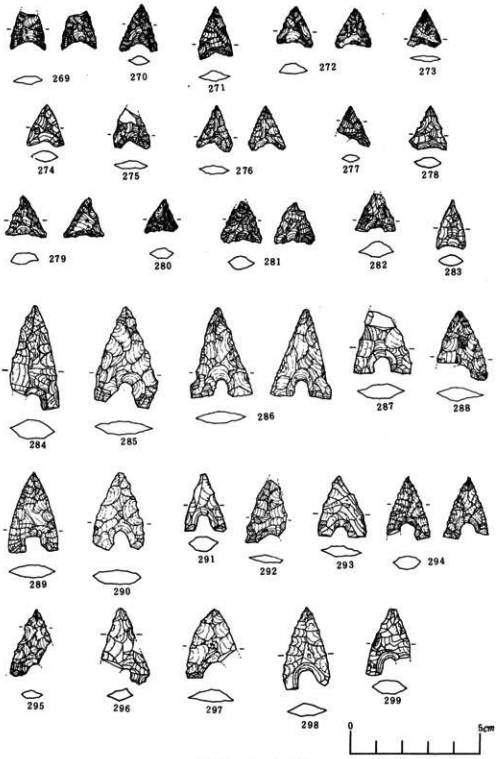
長身鏃で，側縁が内弯し，中央部分から先端部へ鋭く尖るスマートな鏃身をもつものである。脚端部は大きく開，**356・360・362・363**のような大きく深い抉りを持つものと，**358・359・361**の浅い抉りをもつものがある。**356～359**は，周縁部が細かく小さな剥離によって調整されている。**359**は先端部が一段と小さく尖る。**361**は弯曲した剥片を利用し，側縁部に荒い調整を行っている。長さ3cm，幅1.6cm，厚さ0.4cm余りのものが多い。

L類（第35図　**365**　第36図　**366～369**）図版　25・26

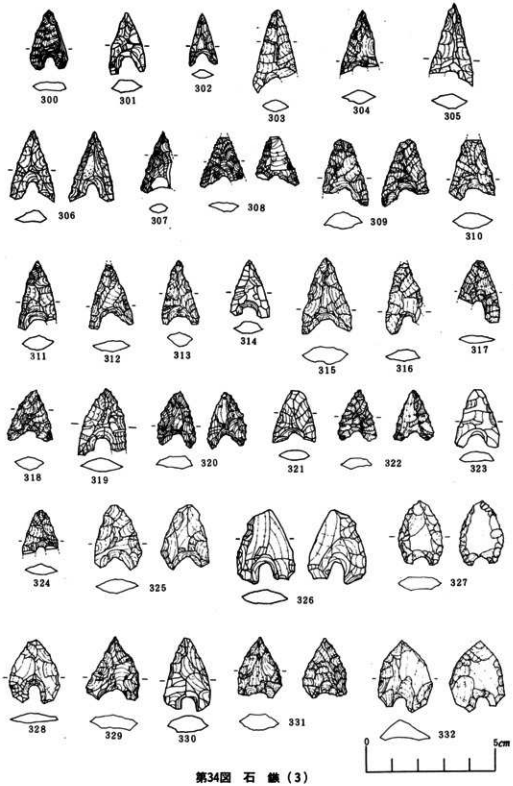
形状が五角形をなすもので，五角形鏃とよばれるものである。抉りは**366～369**のごとく小さく浅い。**365～367**は薄い剥片を利用し，全面に細かな剥離調整を行っている。**368**は荒い剥離を施しただけである。未製品であろう。**369**は小形の精製品であるが，側縁が段をなし，五角形状に角


237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
0
268
5cm

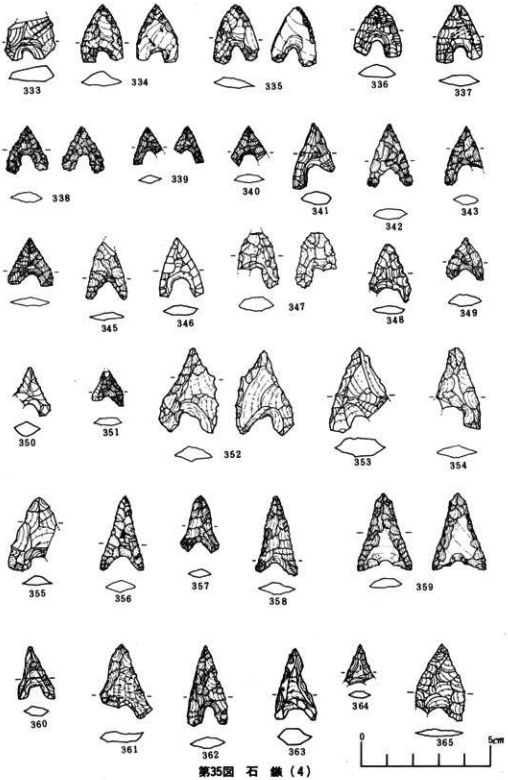
第32図　石　鏃（1）


269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
0
5cm

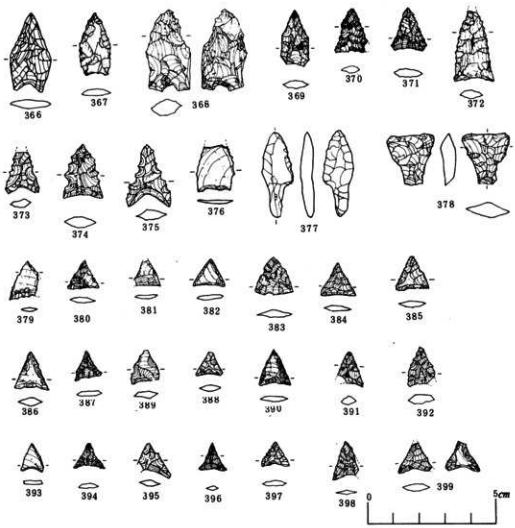
第33図　石　鏃（2）


300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
0
5cm

第34図　石　鏃（3）


333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
0
5cm

第35図 石 鏃（4）



第36図　石　鏃（5）

張っている。長さが3cmに近いものが多い。石質は黒曜石1，石英2，チャート2である。

M類（第36図　370～375）図版　26

側縁部が鋸歯状を呈するものをあげた。形状は多様で370～372・374の浅い抉りをもつもの，375の側縁部が内弯するもの，372の柳葉形をなすものなどである。375は先端部が尖り両脚も長く，抉りも深い。玄武岩製である。372は頁岩。他は黒曜石である。

N類（第36図　376）図版　26

薄い剥片を利用し，側縁に簡単な調整を施したもので，基部の抉りが浅く，両端を逆刺状に小さく尖らしたものである。玄武岩製である。

小石鏃

黒曜石の剥片を礎材として長さが1～1.5cm，幅が1cm余り，薄手の小指爪先大の大きさに仕上げた小形石鏃の一群で，特に小石鏃として別に取りあげた。形状によって3つに分類した。

A類（第36図 **379～385**）図版 26

平基式である。正三角形を呈し，形が整っている。薄手の剥片を利用し，側縁部に細かい調整を行ったもので，**379・381～383**は中央部に主要剥離面を多く残している。

B類（第36図 **386～392**）図版 26

浅い抉りをもつ凹基式の石鏃である。形状はほぼ正三角形を呈する。**388・390**は主要剥離面を残すが，全体に細かい剥離を丁寧に施したものが多い。

C類（第36図 **393～399**）図版 26

全形はほぼ正三角形を呈するが，抉りの深いものをあげた。**393・396・399**は側縁部を内弯させ，先端部を細く小さい調整を行っている。**394**は小さい剥片の周縁に簡単な剥離を加えただけのものである。

有茎鏃（第36図 **377**）図版 26

1点出土した。一面は側縁部に細かな剥離調整を施す。他面は主要剥離面を多く残し，側縁は荒い調整を行っている。先端部はやや鈍い。玄武岩製である。

雁股鏃（第36図 **378**）図版 26

逆三角形状を呈する。側縁はやや内弯し，基部は細まる。刃部は水平で，基端部は欠損している。側縁部及び先端部は，粗い剥離調整を行っている。先端部は鈍い。

第2表 石 鏃 一 覧 表

番号	形式		区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	掲図番号	備考
1	平基式	A	3	Ⅲa		e	b	1.90	1.70	0.20	0.60	粘板岩		237	磨製石鏃
2		A	ネ	Ⅲa		e	f	(2.45)	(1.50)	0.11	(0.80)	粘板岩	片側基部	238	磨製石鏃
3		B	E−31	Ⅳb		e(f)	b	2.50	1.50	0.70	2.35	石英		239	
4		B	D−32	Ⅳb		e	b	2.70	2.20	0.44	1.95	黒曜石		240	
5		B	D−31	Ⅳb		e	e	2.42	1.80	0.55	1.88	玄武岩		241	
6		B	E−22	Ⅳb上		e	e	2.30	1.50	0.50	1.37	玄武岩		242	
7		C	C−30	Ⅳb		e	b	1.60	1.10	0.39	0.61	黒曜石		243	
8		C	C−27	Ⅳb		b	b	1.60	1.35	0.29	0.60	黒曜石		244	
9		C	ネ	Ⅳ		e(f)	e	1.90	(1.40)	0.70	(1.35)	黒曜石		245	
10		C	D−31	Ⅳb		e(f)	b	1.65	(1.10)	0.35	(0.67)	黒曜石		246	
11		C	D−31	古道直上		e(f)	e	2.00	1.50	0.55	1.55	玄武岩		247	
12		C	E−31	Ⅳb直上		e	f	(1.35)	(1.50)	0.40	(0.80)	黒曜石		248	
13		C	不明			e(f)	f	(1.85)	1.60	0.60	(1.80)	チャート		249	
14		C	C−26	Ⅳb		e(f)	b	(1.20)	(1.60)	0.65	(1.30)	黒曜石	先端	250	

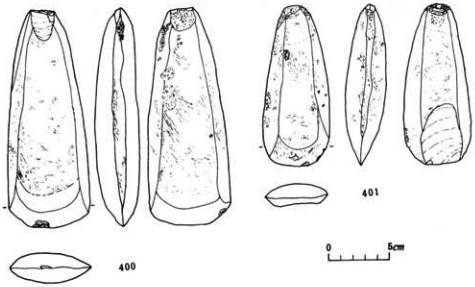
番号	形式	区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
15	平基式	C D−31	古道直上		d	c	1.40	1.35	0.60	0.82	黒曜石		251	
16		C C−27	Ⅳ b 上		e	c	1.50	(1.40)	0.35	(0.65)	チャート	片側基部	252	
17		C C−29	Ⅲ a		e (4)	d	1.62	1.42	0.62	1.23	黒曜石			
18		C C−28	Ⅳ b 上		d	f	(1.60)	(1.40)	0.56	(1.13)	黒曜石	片側基部		
19	凹基式	A E−21	Ⅳ b 上	j	e (4)	b	3.00	1.80	0.60	3.20	チャート		253	
20		A C−27	Ⅳ b	j	e (4)	b	1.60	1.20	0.50	0.15	黒曜石		254	
21		A E−22	Ⅳ	h	e (7)	f	(1.95)	(1.20)	0.40	(1.20)	黒曜石	先端 片脚	255	
22		A D−30	Ⅳ b 上	h	c	d	(2.10)	1.42	0.32	(1.26)	石英			
23		A E−21	Ⅳ	h	e (7)	c	2.20	1.80	0.59	1.85	チャート			
24		A C−28	Ⅳ b 直上	i	e (4)	d	2.30	2.30	0.65	3.60	黒曜石		256	
25		A D−27	Ⅳ b 上	i	c	a	1.92	1.12	0.31	0.60	玄武岩		257	
26		A C−21	Ⅳ 直上	i	e	c	2.50	1.50	0.50	1.30	黒曜石		258	
27		A F−24	Ⅳ	h	e (7)	c	1.42	1.20	0.17	0.55	チャート		259	
28		B E−31	Ⅳ b 上	j	c	a	2.49	2.00	0.41	1.35	玄武岩		260	先端部さらに削く実る
29		B F−18	Ⅳ	k	c	a	2.20	1.50	0.30	0.66	チャート		261	
30		B D−31	Ⅳ b	k	c	b	2.80	2.20	0.45	1.71	玄武岩		262	
31		B F−28	Ⅳ	k	c	b	2.42	2.00	0.35	1.15	チャート		263	
32		B D−30	古道直上	k	e (7)	b	1.70	1.38	0.20	0.47	玄武岩		264	
33		B E−31	Ⅳ b 直上	j	c	f	1.86	1.50	0.25	1.45	玄武岩	先端	265	
34		B D−29	Ⅳ b	j	d	f	(1.60)	1.70	0.29	(0.60)	石英	先端	266	
35		B E−31	Ⅳ b 直上	J	c	f	1.95	1.86	0.25	1.45	チャート	先端	267	
36		B C−26	Ⅳ b	k	d	b	1.80	1.70	0.60	0.76	黒曜石		268	
37		C F−27	Ⅳ b 上	d	c	f	(1.50)	1.40	0.31	(0.45)	黒曜石	先端	269	
38		C D−32	Ⅳ b	f	c	a	1.90	1.50	0.30	0.55	黒曜石		270	
39		C D−31	Ⅳ b	h	c	a	2.10	1.30	0.40	0.82	黒曜石		271	
40		C E−27	Ⅳ b	h	h	b	1.60	1.40	0.42	0.55	黒曜石		272	
41		C D−31	Ⅳ b	h	d	a	1.42	1.35	0.21	0.21	黒曜石	片脚	273	
42		C E−19	Ⅳ	g	c	a	1.60	1.40	0.40	0.60	黒曜石		274	
43		C D−32	Ⅳ b 上	f	c	f	(1.75)	(1.25)	0.42	(0.30)	黒曜石	先端	275	
44		C D−28	溝内	d	c	a	1.80	1.40	0.30	0.60	石英		276	
45		C D−31	古道上	d	d	a	1.32	(1.30)	0.50	(0.40)	黒曜石	片脚	277	
46		D D−27	Ⅳ b 直上	k	d	b	1.35	(1.30)	0.42	(0.45)	黒曜石	片脚		
47		D C−27	Ⅳ	k	c	a	1.65	1.45	0.40	0.55	黒曜石		278	

番号	形式		区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
48		D	C−26	Ⅲc 下	k	d	b	1.60	1.60	0.22	0.75	黒曜石		279	
49		D	D−31	Ⅳb 上	k	d	a	1.32	1.30	0.40	0.49	黒曜石		280	
50		D	E−32	Ⅳb	h	d	b	1.60	1.60	0.60	0.90	黒曜石	先端	281	
51		D	D−32	Ⅳb	e	d		1.50	1.60	0.60	0.90	黒曜石		282	
52		D	E−16	Ⅳ	k	c	a	1.95	1.10	0.40	0.60	黒曜石		283	
53		E	C−23	Ⅲa	e	$e_{(p)}$	b	4.00	1.80	0.70	4.38	黒曜石	先端	284	大形鏃
54		E	C−29	Ⅳb 上	f	c	b	3.90	2.41	0.51	4.25	黒曜石		285	大形鏃
55		E	D−29	Ⅳb	d	c	b	3.52	2.40	0.45	3.13	チャート		286	大形鏃
56	岡	E	E−23	Ⅳ	d	c	f	2.40	2.20	0.50	2.30	黒曜石	先端	287	大形鏃
57		E	E−21	Ⅲa 下	d	c	c	2.70	0.92	0.50	1.82	黒曜石	片脚	288	
58		E	D−22	Ⅳ	j	c	a	3.12	1.95	0.50	2.70	チャート		289	
59		E	E−23	Ⅳ上	f	$e_{(d)}$	f	3.00	2.20	0.50	2.60	玄武岩		290	
60		E	不明		d	c	f	2.30	1.60	0.60	1.30	チャート		291	
61		E	E−30	Ⅲa	d	c	f	2.50	1.52	0.29	1.01	黒曜石	先端 片脚	292	
62		E	C−23	Ⅳ上	d	c	b	2.30	1.90	0.40	1.55	チャート		293	
63		E	D−21	Ⅳ	e	c	a	2.40	1.62	0.50	1.45	チャート	片脚	294	
64	基	E	C−27	Ⅳb 上	e	c	a	2.61	(1.60)	0.30	(1.30)	チャート	片脚	295	
65		E	D−24	Ⅳ上	f	c	a	2.90	(1.90)	0.40	(1.95)	黒曜石	側片 縦脚	296	
66		E	E−31	Ⅳb	e	$e_{(p)}$	c	2.67	(1.90)	0.50	(2.00)	チャート	片脚	297	
67		E	D−25	Ⅳb 上	f	$e_{(d)}$		3.10	1.80	0.45	2.07	玄武岩		298	
68		E	表	Ⅳ	d	$e_{(p)}$	f	2.60	1.60	0.50	1.56	チャート		299	
69		F	E−27	Ⅲb 下	f	c	c	2.32	1.50	0.30	1.13	黒曜石		300	
70		F	E−24	Ⅳ	f	$e_{(d)}$	a	2.40	1.40	0.45	1.05	石英		301	
71		F	C−29	Ⅳb	d	c	a	2.00	1.10	0.30	0.45	黒曜石	片脚	302	
72	式	F	表	Ⅳ	d	c	c	3.30	(1.70)	0.45	(2.20)	石英	片脚	303	
73		F	E−32	Ⅳb	d	c	a	(2.55)	1.50	0.50	(1.29)	チャート	片脚	304	
74		F	E−24	Ⅳ	l	c	a	(3.10)	(1.70)	0.55	(2.10)	チャート	片脚	305	
75		F	D−25	Ⅳb 上	f	c	a	2.70	1.70	0.40	1.67	黒曜石		306	
76		F	D−30	Ⅲa 下	i	c	a	2.40	(1.20)	0.32	(0.84)	黒曜石	側片 縦脚	307	
77		F	D−29	Ⅳb 直上	d	c	f	(1.90)	(1.65)	0.40	(0.70)	黒曜石	先片 端脚	308	
78		F	D−20	Ⅳ	d	$e_{(p)}$	f	(2.60)	1.80	0.32	(1.30)	黒曜石	先片 端脚	309	
79		F	E−20	Ⅲ	f	c	f	(2.30)	1.80	0.60	(2.20)	チャート	先端	310	
80		F	C−29	Ⅳb	d	$e_{(p)}$	a	(2.60)	1.42	0.55	(1.72)	黒曜石	片脚	311	

番号	形式	区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	掲図番号	備考
81	F	F−25	Ⅳb	f		c	2.50	1.70	0.40	1.75	チャート		312	
82	F	C−27	Ⅳb	b	c	a	2.50	1.43	0.51	1.34	黒曜石		313	
83	F	表	Ⅳ	f	c	a	2.20	1.50	0.41	1.25	チャート		314	
84	F	E−20	Ⅳ上	d	c	b	3.00	1.90	0.60	2.95	石英		315	
85	F	E−26	Ⅳb上	d	c	f	2.80	(1.40)	0.45	(1.55)	チャート	片脚	316	
86	G	表採		f	$e_{(1)}$	c	2.42	(1.65)	0.30	(1.00)	チャート	片脚	317	
87	G	C−27	Ⅳb上	d	$e_{(1)}$	b	2.00	1.80	0.50	1.47	チャート		318	
88	G	D−23	Ⅳ上	d	$e_{(1)}$	b	2.60	1.80	0.50	1.90	チャート	片脚	319	
89	同 G	D−25	Ⅳ	d	$e_{(1)}$	a	2.30	1.50	0.50	1.22	黒曜石		320	
90	G	D−22	Ⅳ上	d	$e_{(1)}$	f	2.00	1.60	0.43	1.10	石英	先端 両脚	321	
91	G	E−32	Ⅳb	f	$e_{(1)}$	a	2.00	1.50	0.42	0.85	黒曜石		322	
92	G	E−24	Ⅳ	f	$e_{(1)}$	c	2.21	1.70	0.40	1.35	頁岩		323	
93	G	D−28	Ⅳb上	l	c	d	1.70	1.40	0.40	0.95	チャート	両脚	324	
94	H	C−27	Ⅳb上	i	$e_{(1)}$	c	2.50	1.90	0.55	2.38	玄武岩		325	円脚鏃
95	H	C−19	Ⅳ	f	$e_{(1)}$	f	2.90	2.20	0.55	2.85	玄武岩		326	円脚鏃
96	H	C−27	Ⅳb上	f	$e_{(1)}$	c	2.50	1.80	0.30	2.45	玄武岩		327	円脚鏃
97 基	H	D−28	Ⅳb直上	f	$e_{(1)}$	c	2.50	2.00	0.35	1.97	チャート		328	円脚鏃
98	H	E−22	Ⅳ	e	$e_{(1)}$	a	2.50	2.10	0.50	2.76	チャート		329	円脚鏃
99	H	E−23	Ⅳ	f	$e_{(1)}$	b	2.80	1.80	0.60	2.15	玄武岩		330	円脚鏃
100	H	C−27	Ⅳb	h	$e_{(1)}$	a	2.35	1.70	0.31	2.29	チャート		331	円脚鏃
101	H	E−21	Ⅳb直上	f	$e_{(1)}$	c	2.80	2.08	0.65	3.73	玄武岩		332	円脚鏃
102	H	C−20	Ⅳ上	i	$e_{(1)}$	f	(1.70)	1.95	0.60	(1.90)	黒曜石	手欠	333	円脚鏃
103	H	E−27	Ⅳb	d	$e_{(1)}$	b	2.30	1.62	0.60	1.20	チャート		334	円脚鏃
104	H	D−22	Ⅳ上	f	$e_{(1)}$	b	2.30	1.80	0.40	1.40	チャート		335	円脚鏃
105 式	H	D−24	Ⅳb上	( )	$e_{(1)}$	c	2.00	1.80	0.45	1.47	チャート		336	円脚鏃
106	H	D−23	Ⅳ直上	f	$e_{(1)}$	c	2.20	1.72	0.40	1.60	チャート	先端	337	円脚鏃
107	I	E−22	Ⅳb	c	d	a	1.94	1.62	0.40	0.76	チャート		338	鍬形鏃
108	I	D−27	Ⅳb	a	d	a	1.50	(1.10)	0.30	(0.27)	チャート	片脚	339	鍬形鏃
109	I	C−27	Ⅳb	l	d	b	1.60	(1.40)	0.30	(0.37)	チャート	片脚	340	鍬形鏃
110	I	E−21	Ⅳ上部	c	$e_{(1)}$	b	2.55	1.65	0.51	1.15	チャート		341	片脚鏃
111	I	E−31	Ⅲa	c	c	b	2.45	1.75	0.40	1.15	チャート		342	両脚にくびれあり
112	I	C−27	Ⅳb直上	c	$e_{(1)}$	a	2.35	(1.50)	0.40	(0.94)	チャート	片脚	343	鍬形鏃
113	I	C−21	Ⅳ	a	d	a	1.90	1.75	0.30	0.82	黒曜石		344	鍬形鏃

番号	形式	区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
114	I	D−27	Ⅲa	a	e(f)	f	2.25	1.60	0.25	0.94	玄武岩	先端	345	尖形鏃
115	I	C−27	Ⅳb	a	e(f)	f	(2.00)	(1.50)	0.47	(1.05)	黒曜石	先端 片脚		尖形鏃
116	I	C−27	Ⅳ	c	e(f)	a	2.27	1.70	0.40	1.06	黒曜石		346	尖形鏃
117	I	F−25	Ⅳb上	c	e(f)	f	(2.20)	(1.60)	0.52	(1.20)	玄武岩	先端 片脚	347	尖形鏃
118	I	F−21	Ⅳ	a	e(f)	c	2.25	(1.60)	0.30	(0.75)	玄武岩	片脚	348	尖形鏃
119	I	C−28	Ⅳb直上	c	e(f)	a	1.60	1.25	0.22	0.72	石英		349	尖形鏃
120	I	C−28	Ⅳb上	a	e(f)	f	(1.50)	1.20	0.30	(0.37)	黒曜石	先端 片脚	350	尖形鏃
121	I	D−27	Ⅳb上	c	b	a	2.00	(1.60)	0.35	(0.67)	チャート	片脚	351	尖形鏃
122	四 J	表採		c	e(f)	a	3.30	2.30	0.60	3.40	玄武岩		352	粗製
123	J	E−23	Ⅳ	c	d	b	3.20	(2.00)	0.70	(3.80)	玄武岩	片脚	353	粗製
124	J	D−27	Ⅳ	a	e(f)	b	3.20	(1.65)	0.45	(2.00)	玄武岩	片脚	354	粗製
125	J	E−24	Ⅳ	b	c	b	2.85	(1.70)	0.35	(2.10)	玄武岩	片脚	355	
126	K	E−29	Ⅲa	a	b	a	2.85	1.65	0.42	1.05	黒曜石		356	
127	K	E−29	古道	a	b	b	(2.25)	(1.50)	0.30	(0.64)	石英		357	
128	K	D−22	Ⅳ上	d	b	b	3.10	1.65	0.45	1.53	チャート		358	
129	K	E−31	Ⅳb直上	d	b	a	3.01	2.10	0.40	1.67	玄武岩		359	先端部さらに鋭く尖る
130	基 K	C−29	Ⅳb	c	b	a	2.05	1.40	0.35	0.70	チャート		360	
131	K	D−27	Ⅳb直上	e	b	b	2.90	(2.10)	0.40	(2.25)	チャート	片脚	361	
132	K	F−26	Ⅳb	c	b	a	3.15	1.60	0.45	1.70	チャート		362	
133	K	D−25	Ⅳb上	f	b	a	2.75	1.68	0.60	1.60	玄武岩		363	
134	K	D−28	Ⅳb	l	b	a	(1.50)	(1.15)	0.25	(0.27)	黒曜石	両脚	364	
135	L	C−26	Ⅳb	d	f	a	2.95	(1.90)	0.30	(1.35)	黒曜石	片脚	365	
136	L	F−18	Ⅳ	d	f	a	3.02	1.60	0.35	1.40	石英		366	
137	L	E−27	Ⅲc	k	f	a	2.20	1.22	0.22	0.74	石英		367	五角形鏃
138	式 L	E−24	Ⅳb上	g	f	b	3.20	1.65	0.62	3.90	チャート		368	五角形鏃
139	L	E−20	Ⅲ	J	f	a	2.22	1.10	0.30	0.74	チャート		369	五角形鏃
140	M	C−28	Ⅳb上	k	a	b	1.75	(1.22)	0.25	(0.47)	黒曜石	片脚	370	鋸歯
141	M	D−21	Ⅳ	l	a	b	1.70	1.40	0.31	0.63	黒曜石	片脚	371	鋸歯
142	M	D−27	Ⅳb	k	a	f	(2.70)	1.60	0.32	(1.40)	頁岩	先端	372	鋸歯
143	M	と	Ⅳ	d	a	b	(1.60)	1.30	0.30	(0.50)	黒曜石	先端	373	鋸歯
144	M	D−28	Ⅳb	g	a	a	2.15	1.60	0.42	0.86	黒曜石		374	鋸歯
145	M	C−23	Ⅳ上	a	a	a	2.40	1.70	0.35	1.00	玄武岩		375	鋸歯
146	N	6	Ⅳ	k	e(f)	b	(2.20)	1.90	0.51	(0.63)	玄武岩	先端	376	

番号	形式		区	層	基部	側辺	先端	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	欠損部	挿図番号	備考
147	小石鏃	A	C−27	Ⅳ				1.45	(1.00)	0.15	(0.28)	黒曜石	片基端部	379	
148		A	D−28	Ⅳb				1.60	1.30	0.20	0.17	黒曜石		380	
149		A	D−28	Ⅳb直上				1.00	0.90	0.12	0.10	黒曜石	片基端部	381	
150		A	C−27	Ⅳ				1.20	1.00	0.15	0.15	黒曜石		382	
151		A	C−21	Ⅳ				1.50	1.50	0.22	0.48	黒曜石		383	
152		A	C−28	Ⅳ下				1.32	1.20	0.20	0.20	黒曜石		384	
153		A	C−28	Ⅳ				1.30	1.30	0.25	0.35	黒曜石		385	
154		A	D−31	Ⅵb						0.21	0.05	黒曜石	半欠		
155		A	C−29	Ⅳb直上						0.35	0.23	黒曜石	半欠		
156		B	ネ	Ⅳ	g	d	a	1.40	1.30	0.30	0.38	黒曜石		386	
157		B	C−30	Ⅳ	g	d	a	(1.07)	1.10	0.20	(0.14)	黒曜石		387	
158		B	C−29	Ⅳ	k	d	b	1.30	1.10	0.25	0.33	黒曜石		388	
159		B	C−26	Ⅳb	k	d	b	(1.00)	(0.90)	0.30	(0.15)	黒曜石		389	
160		B	C−27	Ⅳ b 上	g	d	a	1.40	1.30	0.20	0.51	黒曜石		390	
161		B	C−29	Ⅵ b 上	g	d	a	1.40	(1.00)	0.32	(0.31)	黒曜石	片脚	391	
162		B	C−26	Ⅳ b 上	k	d	a	1.55	(1.10)	0.35	(0.50)	黒曜石	片脚	392	
163		C	C−30	Ⅲa	d	d	b			0.18	0.07	黒曜石	先端片脚		
164		C	C−30	Ⅳb	d	d	a	1.12	0.90	0.15	0.14	黒曜石		393	
165		C	C−30	Ⅳ b 上	k	d	a	0.90	1.30	0.18	0.11	黒曜石		394	
166		C	C−28	Ⅳb	f	d	b	1.35	(1.30)	0.25	(0.20)	黒曜石	片脚	395	
167		C	C−29	Ⅳb	k	d	a	1.20	1.07	0.18	0.11	黒曜石		396	
168		C	C−29	Ⅳb直上	g	d	a	1.00	1.10	0.20	1.50	石英		397	
169		C	C−27	Ⅳ b 上	g	c	b	1.60	(1.05)	0.15	(0.21)	黒曜石	片脚	398	
170		C	D−31	古道直上	g	d	b	(1.20)	(1.30)	0.30	(0.29)	黒曜石	先端	399	
171	特殊		E−31	Ⅳ				3.30	1.20	0.50	1.80	玄武岩		377	有茎鏃
172			D−31	Ⅳf				(2.00)	1.85	0.60	(1.55)	黒曜石	下端	378	喪殼鏃



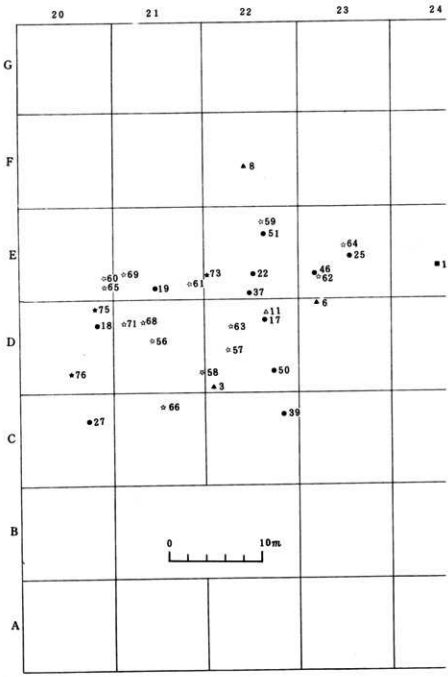
第37図　磨　製　石　斧　実　測　図

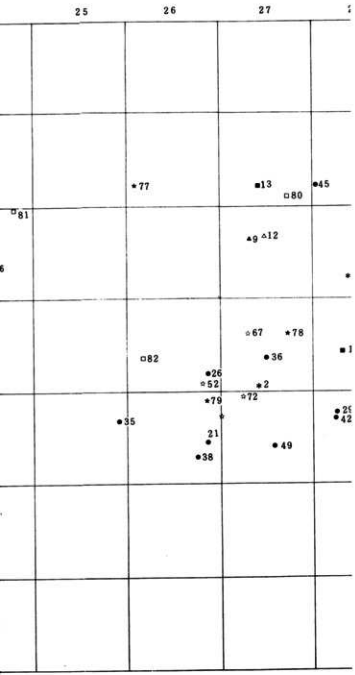
2．磨製石斧（第37図，図版27）400・401

石斧はⅢａ層より２点出土したが，何れも磨製である。**400**は太形蛤刃で，刃部角約75度を測り，多方向の夥しい擦痕が見られる。基部上部には敲打痕が残り，緻密な質の砂岩製である。**401**も本来は太形蛤刃であったと思われるが，刃先を鋭くするために剥離して再度磨き，刃部角を約55度にしている。**400**よりも細かい粒子の砂岩製で，灰色を呈する。

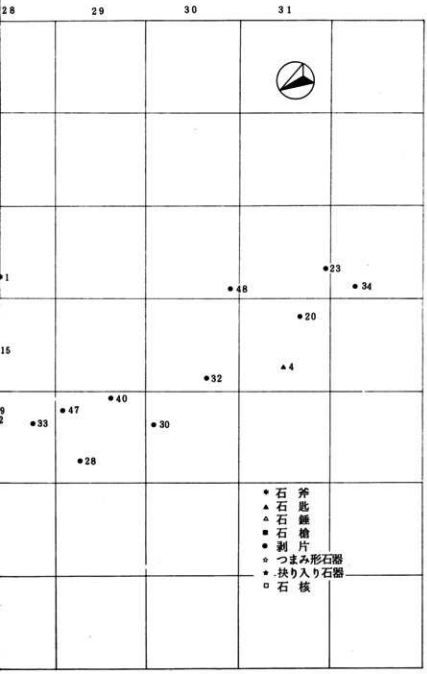
3．石　匙（第39図，図版27）402～408

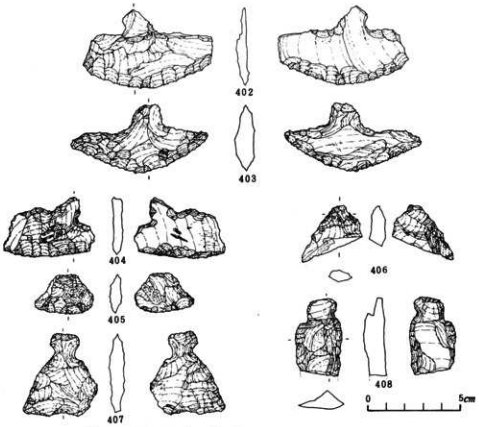
横型５点，縦型２点。**408**以外はⅣ層からの出土で，表採品も他の遺物から類推するとⅣ層中にあったものと思われる。**402～406**は横型石匙であるが，**405**以外はすべて外弯刃である。**402**は略平行四辺形を呈し，刃部も大まかに加工した粗製石匙で，つまみ部も薄く，打瘤部に自然面が残る。**403**は三日月形を呈し，厚手の精製石匙である。つまみ部と片面の刃部の加工は粗で，刃部角約60度を測る。404は玉髄の自然面を残した剥片で簡単なつまみを施し刃部は弯曲している。405も粗雑な玉髄を用いている。つまみ部はみられないが交互剥離の施しが石匙に類似しているため石匙の項に記載した。406はチャートで石匙の項にいれたが剥離等より石槍の分類の可能性もある。407は玄武岩を用いた撥状の石匙である。つまみ部はよく整形され，側縁部も交互剥離が施されているが下縁部は粗雑である。408はチャート製の縦長剥片の打瘤部側につまみを付けている。刃部は直線をなすもので先端部が欠損しているが，刃部には細かな調整を施こしている。


20
21
22
23
24
G
F
E
D
C
B
A
8
59
51
64
25
1
60
69
65
19
61
73
22
46
62
37
6
75
18
71
68
56
11
17
63
57
76
58
50
3
66
39
27
0
10m



第38図　縄文時代石器分布図


28
29
30
31
23
1
48
34
20
15
4
32
40
47
33
30
28
石 斧
石 匙
石 鏃
石 槍
剥 片
つまみ形石器
抉り入り石器
石 核



第39図　石　匙　実　測　図

4．石錐（409・410）第40図　図版28

409は玄武岩の剥片を用い先端部を両端から加工調整して錐部を作り出したものであるが，尖頭状石器の可能性もある。410は断面三角形のやや厚めのチャートを用い頂部の一稜に両端から加工調整して錐部を作り出したものである。

5．石槍（411～414）第40図　図版28

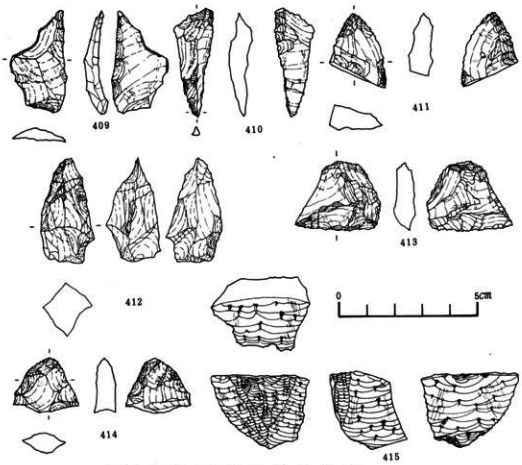
尖頭状石器であり，412が玄武岩であるが，他は全てチャートであり欠損している。チャート製の石槍は所謂木葉形尖頭器と呼ばれるものに類似している。

6．石核（415）第40図　図版28

定形の石核より残核ともとれる三船の黒曜石である。

7．加工痕のある剥片（416～428）第41図　図版28

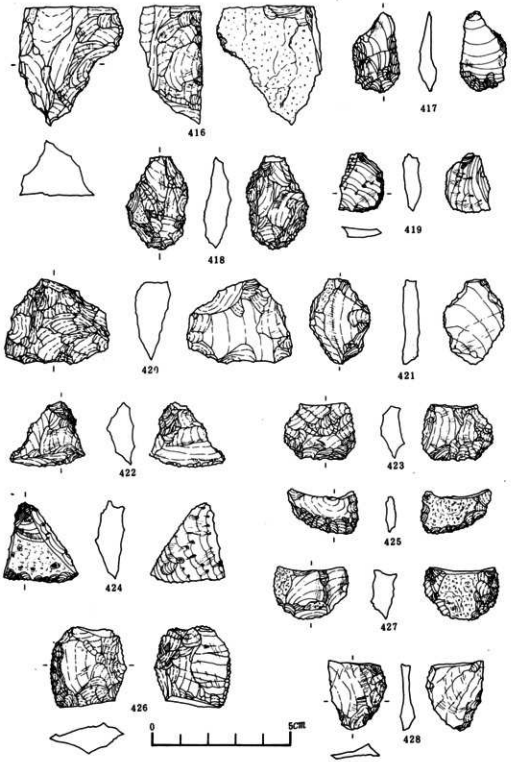
加工痕のある剥片と頃を設けたが，スクレイパーと呼ばれるものがほとんどである。416はチャートの原石を用い側縁部に調整剥離が施されている。417～422は石材の差はあるが，全て剥片の縁辺部に交互剥離による加工が施されたスクレイパーである。欠損しているものが多い。423はチャートを用いた側辺に片面加工を下縁部に両面加工を施したスクレイパーである。その他も全てチャート製のスクレイパーである。



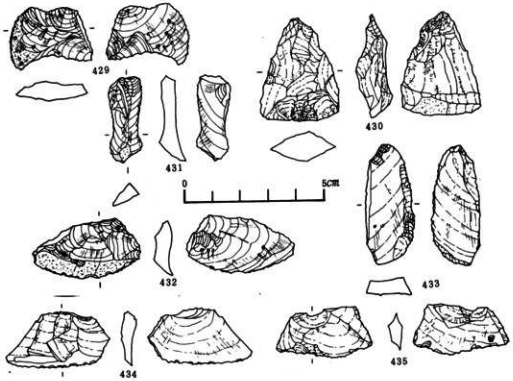
第40図　石　錐・石　槍・石　核　実　測　図

8．使用痕のある剥片（429～438）第42図　図版29

使用痕のある剥片は，13点出土した。石材は黒曜石・玄武岩・チャートを利用している。出土層位はⅣ層が主である。429は横剥ぎ剥片であり，自然面を残し，縁辺部一ケ所に使用痕がみられる。430は，玄武岩で表裏共剥離痕がみられ，石鏃の調整加工前とも思われるがここでは縁辺部の使用痕より剥片にいれた。431は気泡の少ない良質の黒曜石を用い，細石器文化に検出される調整剥離に類似している。調整された石核から剥離されたものであろう。側辺部に使用痕がみられる。432は横長の自然面を残した黒曜石製剥片で，下縁辺部に使用痕がみられる。433は，チャート製の縦長剥片であり石縁辺部に加工痕，使用痕がみられる。434，435とも玄武岩を利用した横剥ぎの剥片であり，下縁辺部に使用痕がみられる。436，437，438はいずれも石材の差異は認められるものの，細石刃状の剥片である。稜がしっかりしていないのとⅣ層上部より出土し，細石刃の確認が出来なかったものである。いずれも側辺に使用痕がみられる。



第41図　加工痕ある剥片実測図



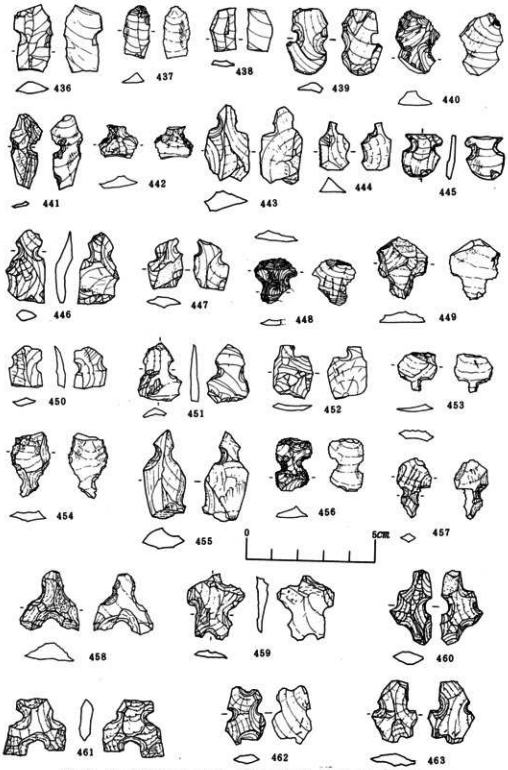
第42図　使用痕ある剝片実測図

9．つまみ形石器（439～457）

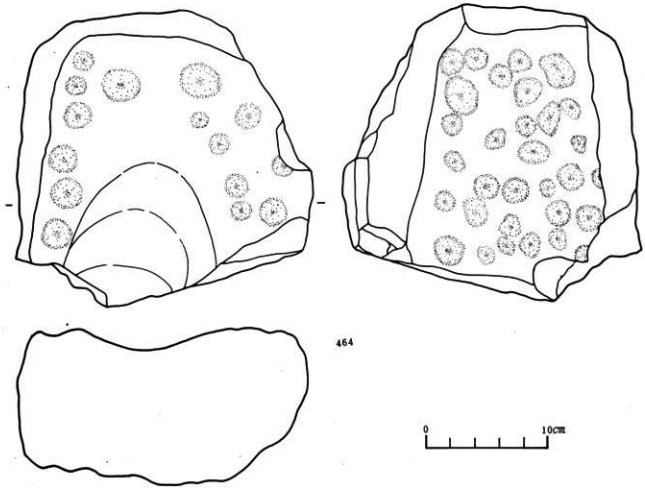
最近，西北九州で調査報告がなされているつまみ形石器と思われるものである。石材は黒曜石，玄武岩，チャートを用い19点出土している。縦長剝片を主として用いているが，444，450のように横剝ぎ剝片を利用したものもある。抉りも打撃点付近にあるもの，ほぼ中間部にあるもの，先端部にあるものと一定の方向性をもっていない。また抉りの打撃点は，表裏二点からのものは少なく，一点からの打撃による抉りが多くみられる。

10．抉り入り石器（458～463）

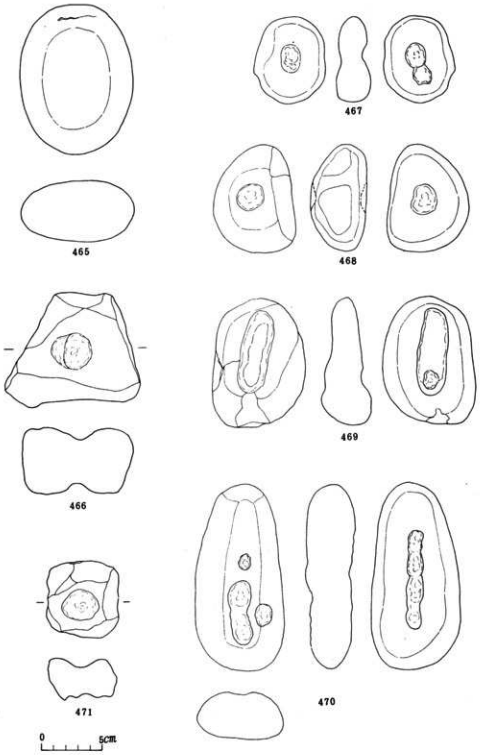
抉り入り石器は，つまみ形石器が左右対称の二つの抉りをもっているのに対し，それ以上抉りを入れた石器である。458は玄武岩を用い3個所の抉りがみられる。459も玄武岩で4個所抉りがみられ入形（ひがた）をしている。460は砂岩で4個所に抉り，461は玄武岩製で3個所に抉りを入れよく整形されている。462，463は石材の差異はあるが，つまみ形石器の上縁と下縁に抉りを入れたものである。



第43図　使用痕ある剥片・剥片・つまみ形石器・抉り入り石器実測図



第44図 蜂 ノ 巣 石



第45図 磨 石・凹 石

蜂ノ巣石（464）

蜂ノ巣石と呼ばれる石皿が2点出土した。2点とも安山岩の自然礫を利用し，表裏に1～2㎝の敲打による凹みをもつものである。図示できなかったものは，取り上げたとたんバラバラになり，実測不可能となってしまった。464も，剝脱しているがほぼ原形をとどめている。石皿の特徴を示めすくぼみ部がある方を表とすると，くぼみを取り囲むように小さな凹みが15個所みられた。また裏面には，33個所の凹みをもっている。石皿の全体として，このままの形であったのか，石皿が破損して凹みをつけたのかは不明であるが，2点とも同型である。

磨石（465）

自然の川原石を利用し，磨いた跡があるものであるが，当遺跡では凹みのある磨石が多く，凹みのあるものは凹石として区別した。465は川原石を利用した，安山岩のものである。

凹石（466～471）

凹石は大きく分けて，磨石兼用のもの，ハンマーストンを利用したもの，凹石だけの用途の三通りに分けられる。467は，磨石の用途を残し，中央部表裏に敲打による凹みのあるものである。468は一見いびつな形の磨石でやはり，中央部表裏に敲打による凹みをもつ。469，470は，楕円状の自然石を利用したもので，表裏二ケ所に細長い敲打による凹みをもつものである。469は砂岩。470は安山岩であり先端部にも敲打痕がみられる。466，471は角礫を用いた表裏二箇所に凹みをもつ凹石である。

第3表 石 器 分 類 表

番号	形 式	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	備 考	挿図番号
1	石 斧	E−28	3 a 下	17.95	6.65	3.6	689.0	砂 岩		400
2	〃	D−27	3 a 上	13.30	5.20	3.40		砂 岩		401
3	石 匙	D−22	4 上	7.10	4.30	0.60	18.5	玄武岩	横 型	402
4	〃	E−31	4 b 上	7.42	3.70	1.00	19.15	玄武岩	横 型	403
5	〃	12	表 一 Ⅲ	4.90	3.20	0.50	10.10	玉 髄	横 型	404
6	〃	D−23	4 上	(3.20)	(2.10)	0.65	(3.90)	玉 髄	横 型	405
7	〃	13	表 一 4	(3.30)	(2.20)	(0.85)	(3.55)	チャート	横 型	406
8	〃	F−22	4	(4.50)	4.05	0.80	(11.65)	玄武岩	縦 型	407
9	〃	E−27	3 c 下	4.20	2.45	1.00	10.5	チャート	縦 型	408
10	石 錐	D−26	表	3.70	2.05	0.45	3.10	玄武岩		409
11	〃	D−22	4 上	4.00	1.40	0.80	3.4	チャート		410
12	〃	E−27	4 上	2.45	2.10	0.75	2.25	石英(?)		
13	石 槍	ヒ		3.10	(2.50)	0.80	(6.25)	チャート		413
14	〃	80−ヒ	4 a	(2.35)	(2.00)	(0.80)	(3.35)	チャート		414
15	〃	D−28	3 a 下	3.80	1.95	1.90	10.4	玄武岩		412
16	〃	E−24	4	(2.70)	(2.00)	(0.90)	(3.55)	チャート		411
17	加工痕のある剥片	D−23	4 上	2.90	1.65	0.61	3.15	チャート		417
18	〃	D−20	4	3.35	2.20	0.85	6.25	チャート		418
19	〃	E−21	4 b 直上	3.60	3.50	1.25	14.65	チャート		420
20	〃	D−31	4 b 直上	2.12	1.60	0.60	1.80	黒曜石		419
21	〃	C−26	4 b	3.10	2.20	0.52	4.35	チャート		421
22	〃	E−22	4	2.70	2.30	0.95	4.55	チャート		422
23	〃	E−31	4 b 直上	2.55	2.10	0.71	4.50	チャート		423
24	〃	F−24		2.90	2.70	0.95	5.25	黒曜石		424
25	〃	E−24	4	2.90	2.80	0.93	8.05	チャート		426
26	〃	D−26	4 b	2.50	1.50	0.35	1.90	玉 髄		425
27	〃	C−20	4 上	2.60	1.70	0.70	4.90	玉 髄		427
28	〃	C−29	3 a	2.4	1.55	0.80	2.95	黒曜石		
29	〃	C−28	4 b 上	3.0	2.25	1.00	5.70	チャート		
30	〃	C−30	4 b 直上	3.55	2.35	0.50	5.70	チャート		
31	〃	93	表−4 b	2.50	2.05	0.50	2.55	チャート		428
32	〃	D−30	4 b	2.30	1.50	0.85	2.20	石 英		

番号	形式	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	挿図番号
33	加工痕のある剥片	C−28	4 b	2.70	1.90	0.70	3.20	チャート		
34	〃	E−32	4 b	4.30	3.70	2.00	30.80	チャート		416
35	使用痕のある剥片	C−25	4	2.90	2.30	0.70	4.00	黒曜石		429
36	〃	D−29	4 b 上	2.60	1.40	0.50	2.25	玄武岩		436
37	〃	E−22	4	3.70	2.85	1.10	9.55	玄武岩		430
38	〃	C−26	4 b	3.90	2.10	0.60	4.60	黒曜石		432
39	〃	C−22	4 上	3.80	1.95	0.50	2.80	玄武岩		434
40	〃	C−29	4 b	3.10	1.20	0.50	2.00	黒曜石		431
41	〃			4.40	1.80	0.60	6.25	チャート	1・J トレンチ I	433
42	〃	C−28	4 b	3.10	3.45	1.05	9.80	チャート		
43	〃	26	F − I	2.00	1.30	0.25	1.20	黒曜石		
44	〃	57	表−4 b	3.50	1.60	0.50	2.50	玄武岩		435
45	〃	D−28	4	3.40	1.60	0.60	2.45	玄武岩		
46	〃	E−23	4 上	2.00	1.00	0.35	0.57	チャート		437
47	〃	C−29	4 b	3.30	2.60	0.25	2.95	黒曜石		
48	剥片	E−30	4	2.65	2.30	2.10	18.33	変成質砂岩 ?		
49	〃	C−27	4 b	1.70	0.90	0.20	0.40	黒曜石		438
50	〃	D−22	4	2.50	2.90	1.05	9.10	チャート		
51	〃	E−22	4 上	4.15	1.50	0.05	3.50	玉髓		
52	つまみ形石器	D−26	4 b	2.55	1.60	0.50	1.50	玄武岩		439
53	〃	F−24	4 上	2.40	1.70	0.38	1.35	黒曜石		440
54	〃	50	表−3 a	2.90	1.65	0.55	2.65	玄武岩		443
55	〃	103	表−3 下	2.85	1.20	0.70	0.80	黒曜石		441
56	〃	D−21	4 上	1.50	1.30	0.15	0.63	黒曜石		442
57	〃	D−22	3	1.95	1.00	0.40	0.45	チャート		
58	〃	D−21	4 上	1.85	1.18	0.20	0.85	玄武岩		444
59	〃	E−22	4	1.65	1.45	0.55	0.60	黒曜石		445
60	〃	E−20	4	2.80	1.50	0.22	2.20	チャート		446
61	〃	E−21	4 b 上	2.00	1.30	0.40	1.005	玄武岩		447
62	〃	E−23	4 上	1.72	1.65	0.40	0.85	黒曜石		448
63	〃	D−22	4 上	1.90	2.30	0.35	1.65	玄武岩		449
64	〃	E−23	4	2.20	1.60	0.04	1.60	玄武岩		
65	〃	E−20	4 上	1.65	1.25	0.25	0.65	玄武岩		450

番号	形式	区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考	掲図番号
66	つまみ形石器	C−21	4 上	2.25	1.35	0.20	1.00	チャート		451
67	〃	D−27	4 b 上	2.05	1.50	0.20	0.80	チャート		452
68	〃	D−21	4	1.50	1.50	0.20	0.40	玄武岩		453
69	〃	E−21	4	2.50	1.50	0.30	1.15	玄武岩		454
70	〃	C−27	4 b	3.40	1.61	0.80	3.95	玄武岩		455
71	〃	D−21	4	2.00	1.30	0.40	0.96	チャート		456
72	〃	ヒ		2.30	1.30	0.30	0.95	玄武岩		457
73	抉り入り石器	E−22	4	2.30	2.30	0.60	1.87	玄武岩？		458
74	〃	73	3 a 下	2.50	2.15	0.21	1.75	玄武岩		459
75	〃	D−20	4	2.85	1.60	0.50	1.95	砂岩		460
76	〃	D−20	4	2.40	2.20	0.40	2.15	玄武岩		461
77	〃	F−26	4 b 上	2.20	1.55	0.21	1.005	玄武岩		462
78	〃	D−27	4 b 上	2.40	1.70	0.50	1.55	砂岩		463
79	〃	C−26	4 b	2.10	1.75	0.47	1.50	玄武岩		
80	石棒	D−27	4 下	2.35	2.60	2.05	55.25	黒曜石		
81	〃	E−24	4	3.50	2.60	2.10	33.40	黒曜石		415
82	〃	C−26	4 b	2.20	2.80	1.90	11.10	黒曜石		

(3) 小　括

縄文式土器

縄文式土器を主とし，弥生式土器も少量出土している。縄文式土器は5類土器が最も多い。次に4類土器である。以下特徴的なものについてまとめてみたい。

1類土器

内厚の器壁と内面平滑な調整，円筒形で平扭面を有する口唇部，稜杉状の胴部など石坂式の特徴をもっている。しかし，口唇部に刻線のないもの，胴部に縦に貝殻条痕による調整を行っているもの，aの3～12のごとく連点刺突文による文様を有するものなどもあり，変化に富んでいる。aは石峰遺跡の連点鋸歯文土器との類縁関係が深い。①

2類土器

少量の出土であったが篦状施文具による平行沈線を文様の基本とするもので，三代寺遺跡の第Ⅳ類土器に酷似している。②

3類土器

数片の出土である。口縁部は貝殻刺突線文を施し，胴部は貝殻腹縁による押圧文で調整している。吉田式の特徴と類似しているが，押し引き文と押圧文という施文法が異なっている。加栗山遺跡のⅢbに該当するものであろう。③

4類土器

本遺跡では5類土器についで，多く出土した。口唇部の平坦面，口縁部の貝殻縁を刺突した文様，胴部の貝殻条痕とさらに重複しての貝殻刺突線文，楔形凸帯等の特徴から前平式土器と考えられる。波状口縁で山形隆起部を有する角筒土器を伴っている。

5類土器

本遺跡で最も多く出土したが，破片のみで完形品はみられなかった。特徴をまとめると①ラッパ状に開く大きな口縁で，途中で屈折してやわらかい「く」字形を呈すること。②波状口縁を有すること。③文様は口縁端部の刻目と，口縁上部，屈折部，頸部付近にみられる細隆線刻目凸帯を有することと，これらの間に浅い沈線文を施すこと。④頸部のくびれ部内面に稜線をもつことなどである。これらの特徴はすでに石峰遺跡出土の土器の中に平栫式土器の一部として「…口縁部の肥厚の痕跡が屈曲となって残り，刻目凸帯が細隆線化し，頸部と胴部の堺の土器内面の稜線は，次に出現する塞ノ神式の特徴であり，移行形態としての様相を示している。…」と報告されている。④これらの土器は，以上のごとく平栫式から塞ノ神式への移行形態の土器として考えられるが，胴部以下の文様については不明である。しかしながら，出土状況によれば7類a土器と共伴して出土していたことは確実である。共に分布はD－21・22区にみられⅣ層上位に多く出土している。また土器の色調，胎土も良く類似しており，文様に細隆線刻目凸帯を有することなどが共通点が多く，5類土器の胴部にあたるものと考えられる。7類aは沈線で区画されない撚糸文を有する土器で塞ノ神A式aと呼ばれるものである。これらのことから5類土器は，口縁部は平栫式から塞ノ神式へという移行形態を示し，胴部はすでに塞ノ神Aa③

式というまさに平栫式と塞ノ神式をつなぐ型式変化の中の中間的な特徴をもつ土器といえよう。

6類土器

5類土器の特徴に，さらに刺突連点文を加えたものである。したがって口縁部の文様帯部分は空間のないように文様が施文されている。細隆線刻目凸帯文も，凸帯そのものが簡略化され，刻目だけが強調されている。器形も途中の屈折部がなくなり，直線的に開く傾向がある。胎土，焼成共に5類土器とは異なっているが，5類同様平栫式から塞ノ神式への中間形態の土器といえよう。

7類土器

7a類は撚糸文を縦および網目状に間隔をおいて施したもので，塞ノ神A式aといわれるものである。すでに前述したように5類土器と同じ，細隆線刻目凸帯を有し，また出土状況から[4]5類土器の胴部破片と思われる。7b類は直沈線文で区切られた中に撚糸文を配するもので，塞ノ神A式bと考えられる。

8類土器

篦状の刺突具で連点文を施すもの（a）や，貝殻腹縁部で連続した刺突文を有するもの(b)幾何学的な篦描きの沈線内に貝殻条痕を充当したもの（c）などに細分類した。Cは塞ノ神B式cに当り，a・bは塞ノ神B式dと考えられる。塞ノ神B式dは貝殻文による連続刺突文を主とするが，篦状の刺突具（先端部が丸味をおびたもの，三角状に鋭く尖るもの，細く薄いもの，爪形状をなすもの等さまざまである。）を用いている点は注目される。

9類以下は少量の出土であるのでまとめて記録する。9類は押型文土器である。[6]8の多重円状の土器は近年，木佐貫原遺跡，中尾田遺跡と出土例が増えてきている。10類は手向山式土器であろう。類部と胴部を区切る刻目凸帯を境[7]にして文様を分かつのであるが，沈線文以外の文様は不明であった。11類は阿高式土器，12類は出水式土器，13類は市来式土器である。

本遺跡からは180点あまりの石鏃が出土した。ほとんど全てが打製石鏃である。磨製石鏃はA類の2点がみられたが，Ⅲa層出土のものである。本遺跡はⅢa層から弥生式土器も少量出土しており，この石鏃も弥生時代のものと考えて良い。

一方，打製石鏃は，Ⅲ層出土の11点を除き，他はすべてⅣ層出土のものである。Ⅳ層は早・前期にあたるとみられ，これらの石鏃も縄文時代早前期のものであろう。分布範囲はⅢ層出土のものが，全面に点在しているのに対し，Ⅳ層出土のものはC－27区を中心にC－28，29区・D－27・28区にほとんど集中を示している。またD・E－31・32区，E－23・24区にもまとまりがみられた。また平基式石鏃はC－26区から30区にかけて出土した。

石鏃の形態は凹基式が90%以上を占めている。しかしながら，明確な「わたくり」を表現するものは66%あまりである。E類～K類などである。凹基式の中でもA・B類は抉[8]りが浅く，小さいもので平基式に類似したものが多い。また小石鏃としたものは小形であり，「わたくり」を作り出すのは不可能だからであろう。

石鏃の形態によって大きな差異が認められた。E類，J類などのように長さが2.5～3.5cm，

重さが3g 余りの大きな鏃と，小石鏃として分類した長さ1cm余り，0.2g 前後の小さな剥片鏃である。使用法や目的が異っているのであろう。小石鏃については，剥片鏃，細石鏃，小形の三角鏃など各種の呼称がある。

凹基式石鏃については，正三角形鏃（D類），二等辺形角形鏃（B・C・E・F・G類），円脚鏃（H類），楓形鏃（I類），長身鏃（K類），五角形鏃（L類），鋸歯状石鏃（M類）など多種類にわたっていることも貴重な成果であった。

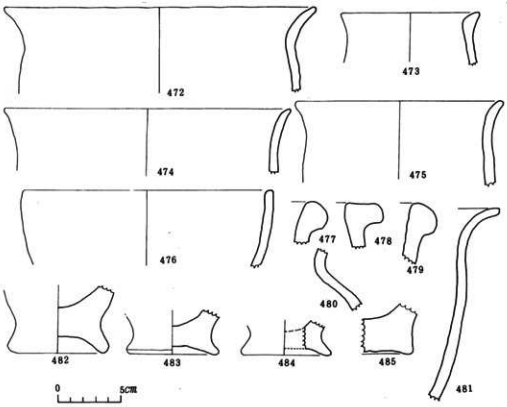
有茎鏃については，草創期にまれに見られるが，これは有舌尖頭器における舌部製作の技法が石鏃の一部に影響を残しているものであり，前期になって，東北地方北部以北において前期初頭に明瞭な石鏃の組成の一つとして出現する。

（註）

① 鹿児島県教育委員会「石 峰 遺 跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（12）１９８０年
② 鹿児島県教育委員会「三代寺遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（11）１９７９年
③ 鹿児島県教育委員会「加栗山遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（13）１９８１年
④ ①に同じ
⑤ 河口貞徳「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第６号　１９７２年
⑥ ⑤に同じ
⑦ 鹿児島県教育委員会「木佐貫原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（11）１９７９年
⑧ 鹿児島県教育委員会「中 尾 田 遺 跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（15）１９８１年
⑨ 鹿児島県教育委員会「放 光 寺 遺 跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（２）１９７６年

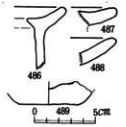
第3節　弥生時代

F－21区に4片，他は21区～30区にひろがって少量出土している。層はⅢa層上面やⅣ層溝状遺構の埋土，古道など一定していない。472～475，481は甕形土器の口縁部である。胴部がやや張り，頸部でやわらかくくびれ，口縁部にかけて外反する。内面に稜線を有しない。口唇部は丸く仕上げている。器壁は薄く，胎土は粗で砂粒子が露出しているものが多い。明黄褐色を呈し外面には媒が付着している。外反する口縁部分の内外面は刷毛目による横位の条痕で調整を施している。473はわずかに外反する小さい口縁部が付く。476は鉢形土器で直口気味に開き，口縁端部でやや内弯気味となる。内外とも灰褐色を呈し，刷毛目調整がみられる。477～479は口縁部に部厚い逆L字形の丸味を帯びた凸帯を付けている。器壁も厚く，くすんだ茶褐色を呈する。器形は不明である。22は明褐色を呈した壺形土器の肩部付近に当り，内面に指頭による調整痕がみられる。器面の磨滅ははげしく，砂粒子が露出している。482～485は底部である。いずれも浅い上げ底を有する。483～484は底面端部がやや外側へ張り出す。485は平底気味である。482は手捏状に調整し，他は刷毛目によって器面の調整を行っている。



第46図　弥生式土器（1）

486～488は甕形土器の口縁部で，石英・黒雲母などの微石粒を多量に含む砂質土を用いる。486と487は口縁端が内外に拡張する，いわゆる鋤先状の口縁で，上縁がややくぼんでいる。486はE28区から出土したもので，黄みがかった褐色を呈し，表面が相当に磨滅しているが，なで整形である。487はE－27区で出土し，外面はやや黒色化している。488はD－27区で出土したくの字状の口縁で，褐色を呈す。489はD17区で出土した壺形土器の底部で，丸みをもって胴部へ移る。茶褐色を呈し，焼成は良い。



第47図　弥生式土器(2)

第4節　古墳時代

古墳時代の遺物は土器のみで，器形として甕形土器・小型甕形土器・鉢形土器・高坏形土器がある。

甕形土器（490～502）は，口縁部がくの字状に外反し，脚台が付くものである。頸部には貼り付け突帯の付くものと，付かないものがあり，貼り付け突帯には押板圧痕あるいは布目圧痕が付く。脚台は割合に低いものである。胎土は石英粒などの砂粒を多く含む砂質のもので，表面の磨滅が目立つ。整形は内面・外面ともにヘラによる横なでをするものが多いが，490は口縁部の外面がたて方向のハケなで，内面をハケなでのあとヘラなでをしている。499も一部ハケなでをしている。

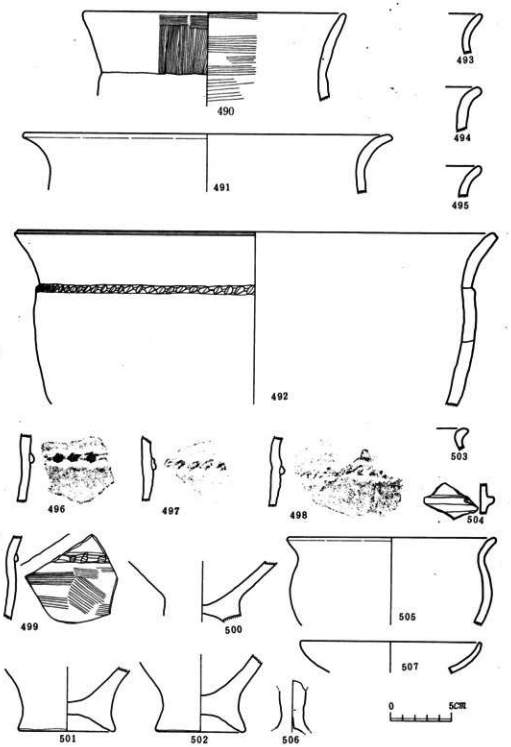
小型甕形土器（503）は口縁部が強く外反するもので，磨滅がいちぢるしい。

鉢形土器（504・505）は，まっすぐ立ちあがり丹塗りのものと，くの字状に外反するものとがある。丹塗りのものは，胴部に断面矩形の突帯が付き，胎土は細かい砂質である。

高坏形土器（506・507）は，口縁端が丸みをもっておさまる浅い坏部と，小型の筒部である。筒部から脚据へは開きながら屈曲する。砂質の胎土で，坏部の磨滅は全面に及ぶ。

図番	出土区	層	色	焼成度	備考	図番	出土区	層	色	焼成度	備考
490	D17	Ⅱ	茶褐	ふつう		499	E23	Ⅰ	茶褐	良好	
491	F21	Ⅲa	淡茶褐	〃	スス付着	500			〃	ふつう	
492	F27	〃	〃	良好	磨滅	501	D27	溝	淡茶褐	良好	
493	E20	〃	〃	〃		502	C·D17	Ⅱ	〃	〃	
494	F29	〃	褐	ふつう	磨滅	503			灰褐	ふつう	磨滅が目立つ
495	D30	Ⅲ下	茶褐	良好		504			淡茶褐	〃	丹塗り
496	D27	Ⅳ上	淡茶褐	〃		505	F24	Ⅰ	〃	〃	磨滅
497			茶褐	〃		506	〃	〃	〃	〃	磨滅が目立つ
498			淡茶褐	〃		507	D28	Ⅲa上	茶褐	良好	

第4表　古墳時代の土器一覧表



第48図　古墳時代の土器

第5節　中　世

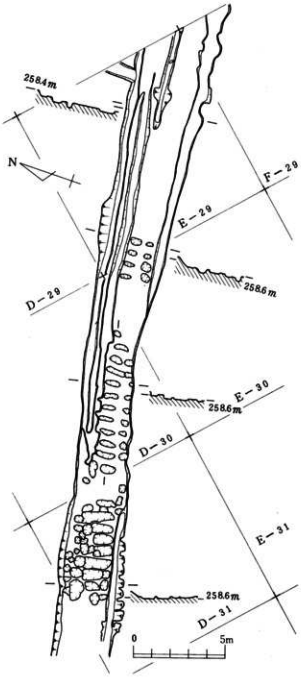
(1)　遺構

a．道路跡

C31区からほぼ東西に縦貫自動車道を横切るようにして道路跡が検出された。これはC31区からD31区・D30区・E30区・E29区を通り，F29区・E28区へと続いている。調査した範囲では完全に埋没し，土手の下になっていたが，東側は現在でも幅1mほどの農道として利用されており，西側は現在，竹などが繁茂して通行不能だが，掘り切りの道路としてその痕跡をとどめている。これは急傾斜でもって西側へ下降し，町道長谷ー綾織線と接している。

道路面は非常に固くなっており，茶褐色の固い土がうまっている。道路の幅は1.6m前後を測り，部分的にはその両脇に幅50cm，深さ10～30cmの溝がある。溝のあり方からみると少なくても3回以上，幅の移動があったらしい。溝の底は鉄分が凝固し茶褐色に変化している。道路面にはいわゆるポットホールと呼ばれる凹凸が規則性をもって並んであり，多量の降雨時には流水があったことを示している。

道路面には鉄製刀子・土師器・白磁・青磁・天目・瓦質土器・石鍋などが出土している。これらは15～16世紀頃のものであり，この道路跡の年代を示している。



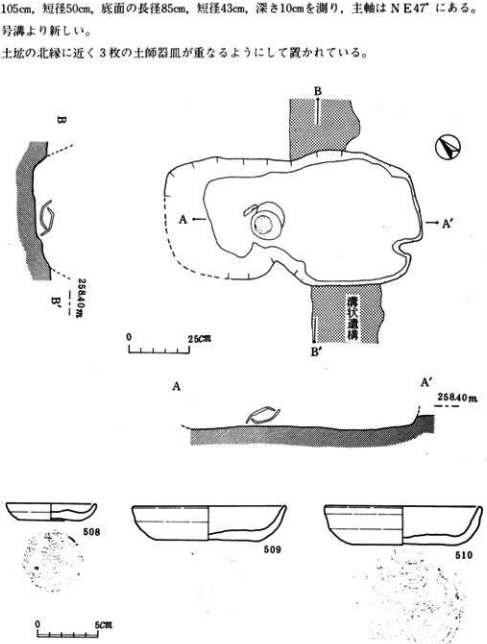
第49図　道路跡

b．土　坑

① 土坑1

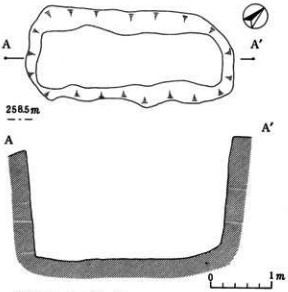
E22区で検出された黒色土のはいっただ円形の土坑である。やや不規則であるが，上面の長径105cm，短径50cm，底面の長径85cm，短径43cm，深さ10cmを測り，主軸はNE47°にある。1号溝より新しい。

土坑の北縁に近く3枚の土師器皿が重なるようにして置かれている。

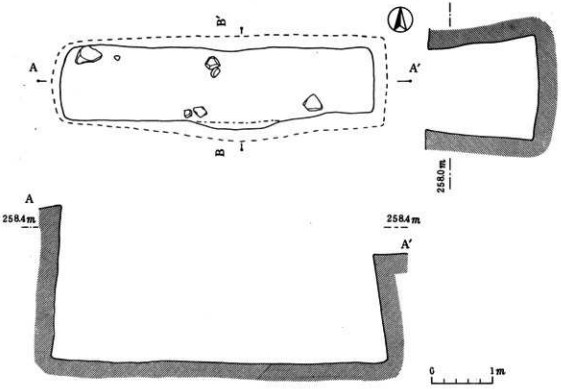


第50図　土坑1とその出土遺物

508は小型の皿で，口縁直径7.5cm，底部直径5cm，高さ1.4cmを測る。底に指圧痕とヘラ様圧痕が各1ケ所みられる。509と510は重なって検出されたもので，509が口縁直径12.8cm，底部直径8.6cm，高さ2.8cmを測る。内面・外面ともにススが付着している。510は口縁直径13cm，底部直径8cm，高さ3.2cmを測る。これらはすべて回転糸切底で，焼成は良好である。胎土は精製した土を使い，淡茶褐色あるいは茶褐色を呈する。



第51図　土　坑　2



第52図　土　坑　3

②土坑2

E33区で検出された角の丸い長方形土坑である。上面で長辺170cm，短辺75cm，底面で長辺150cm，短辺40cm，深さ90cmを測る。主軸はNE42°にあり，黒色土がはいっている。

③土坑3

D30区で検出された長方形土坑である。袋状を呈しており，上面で長辺255cm，短辺60cm，底面で長辺275cm，短辺80cm，深さ90cmを測る。主軸はNE88°にあり，黒色土がはいっている。周縁部に7個の角礫がみられる。

C．溝

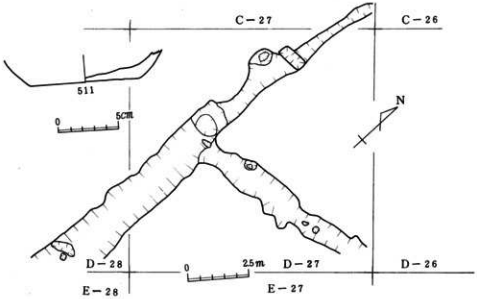
①1号溝

C27区・D27区・D28区に検出された溝で，D27区で南北方向に続く溝と東西方向に続く溝が交わっている。黒色土がはいっているが，残存度が悪いために，三つの端部ともその延長が不明である。幅は40～160cmを測り，南北方向に約17m，東西方向に約7.5m検出された。

D28区の溝内より出土した土師器皿511は，底部の直径が9cmあり，底部切離しは回転糸切りである。精製した良質土を用い，焼成は良好である。茶褐色を呈す。

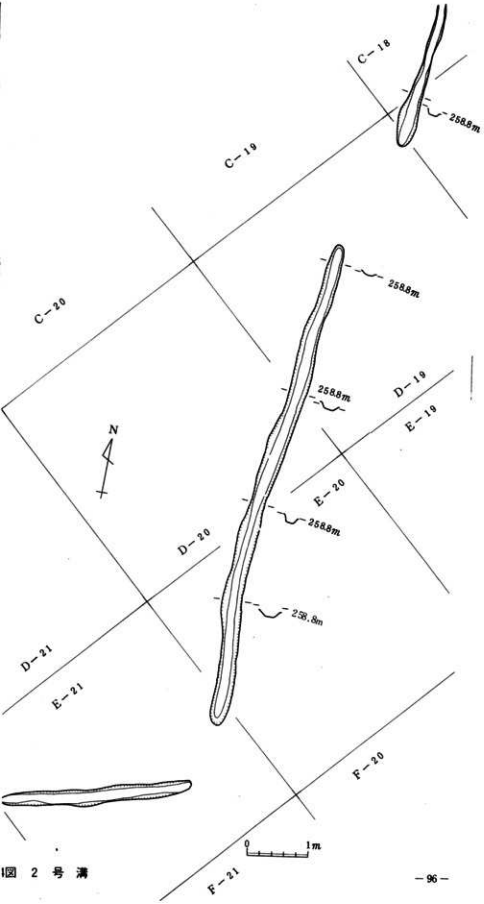
②2号溝

D23区からほぼ東西方向へD22区・E22区・E21区に向かい，ここでほぼ直角に向きを変え，E20区・D20区・D19区・D18区・C18区へと向かう溝である。黒色土がはいっているが，残存度が悪いため3ケ所で途切れ，さらに両端の延長も追求できなかった。幅は70～80cm，深さは5～20cmを測り，延長は東西方向に約280m，南北方向に約330m検出された。



第53図　1号溝とその出土遺物

第5


C－18
C－19
C－20
D－19
E－19
E－20
D－20
D－21
E－21
F－20
F－21
N
258.6m
258.8m
258.8m
258.8m
258.8m
0
1m

1図 2 号 溝

(2) 遺　物

中世の遺物には土師器・須恵器・磁器・陶器・瓦質土器などの土器と，土製品（ふいごロ），石製品（石鍋），鉄製品（刀子）がある。

a．土師器 (512～530)

①皿（512～522）

口縁端は丸みをもっておさまるが，底部から口縁へ向かってまっすぐのびるものと，やや外反するものとがある。底部切離しは513が不明であるが，他は全て糸切りで，514は回転糸切りである。石英粒の多い良質土を用いている。

②坏（523～526）

坏の口縁部も，まっすぐのびるものと，やや外反するものとがある。口縁端は細くなっておわる。底部は皿との分別がし難い。丸みをもって口縁へのびるものと，底部付近で外へ張り出すものとがある。切り離しは糸切りであるが，523と524はそのあとヘラでナデている。また525はするどいもので木の葉状に線刻を施している。526は内面にボロが付着しており，そのために土師器でありながら須恵質に焼けている。

③甕（527～529）

口縁端が肥厚し，開きながら胴部へ移る器形をしている。527と528は口縁直径9.6cm，8.8cmと小型で，内面・外面ともヘラによるていねいなナデ整形で仕上げている。529も口縁直径14.6cmとやや小型であるが，外面はヘラによるたてナデ，内面は口縁部がハケによる横ナデ，胴部がヘラによるたて方向のケズリである。微石を多量に含んだ砂質の胎土を用いており，焼成度は良い。

④火舎（530）

断面が矩形の口縁部をもつ火舎で，口縁の少し下に二重の正方形と×印を組み合わせたスタンプ文を巡らしている。外面は研磨に近い横ナデ，内面はていねいな横ナデで仕上げる。こまかく精製した胎土を使っている。

図番	器形	出土区	層	色	焼成度		図番	器形	出土区	層	色	焼成度	
512	皿	D 28	2下	茶 褐	ふつう		522	皿	D17	2	茶 褐	ふつう	
513	〃	F 27	〃	〃	〃		523	坏	E30	〃	〃	〃	
514	〃	E 22	2	〃	良		524	〃	D29	2下	乳 灰	〃	
515	〃	E 23	1	乳 褐	〃		525	〃	E71	〃	淡茶褐	〃	
516	〃	F 24	〃	〃	〃		526	〃	E27	〃	茶 褐	良	
517	〃	F 23	〃	〃	ふつう		527	かめ			淡茶褐	〃	
518	〃	E 16	〃	〃	〃		528	〃	C27・C29	3 a	〃	〃	
519	〃	D 27	2	淡茶褐	良		529	〃	D16・D17	〃	茶 褐	〃	
520	〃	採 集		黒 紫	〃		530	火舎	E29	古道	淡茶褐	〃	
521	〃	D 26	3 a	茶 褐	〃								

第5表　土師器一覧表

b．須恵器（531～533）

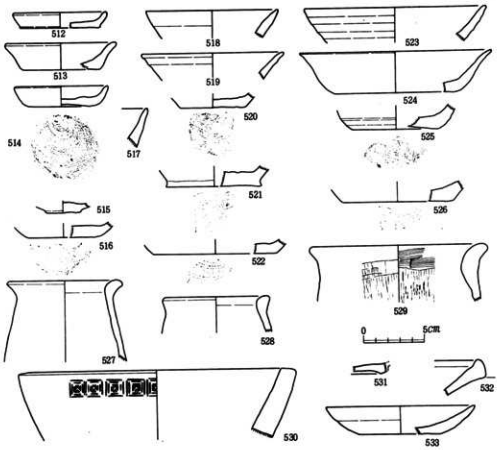
坏・鉢・皿の3点だけが出土している。531はE24区1層で出土した坏の高台部分で，灰色を呈す。532はF15区1層で出土した鉢の口縁で，まっすぐ胴部に移る。口縁端は内側にやや拡張する。暗灰色を呈し，軟質に焼けている。533は口縁直径12.2cm，底部直径6.8cm，高さ2.3cmを測る皿で，開きながらまっすぐ口縁端へ向かい，端部は細くなっておわる。底部はヘラナデで仕上げる。内面にはボロが付着し，そのために磁器風に焼けている。また，灰色を呈しているが，部分的には紫褐色を呈する。

c．磁器（534～558）

白磁と青磁がある。

①白磁（534～536）

椀の高台が3点出土している。534はD31区の古道から出土したもので，小型である。黄みをおびた白色土に貫入のはいった白色釉をかけているが，外面の底部から高台には釉がかかっていない。535は底部から高台へ移る部分に段をもつもので，灰白色土に緑がかった白色釉が



第55図　土師器・須恵器

かかっている。536はF24区1層で出土したもので，やや大きい。床付き部分には釉がつかない。灰白色土に青っぽい白色釉がかけられる。

②青磁（537～558）

坏・皿が出土している。口縁の形で坏が2種，皿が2種に分けられる。また底部も4種に分けられる。

坏Ⅰ類（537～539）　口縁端がやや肥厚するものである。538は釉が厚く，内面に陰刻らしきものもみられるが，図柄がはっきりしない。

坏Ⅱ類（540～543）　口縁が端部近くで外反するものである。540は全体が復元できる唯一のもので，口縁直径11.4cm，高台直径6.4cm，高さ3.7cmを測る。高台の内面には釉がかからない。口縁直径は13.4cm～15.4cmと割に大きい。

皿Ⅰ類（544）　やや外に反って端部へ向かうもので，口縁直径15.6cmと大きい。胴部より下には釉がかからない。

皿Ⅱ類（545～548）　口縁部が強く外反するもので，外面に片彫りの無稿蓮花文，内面に横線のあるものがある。

底部Ⅰ類（549）　いわゆる碁笥底で，底部には釉がかからない。釉が青白く，青白磁の可能性もある。

底部Ⅱ類（550）　内底部および底部・高台内に釉がかからない。高い高台である。底部と高台の境に明瞭な段をもつ。

底部Ⅲ類（551～556）　高台が直に立ち上がるもので，低い高台である。釉は，高台内面にかからないもの（551・552・554），高台内面の一部にかからないもの（553），床付き部より内側は全体にかからないもの（556）があり，内面はほとんど全体にかかっているが，554は内底部中央にも釉がなくて光沢を呈している。

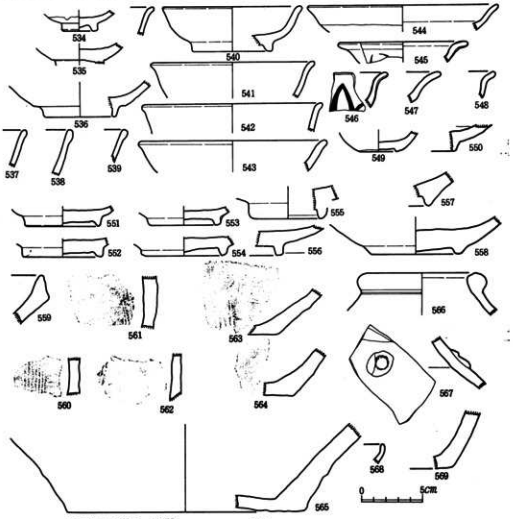
図番	出土区	層	土の色	釉の色	貫入	気泡	備考	図番	出土区	層	土の色	釉の色	貫入	気泡	備考
	F23	Ⅰ	灰白	オリーブ					D30	古道	灰白	緑	○		
	〃	〃	灰	緑	○				F27	〃	〃	明緑	○		
	F25	〃	白灰	オリーブ	○				D30・D31	〃	〃	淡い青緑	○		
	D29	Ⅲa	〃	青みがかった緑	○				F29	〃	白灰	緑	○		
	M6	Ⅰ	〃	〃					〃	〃	〃	明るい緑			
	E25	Ⅳb上	〃	オリーブ	○				D31	〃	灰	淡緑	○		
	F28	Ⅱ下	〃	青みがかった緑	○	○			F29	Ⅱ下	白灰	明るい青緑			
	〃	Ⅱ	〃	オリーブ	○				Ⅰ・Jトレ	Ⅰ	灰	青ｉｔブ			
	E29	Ⅲa	灰白	〃		○			F26	〃	灰白	オリーブ	○		
	E26	Ⅰ	灰	緑	○				F28	Ⅱ下	白灰	白くあせた緑			
	E26	〃	〃	明るい緑		○			D31	古道	灰	濃緑	○		
	F25	〃	〃	暗緑	○										

第6表　磁器一覧表

底部Ⅳ類（557・558）　高台から胴部へ明瞭な段をもたずに移るもので，割合に大型である。557は高台内面と底部との境に釉切れがみられる。

d．陶器（559～569）

559～564は備前焼の摺鉢である。口縁部は上方に拡張し，底部は安定した平底である。8条のかき目が下から上へ施されるが，使用が顕著で相当に磨滅している。赤みがかった茶褐色あるいは茶がかった灰褐色を呈し，胎土は小石の多く含まれた砂質土である。565は底部直径19.5cmを測る大型の甕の底である。外面はハケナデのあと，たて方向のヘラナデ，内面は横方向のヘラナデである。赤みがかった茶褐色を呈し，内面には緑色の自然灰釉がかかっている。9mm大の円礫をはじめ，石英などの小礫を多く含む砂質の胎土である。566は口縁が玉縁状を呈し，胴部へ強く広がる壺で，外面に黄褐色の釉がかかっている。頸部に凹線が一条巡っている。567は肩部にこぶ状突起の貼り付けられた甕で，黒灰色を呈するが，外面には暗緑色の釉がかかっている。内面には稜がみられる。568と569は灰白色土を使った天目である。568は



第56図　磁器・陶器

小型のまりの口縁，569はかめの底部である。

図番	種　類	出土区	層	色	備　考	図番	種　類	出土区	層	色	備　考
559	備前摺鉢	D1・2	Ⅰ	赤茶褐	内側に胡麻	565	甕			赤茶褐	
560	〃	E26	〃	〃		566	壺	E30	Ⅰ下	灰	
561	〃			〃		567	かめ	F28	Ⅱ下	茶褐	
562	〃			〃		568	天目まり	F22	Ⅰ	灰白	
563	〃	F28	Ⅱ下	灰褐		569	天目かめ	D31	古道	〃	砂質土
564	〃	M6	Ⅰ	赤茶褐							

第7表　陶器一覧表

e．瓦質土器

こね鉢・つぼ・鉢・摺鉢がある。

①こね鉢（570）

口縁直径28cmを測り，端部へ向かって広がる。内面・外面ともハケナデである。

②つぼ（571・572）

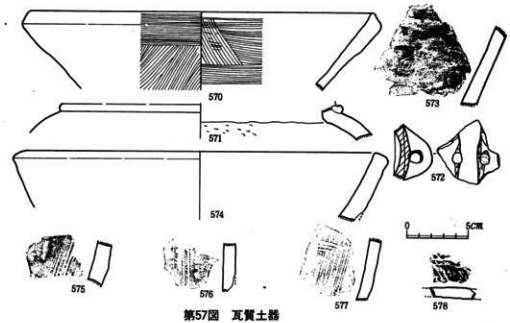
571は頸部にかまぼこ形の貼り付け突帯と，その上部に鋸歯状の突帯がある。外面はていねいな研磨で，内面の頸部以下はヘラ削りである。572は胴部上半にある突起で，孔がある。

③鉢（573）

内面に細いものでかかれた線刻がみられる。意味は不明である。

④摺鉢（574～578）

口縁部は断面矩形を呈する。かき目は7条が下から上へ施される。



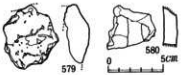
第57図　瓦質土器

f 土製品（579）

F24区で出土したふいご口の破片である。微礫の多い砂質土を使い，外面には溶かしたボロが多量にアメ状に付着している。

g 石製品（580）

滑石製石鍋の小破片で，古道で出土している。



第58図　土製品・石製品

（3）小　括

県内では最近，数多くの中世の遺跡が調査され，出土する遺物もとみに増加している。しかし，量の増加とは裏腹に中世遺物の研究は遅々として進んでいない。その大きな原因のひとつに遺構に伴う遺物が少ないという事実がある。そして中世の遺跡の多くが平安時代頃から始まることによる遺物の混在という事実がある。

こうした事情の中で，木場A遺跡出土の遺物がもつ意味は，これが遺構に伴なうものでないという弱みはあるものの，限定された時期の一括遺物であるという点で重要である。もちろん将来できるであろう細分編年からみれば，あまりに大ざっぱであるが。

土師器の皿・坏の底部切離しにはヘラによるものと，糸によるものとがあり，従来これらは共存することが多い。ここでは全て糸切離し底である。ヘラ切離しから糸切離しへの交替が，いつか，今ははっきりしない。しかし，ここでは完全に糸切離しへ変わっている。

土師器の皿・坏の法量もほぼ一定している。つまり，皿は口縁直径が7.5～8.2cm，高さ1.3～2.2cmで，坏は口縁直径12.8～13cm，高さ2.9～3.2cmである。坏の中には口縁直径15.7cm，高さ3.4cmの大型のものがある。土師器のかめは胴部のあまり張らないものである。また，土師器のなかに，内面にボロの付着したものがある。中世の山城ではよくみられるもので，るつぼの用途をはたしたものである。ここではふいごの羽口も出土している。

編年の進んでいるものに備前焼がある。ここの摺鉢は間壁氏の編年によるⅣ期，16世紀頃のものである。また，青磁は竜泉窯系のもので，白磁も同様に15～16世紀頃のものとされる。したがって，当遺跡の年代ははぼ16世紀頃と考えてよかろう。

16世紀頃と思われる遺構には古道・溝・土坑などがあり，この周辺に住みついていたことを予想できる。ところで，その性格はどういったものであろうか。当遺跡の西方約600mには中世の山城で，のちには石垣も巡らされた松尾城がある。また，500mほど東には遠目番所のひとつである楠原の関がある。ここで検出された道路跡はまさにこの両所を結ぶ道であろう。松尾城は11の掘で周囲を区切っているが，東方は外堀・内堀が境界となっている。これからすれば当遺跡は城外になっている。出土する遺物の量も少なく，こうしたことより中世の当遺跡は主たる生活の跡を残していない遺跡といえよう。

第6節　近　世

(1) 遺　物

近世の遺物に古銭と陶磁器がある。

a古　銭（581）

寛永通宝が出土している。裏面に文という字がある。

第59図　古　銭

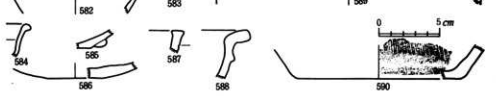
b陶磁器（582～590）

近世の陶磁器はすべてⅠ層から出土している。

582と583は椀である。582は口縁直径11.9cmの椀で，丸みをもって立ちあがる。内面・外面とも鉄釉がかかる。F21区出土。583も同じような器形をしており，口縁部付近に灰白色，その下に黄みをおびた茶褐色の釉がかかっている。貫入がみられる。J２区出土。584は口縁端が逆L字状を呈する小鉢で，内面の口縁付近から外面にかけて黄みをおびた茶褐色の釉がかかっている。J３区出土。585は内面に貫入の多い淡い黒褐色釉がかかった坏の安定した底部である。外面は露胎で，ススが付いている。また，外面の底部付近には焼成時における土玉が残存しており，重ね焼きの手法がうかがえる。J２区出土。586はちょかの底部で小さい平底である。E29区出土。587は口縁端が内外にやや拡張する鉢で，口縁上部は露胎となっており，ここに目跡がある。口縁下に２条の凹線がみられる。黒っぽい茶色の土に，茶色と黒色のまざった釉がかかっている。E22区出土。588は口縁端が外へ強く折れ曲がるかめで，口縁下に三角突帯がみられる。赤みがかった茶褐色を呈する土に，紫がかった茶褐色の釉がかかる。ボロが多くかかっている。J２区出土。589は口縁直径23.5cmを測るすり鉢で，口縁上端には二条の凹線が巡る。口縁端は内外に肥厚し，内面にはかき目が下から上へ密に施される。茶褐色を呈する土で，外面にはアメ釉がかかっている。F22区出土。590は安定した平底のカメの底部である。底および内面には釉がかからない。外面には紫がかった茶褐色の釉がかかるが，貝の目がみられる。F22区出土。

B小　括

近世の土器は考古学的に細分編年まで至っていないが，当遺跡の土器はほとんどが薩摩焼であり，江戸時代のものと思われる。



第60図　近世の陶磁器

第5章　まとめにかえて

発掘調査の結果，木場A遺跡は下層より旧石器時代，縄文時代早・前期，中世の三文化層からなる複合遺跡であることが判明した。時代ごとに若干まとめておきたい。

旧石器時代

シラス直上のⅥ層下部，Ⅶ層上部から遺構と遺物が検出された。本県では旧石器時代の遺跡は細石器文化が中心でナイフ形石器を伴う遺跡は，上場遺跡，小牧３Ａ遺跡等数える程しか確認されていない。また遺構も上場遺跡の住居跡・集石・土坑以外は知られていなく，当遺跡の集石４基は貴重なものである。ナイフ形石器，スクレィパー，剥片等は層位がはっきりと確認されているだけに貴重な資料となり，また原石の豊富さも，石材共給源等の研究によりはっきりとしてくるのではなかろうか。

Ⅳ層下部において細石刃・調整剥片の出土をみたが，これは山崎Ｂ遺跡の桜島パミス層の下部にあたるものと思われる。Ⅳ層下部の遺物が少なかったことから，木場Ａ遺跡の内には，細石器文化時代の生活痕は少なかったが周辺にこの時代の遺物，遺構が発見されるものと思われる。

縄文時代

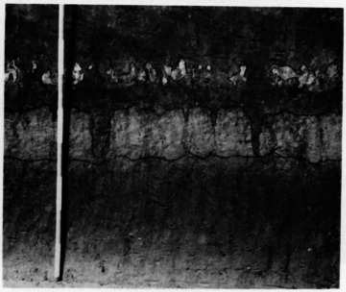
遺構として集石が検出された。主にⅣ層にみられる。拳大の礫を集めたもので８基検出した。礫の周辺に炭化物等の直接火をうけた形跡はみられないが，赤化した礫の存在から炉としての性格も考えられ，今後検討されなければならないものである。周辺での類例として山崎Ａ遺跡，花ノ木遺跡，山崎Ｂ遺跡等にもみられ，花ノ木遺跡では平栫式土器，塞ノ神式土器に伴うとされ，当遺跡でも吉田式，前平式，塞ノ神式土器と共伴することから縄文時代早期～前期に属すると考えられる。

中世以降

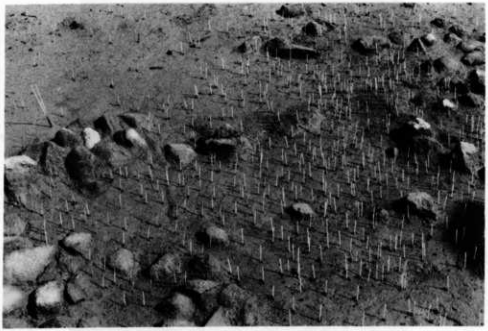
中世以降の遺物は，遺構に伴うものでないが，限定された時期の一括遺物であるということが特徴である。土師器の皿，坏の法量はほぼ一定し，底部切離しは糸切り離しである。備前焼青磁，白磁等より当遺跡の年代ははぼ16世紀頃と考えられ，地名の由来ともなった松尾城に関連する遺跡と考えられる。

①鹿児島県教育委員会　「山崎Ａ遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財調査報告（17）　1981
②　〃　「花ノ木遺跡」　〃　（1）　1975
③　〃　「山崎Ｂ遺跡」　〃　（18）　1982

図版 1



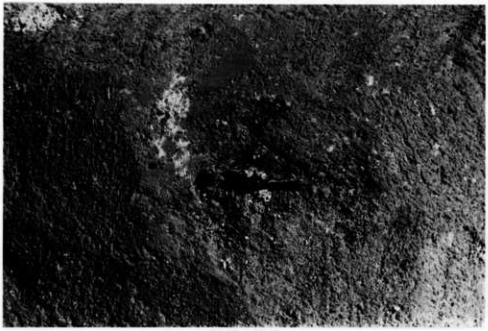
1. 層　　序



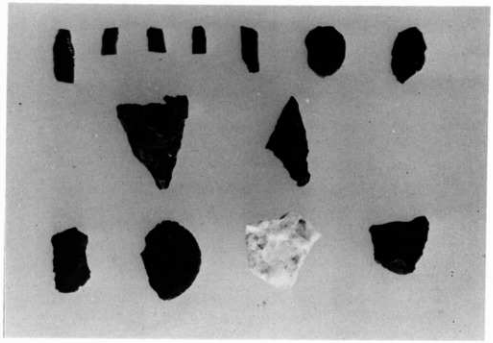
2. 集石と炭化物

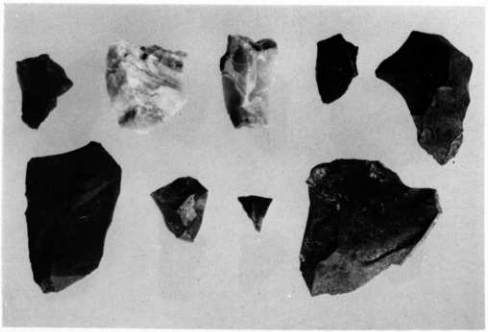
1. 集石と断面

2. ナイフ形石器出土状態（頁岩）

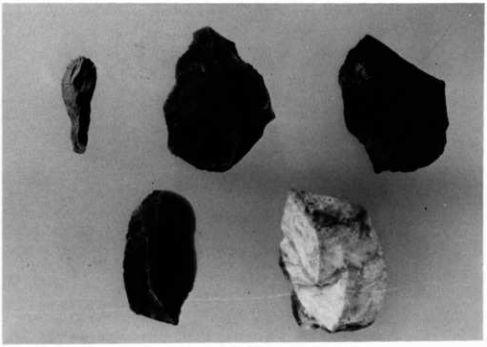


2. 剥片石器出土状態

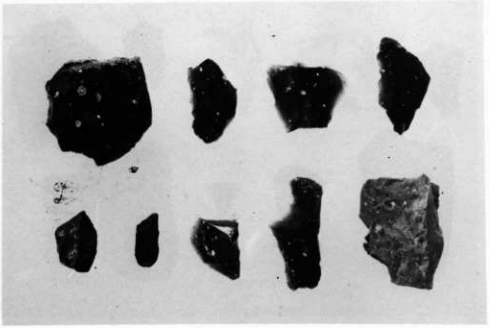




2. 剥 片（1）



1. 剥　片（２）



2. 剥　片（３）

1. 剥 片（4）

2. 剥 片（5）

1. 発 掘 状 況

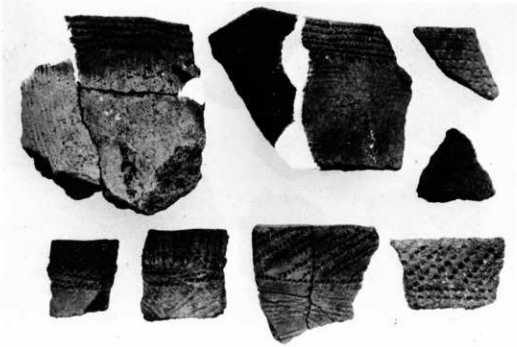
2. 縄文時代集石
1. 2. 3

1. 集 石 1. 2

2. 6類土器出土状態

1.　有柄石鏃出土状態

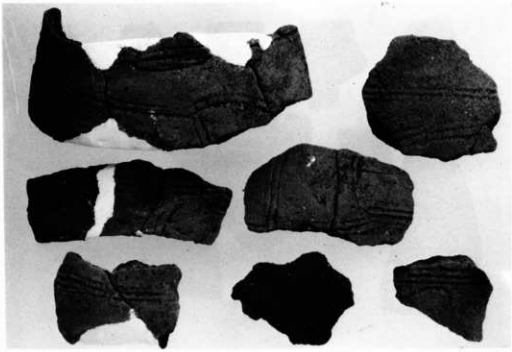
2.　蜂ノ巣石出土状態



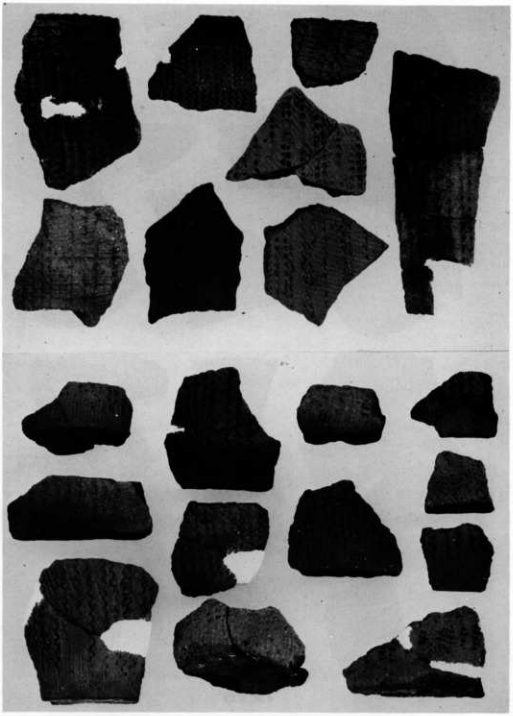
1.　１類土器

2.　１類土器

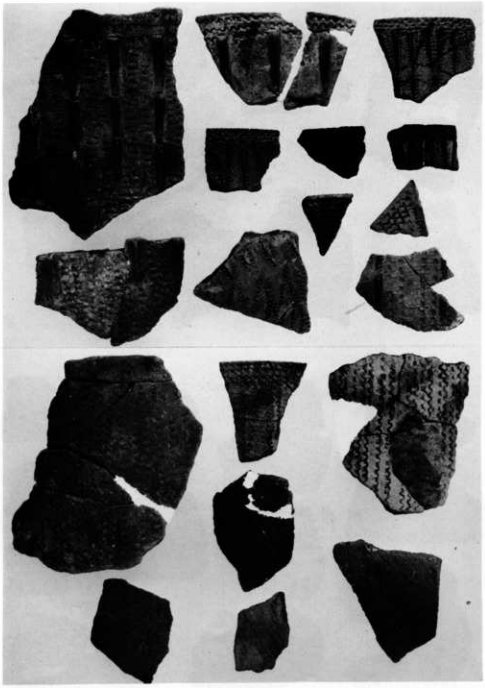
1.　１類土器



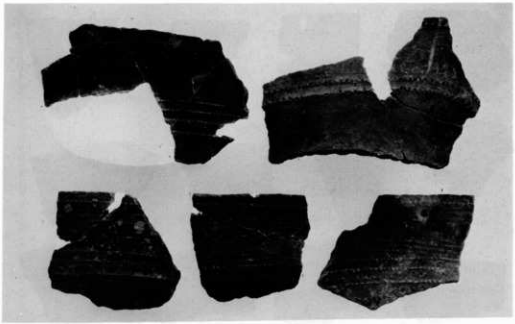
2.　２類土器



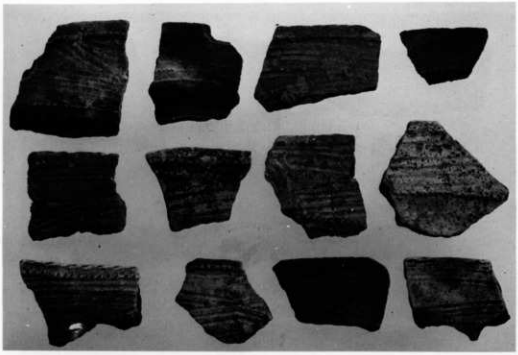
３類土器（上左２）４類土器



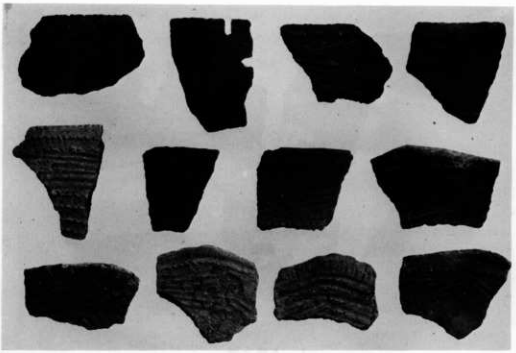
４類土器



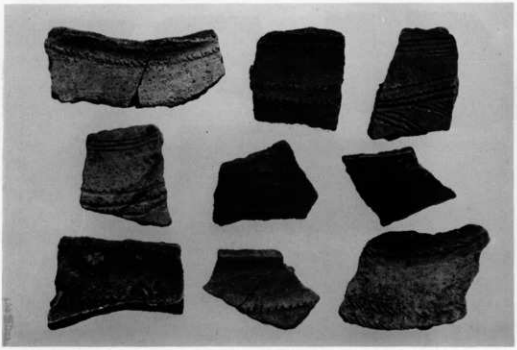
1.　５類土器



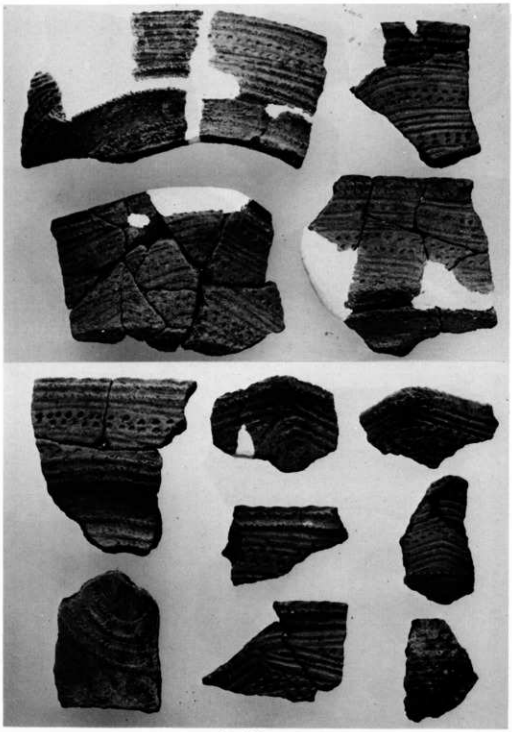
2.　５類土器



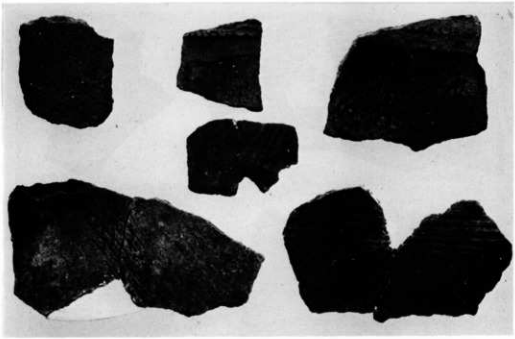
1.　５類土器



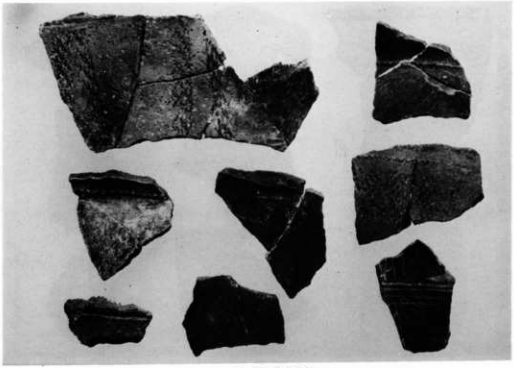
2.　５類土器



６類土器

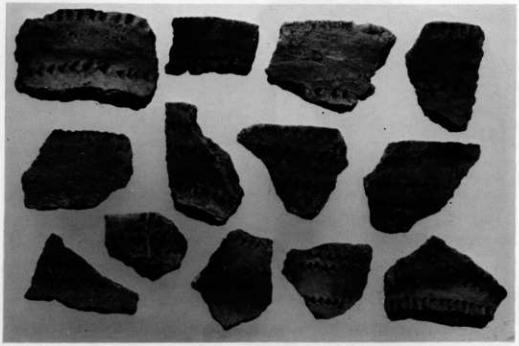


1.　７類土器

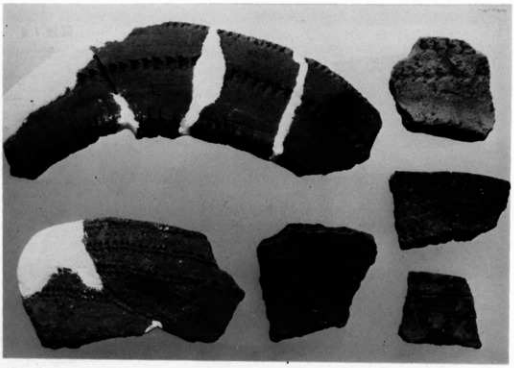


2.　７類土器

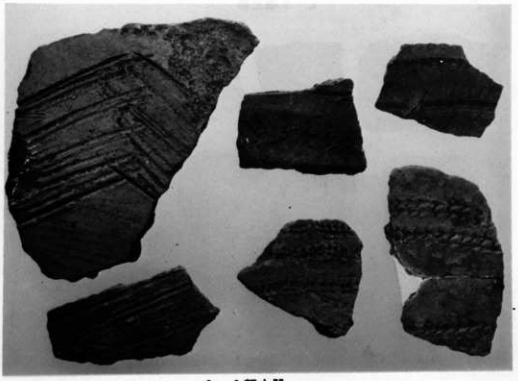
1.　７類土器



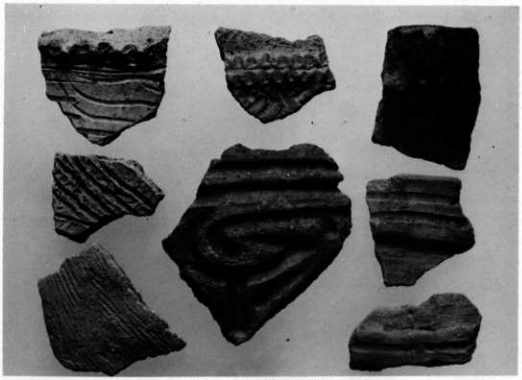
8.　８類土器



1.　８類土器

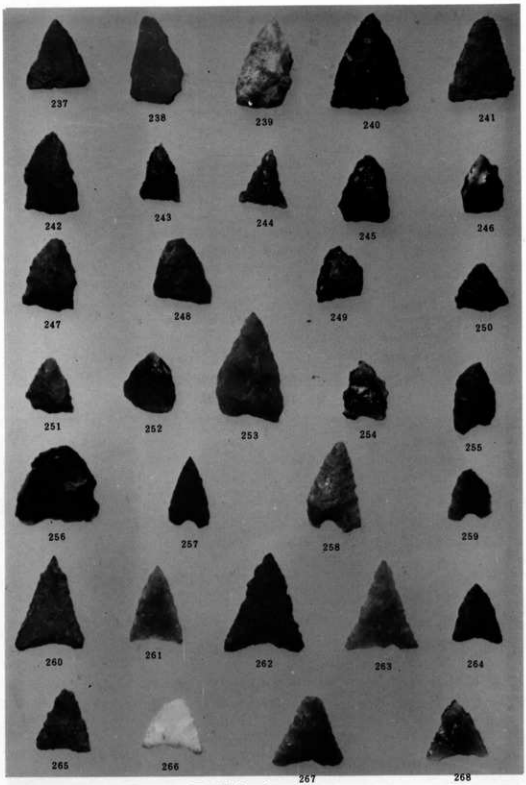


2.　８類土器

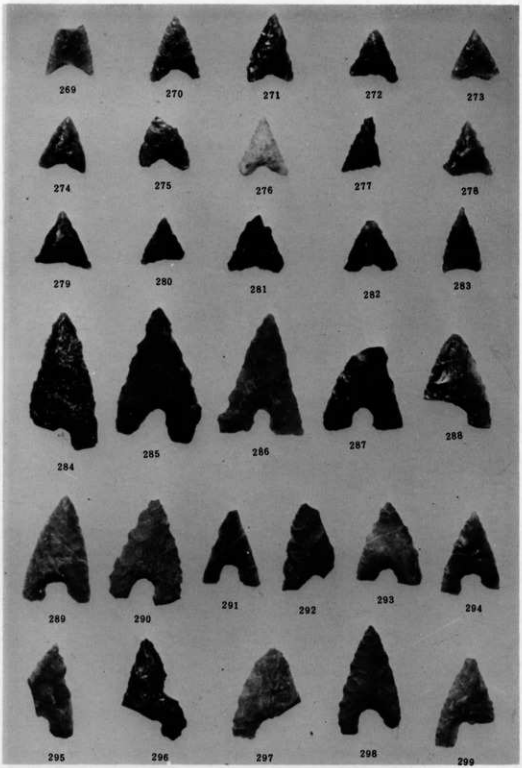


1.　10～13類土器

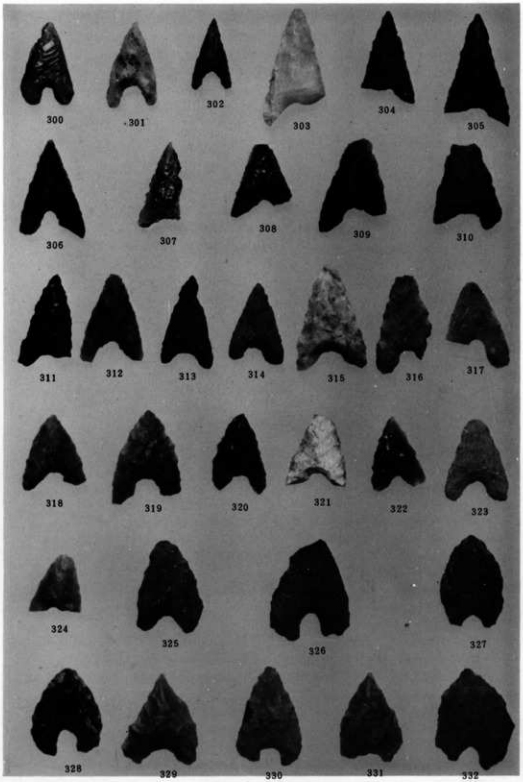
2.　9類土器


237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268

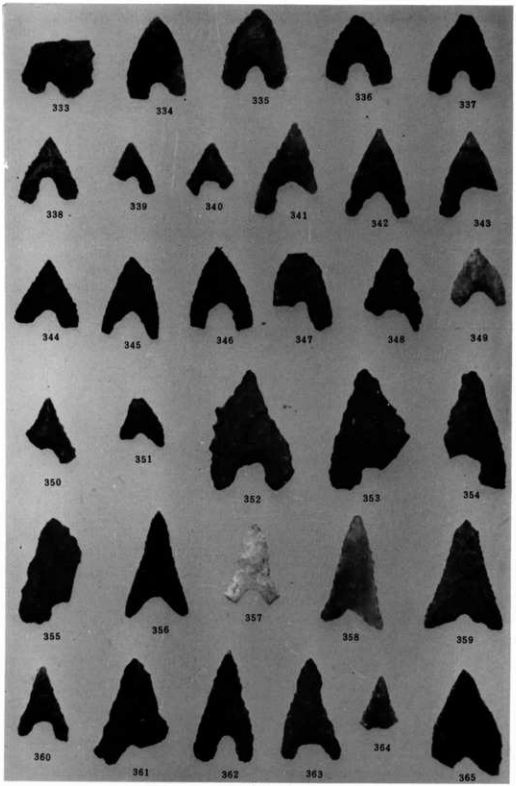
石　鏃（１）


269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299

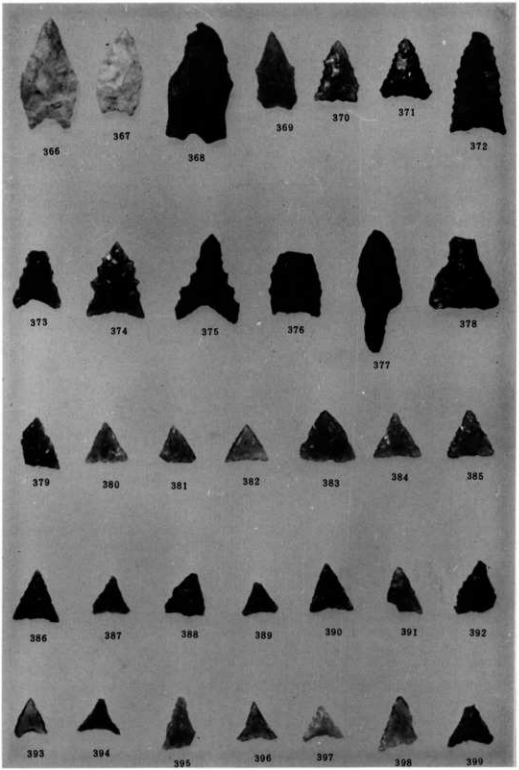
石　鏃（２）


300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332

石　鏃（３）


333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365

石　鏃（４）


366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399

石　鏃（５）